

相互協力
研究分科会報告

創刊号

私立大学図書館協会東地区研究部会
相互協力研究分科会



THE INSTITUTE OF ELECTRICAL AND ELECTRONICS ENGINEERS, INC.

IEEE

アメリカ電気・電子工学技術協会

定期刊行物 総代理店指定のご案内

このたび弊社は、アメリカ電気・電子工学技術協会 (IEEE: The Institute of Electrical and Electronics Engineers, Inc.) より、日本における販売総代理店の指定を受けましたのでお知らせいたします。同協会の刊行するすべての定期刊行物に加えて、書籍等の製品 (契約による例外を除く) がこの対象となり1984年、9月1日よりサービスを開始いたしましたのでよろしくお願ひ申し上げます。

1884年に創立され、IEEEとして日本の多くの皆様に広く親しまれております当協会は、工学分野では、世界最大規模を誇り、世界各国から25万人を超える会員を集めております。

先端技術の研究・開発をめぐる各国の先陣争いは極めて激しくなっており、エレクトロニクス技術、通信技術もその主要な柱の一つとして多くの注目を集めています。光通信、放送・通信衛星などの新しい通信手段の開発と、LSIをはじめとしたマイクロエレクトロニクスの発展によって、多種多様なニューメディアが相ついで開発され、普及しつつあり、これらは、未来の社会に大きな変革をもたらすものとして、大きな話題の一つとなっております。

ニューメディアの一つ一つは、専門化された各分野に属しますが、それらが社会に与えるインパクトは非常に広範囲にわたり、また、専門分野相互の境界も明確に線を引くことが難しく、学際部分を多く含むようになってきています。このように、専門化・細分化が進行する一方、社会とのかかわり、他の専門分野との結びつきによる学際化が一層進行するなかで、研究者の情報に対するニーズもますます多様化していくと考えられます。

日本の皆様が、研究・開発をさらに進めていくうえで、これらIEEE出版物が十分にお役に立つことを念願し、サービスに万全を尽くしたいと存じております。

今後ともよろしくご愛顧のほどお願ひ申し上げます。

▶ご注文・ご照会は、最寄りの洋書取扱店または弊社本・支店外国雑誌担当までお申しつけください。



日本総代理店

本社・日本橋店：〔〒103〕東京都中央区日本橋2-3-10 ☎(03)272-7211 振替東京7-5番

支店・営業所—東京(お茶の水・丸の内・内幸町・浜松町)・北千住・土浦・新潟・水戸・八王子・甲府・松本・札幌・旭川・仙台・弘前・秋田・盛岡・山形・郡山・筑波・横浜・名古屋・静岡・岐阜・三重・金沢・富山・福井・京都・滋賀・大阪・奈良・神戸・姫路・岡山・松山・広島・山口・福岡(店屋町・天神)・長崎・鹿児島・沖縄／ニューヨーク・ロンドン・シンガポール

相互協力研究分科会報告（創刊号） 正誤表

	誤	正
表紙・標題紙・奥付の 発行者名	…協会東地区研究部会	…協会東地区部会研究部
背	(昭和50～53年度)	(昭和55～58年度)
発刊の辞 (2p)	…協会東地区研究部会	…協会東地区部会研究部
目次 (4p) 下 6行目 下 1行目	…東地区研究部会細則 …刊行したいとおも	…東地区部会研究部細則 …刊行したいと思います。
79p 上 6行目	(立教大学)	(文教大学)
85p 上 3行目	政文編	欧文編
91p 左上 2行目	東地区・研究部	東地区部会研究部
98p 名簿 左下 3校目 右上 9校目 右下10校目	野田分科 立正大学 熊ヶ谷 石川 美佐	野田分館 (現記念図書館) 立正大学 熊谷 石井 美佐江
102p 上 8行目 上 9行目	(回答館38) 役 2倍	(回答館36) 約 2倍
103p 上 9行目	急劇	急激
104p 上 1行目 上 9行目 下 8行目	…受付状況 …国内依頼 (回答 …) 昭和58年総件数10,133件	…受付状況 (回答館数18, 規模別では各 6館) …国内依頼 昭和58年総件数10,484件
107p 右上 1行目 下 4行目	所誌 (4) 以下を右のように直す	書誌 (4) 総件数では小規模館は 依頼は少ないが受付は多く、 依頼の約3倍となっている。 これは(6)で述べているよ うに、国立音楽大と女子美術 大が総件数に反映されている からである。それをのぞくと 依頼のほうが多くなる。
108p 図-6-2	<input type="checkbox"/> 受入 <input checked="" type="checkbox"/> 発行	<input type="checkbox"/> 発行 <input checked="" type="checkbox"/> 受入
奥付	編集委員 小川圭子	編集委員 小川桂子

相互協力
研究分科会報告
創刊号

私立大学図書館協会東地区研究部会
相互協力研究分科会

発刊の辞

大学図書館の歴史の中で、今ほど、相互協力という言葉が使われた時期はなかったであろうし、この風潮は、東京大学文献情報センターの活動と共に、今後ともますます盛んになっていくだろうと思われる。相互協力研究分科会が5年前に発足し、暗中横索・試行錯誤をくり返しつつ、曲りなりにも活動報告を出そうとしたのは、過渡期に当る現在の私大図書館の実情をしっかりと見つめ、実態を記録として留めることを主眼に、できれば、これからの取り組み方の方向づけをしてみたいと思いたったからである。拙い記録ではあるが、相互協力研究分科会の最初の一步として御覧頂き、ご鞭撻頂ければ幸に存ずる次第である。

昭和60年3月

私立大学図書館協会東地区研究部会

相互協力研究分科会

世話人 栗屋皓子

— 目 次 —

発刊の辞

アメリカにおける図書館相互協力の周辺	奥泉栄三郎	5
慶応義塾大学三田情報センターにおける海外ILL実務の実際	松本 和子	25
日本大学・総合目録について	湯浅 ツル	35
ライブラリー・インストラクション	市古 健次	41
—— 効果的な図書館利用のため ——		
文献複写に関する諸問題と解決方法について	文献複写グループ	45
学内出版物の図書館での受入状況 — 調査報告 —	学内資料研究グループ	51
米国における図書館相互協力について	奥泉栄三郎	55
相互協力の現状・実態に一言!		79
相互協力分科会での二年間	前山富士子	82
分科会に出席して	倉岡 みち	83
相互協力分科会に参加して	原口 法子	84
相互協力分科会設立の経緯		85
・研究分科会新設要望書		
・相互協力研究分科会研究計画書		
・私立大学図書館協会東地区研究部会細則		
日程・テーマ・会計報告		91
相互協力研究分科会会員簿		98
相互協力関係アンケート調査・中間報告		101

分科会創立を記念して、日本大学の村尾成允先生に講演をお願いしましたが、今回掲載することができませんでした。別冊として刊行したいとおも

アメリカにおける図書館相互協力の周辺

奥泉 学三郎

(シカゴ大学図書館)

1. ひとつの朗報と多くの問題点と
2. 基礎資料の作成をめざして
3. ユニークな新聞所蔵目録の作成なども
4. ウィリアムズ・コレクション
5. 真珠湾攻撃ドキュメント
6. メーソンコレクション
7. 相互協力以前のこと
8. ひとつの実例
9. 「マイクロフィルム」上の問題
10. 相互協力の中味

1. ひとつの朗報と多くの問題点と

ちょうど一ヶ年ぶりに、また帰って来るチャンスがありまして、昨年にひき続きまして同じ分科会のこの席で、このような機会を持ち得ましたことを非常に光栄に思っております。しばらくの間、かなり無駄話も含めながら、ということになりますが、皆さんと一緒に直接、間接の図書館における相互協力の諸問題を考えてゆきたいと思えます。

今回、私がこちら日本に参りましたのは、只今も御紹介いただきましたように、多少大袈裟に聞えるかもしれませんが、アメリカに永住できる資格を獲得するために、在日アメリカ大使館の領事との面接が約束され、その用件のために帰って参りました。アメリカに仕事が沢山あり、滞在が長引いているので、向うでいっている“グリーン・カード”という永住許可証を念のために確保しただけのことです。この制度について簡単に紹介しておきましょう。一般的に云って、皆さんが、アメリカに行って図書館で働きたいということを想定しますと、専門的知識を要求されることは勿論のこと、労働許可証、或いは移民に伴う諸条件をクリアすることが必要です。人各々に色々な動機や目的があるかと思いますが、私の場合には比較的長期にわたるアメリカへの出稼ぎ、というところですね。仕事の結果はとるに足らぬこととはいえ、国際的な図書館協力か、或いは国際文化交流に多少は役立つものと思っています。私の場合には、今のところ日本国籍離脱は考えていません。

「生計を得て住む場所」の選択先をアメリカに求めた次第です。将来、私に適した仕事が日本にあれば、迷うことなく戻るでしょう。丸一年も日本に滞在すれば、アメリカでの「永住権」は自動的に効力が消滅してしまいます。

それにしましても、これからは行ったり、来たりが自由化された身分ですので気持ちが楽になりました。1974年に渡米致しまして、昨年は、アメリカ政府から大変複雑な特別許可をとって、実は八年ぶりに祖国の土を踏みました。公的な仕事も持って来ましたが、私的には、留学中に亡くなった父の墓参という行事もあり、また、皆さんとの絆を太く末永く保とうと秘策を練って帰ったわけです。留学・研修中に現地で退職してしまった慶應大学にはとうとう立寄る機会（時間）がありませんでしたが、何人かの人達と電話で話したことが今でも忘れられません。この席に慶應の情報センターのメンバーも出席されているようですが、新しいビルも完成したことで、今回は是非訪問して帰りたいと思っています。宜しく。

さて、自分が図書館員を職業とする個人であること、家族四人の頭主であるという立場は、私にとって良くも悪くも試練の場であったように思います。学生を本業で渡米したのであれば、ア

アメリカ女性と結婚する手もあったし、職業を転々とするのも自在だったかもしれません。ところが、私は、日本人図書館員として、すでに固まった存在でありましたし、家族のことを考えると保守的に石橋を叩いて渡る生活を送るほかありません。

しかし、これがまた日本からみると正に狂人の行動で、母などは随分と絶望してしまいました。文字通りアメリカにおける私の周囲は難問山積となりました。何故私がこんな事情を長々と話すかということですが、この頃の数ヶ年がいわば私を決定づけた時代だったからです。もしも人生の方向が違っていたら、むしろ私に皆さんの前でこのような形でお話するチャンスはなかったでしょう。アメリカに行って、そういう意味では毎日歯を喰いしばってやったということになります。この点は私の強さでもあり、弱さでさえあったかも知れません。勇気を出して職業そのものをかえる好機であったのかも知れないのです。

今だからこんなことが思い出のように話せるのですが、ある年にメリーランド大学側で正職員を募集することになりました。そのこと自体は私にとって朗報に違いないのですが、ペーパー・テストを受けさせられたら、若い人にとってもかなわないという私の年代でした。専門雑誌で公募しますので、アメリカで高等教育を受けた日本人・日系人・白人で日本人並みの語学力のある人などがおしかけます。私がお払い箱になるのは目にみえていました。そこで、私としては、一種悲愴な覚悟で、日本関係の資料の分類・整理ということであれば、自分でもなんとかこなせるんだという“顔”を作りました。ある時には、わかったような顔、この道には少し自信があるんだという顔を、態度や行動に出すことがアメリカでは意外と大切なのです。それにしても、一度しかない人生をかけるにすれば、随分と無計画な実験装置に自らをはめ込んだものと苦笑しました。

こういう段階を越えて私を待っていたものは、結果論にもなってしまいますが、今では日本にもないといわれる日本語の資料を現地で整理することでした。整理が済んでしまえば、当然、関連目録を出版するとか、資料そのものの保存策、或いは、マイクロ化等々と仕事が次から次へと出て来ます。たとえ、オリジナルが日本に里帰りしなくとも、何らかの形で日本に持ち帰ることは、今をおいてないのではないかと思いました。図書館というサイドでみても大きな意義があると思われましたし、広い意味では日米相互の文化交流の一環をなす仕事です。別な言葉で言えば、大型の国際図書館相互協力に発展する内容の仕事が目前にあったのです。幸いなことに、これらの資料を利用する人は日本人と外国人とを問わず、100%研究者であったということです。彼等は資料のもっている潜在的な価値に気付くと同時に、未整理状態の不便さにも閉口していました。やがて整理することに対し、メリーランド大学側で理解を示し、更にアメリカ政府も援助すると

ということになりまして、アルバイトの人もだいぶ投入されたものです。私はここでも“人事”面で私なりの試練を受けました。つまり、組織的には、私は正式な責任者ではありえず、実務的には正にその立場でした。この辺りの相違をわかってくれないアシスタントの人達の労力を、どのように効率化するかは、これはなかなか難しいものです。

「古領軍により検閲を受けた雑誌目録・解題」と、これに対応した「原資料のマイクロフィルム化計画」は、すでに完了致しました。全 3,500タイトル・9,000冊・16万ページという分量のものが 260リールに収められています。セット価格は、320万円で、学術研究機関からの要望があれば、雄松堂書店を通じて頒布するということが関係者間で決定しております。マイクロの評判は幸いにして上々ですし、今回は私も日本に帰って、その宣伝にあたっていますが、これはいわば公認済の行動です。といいますのは、ある時点で多少の印税のようなものがメリーランド大学側に還元される契約になっていますし、ここで評判になれば、次期計画も二つ三つとプラン化出来るからです。私はここで図書館間相互協力制度の矛盾を発見したものです。アメリカでは図書館間相互協力の一つとして、共同購入の精神が発達しており、日本の三十倍もある広い国で多くても三セットしか要らないというのです。一つは著作権登録との関連で米国議会図書館への納本があります。一つは典型的な共同購入の例でシカゴに本部を置く研究図書館センターからの注文。最後は地理的にいって西海岸で果して購入するかどうか。以上で決ってしまいます。勿論、マイクロフィルムのネガはメリーランド大学の所有物です。ということで、はじめからアメリカだけでは、ビジネス的な投機の可能性はないわけです。日本ではまだまだ隣で買ったと聞けば、ウチも買わねば損という頭で社会が動いています。日本で極度に図書館の相互協力概念が発達して来ますと、少なくとも理論的には多くの本屋さんが消えてしまい、従って取次業などという業界も影をうすめることになりかねないように思われます。それどころか、そういう時代には大学図書館自体も統合大型化、もしくは、専門化しているでしょう。狭い同一区内に十からの大学が存在し、それぞれ立派な独立建物と職員をかかえ、蔵書内容といえ、大部分が相互に重複しているものということであれば、いっそ図書館そのものを協同で一つつくり、気の利いた形で運用するという革命的な発想でいったら如何だろうか。

現行の大学設置基準法の下では、この型体は文部省の嫌うところでしょうが、よくよく考えてみれば、現実臭い話でもあると思います。

2. 基礎資料の作成をめざして

次の雑誌目録出版計画は、本来ならば今回のマイクロフィルム・プロジェクトに先行する筈のものだったのですが、種々の事情により、両者の優先度が逆転したかたちです。私達が、プランゲ文庫解題シリーズの第二弾として構想しているものは、先に出版した「目録・解題」の内容を含めた、昭和二十年から二十四年の間に日本で発行された雑誌目録です。これは、この時期の全国書誌の逐次刊行物編という実質的価値を持つと同時に、メリーランド大学の「雑誌所蔵目録」に他なりません。今云った期間に日本で発行された雑誌であれば、外国語の雑誌も収録して、14,000 タイトル程の量です。何故これ程多くの量（種類）があるかという“雑誌”の意味を広く解釈していること、占領軍の検閲のために各発行者は強制的に提出を義務づけられていたこと、日本が敗戦直後の経済状態にあったため、出版社も常に不安定で、廃刊・改題・復題・創刊が相次いだこと、戦時中における文字に対する飢えが爆発的に新生雑誌の簇生を促したこと、占領軍の出版・文化政策の一つであったこと等々が背景にあります。問題は、これらの雑誌の発行部数が、極度に少なかったこと、印刷用紙の質が悪かったこと、当時は図書館界といえども保存に対する姿勢が貧弱であったことなどの点です。この事実は、別の方向からみますと、現在では非情にユニークで貴重な資料として再評価される時期に来ているとも云えます。このような時代の要請に応える意味で、メリーランド大学は、出来るだけ網羅的で正確な雑誌目録の公刊を目標にしています。勿論、世界中の日本研究者にとって利用し易い書誌の一つとするために、日本語と英語の両方で記述される部分を含むものです。私は最終的な出版契約の調印がスムーズにいくことを願っています。歳月は過ぎ行くばかりで、なんとか迅速な手を打ちたいところなのですが、アメリカと日本（の出版社）とでは、アプローチの仕方にも相違がみられ、あいだに入って苦労しています。かといって後にも引けない心境です。この目録が完成することになれば、終戦直後の雑誌に関する書誌事項の“交通整理”は一段と前進したことになると思います。少なくとも、いざ利用したいという時には、メリーランド大学に複写依頼をすれば良いことになります。しかしながら、究極的には紙質のことも考慮に入れまして、雑誌自体もマイクロフィルム化し、高い見地から保存と利用ということを考えていくべきだと思います。一部の人は、メリーランド大学側で利用という面で非常に繁雑な規則を設けているという人もいます。また、利用者を差別するところがあるのではないかと、という人までいます。しかし、他と比較しても、特にそのような問題点はないように思います。ただ、日本人が関心を寄せる程には、メリーランド大学側の管理職がこの資料の山に理解がないということも事実です。現実的にはどうしようもないことと云

うか、地道に理解してもらえ方向に努めるしかありません。少し具体的に云えば、現場の職員不足などが深刻化し、全体的なサービスの量と質が低下するということも予想されることです。残念ながら、プランゲ文庫そのものは、メリーランド大学の研究・教育体制と直結していません。厳格に云うならば“宝のもちぐされ”です。

反面プランゲ文庫を所蔵することの間接的なメリットも意外と大きいという点も、私としては主張しておきたいのです。メリーランド大学には、日本研究もしくは、占領研究の面で伸びゆく可能性が大いにあります。この「可能性」を「ほんもの」にする役者達の登場を待っているといったところでは

3. ユニークな新聞所蔵目録の作成なども

かなり先のことにならざるを得ないとみなければなりません。第三期のプランゲ文庫書誌解題叢書も魅力のあるものです。それは、雑誌の場合と同じ時期の新聞所蔵目録の出版とそれに対応する新聞自体のマイクロフィルム化計画です。新聞目録はカード形式で殆んど完成している段階で、その分量からして、書誌は二冊体となるだろうというのが、我々を含めた専門家のみつもったところでは

この段階の計画実現に要する予算は、概算で一億五千万円ということです。この種の事業のタイプとしてはかなり大型のもので、メリーランド大学が自己資金でこの計画の実現を計ることは夢にも考えられません。日米の直接・間接の政府資金を核にして、更に民間からの協力を結集することが前提条件となるでしょう。資金確得のための申請先は確かにあるのですが、問題はこの申請を受理する側の資料に対する理解度です。常識的にみる限りは、限られたアメリカ独自の予算を、英語文献（西欧語文献）の保存に優先的にまわす、という判断はあたり前のことと云わねばなりません。日本側の動きが大きくものをいう所以です。新聞はいたみがひどく、すでに一部分はボロボロになったり、黄ばんでしまって、関係者の心を痛めている状況です。2,000年代を迎える頃には、このままでの保存は絶望的だともいわれ、この17,000タイトルからの分量の日本の新聞を、アメリカの書庫で風化させてしまうのは、なんとも情無いことに思われます。保存の為の援助を引き受けて下さる日本の篤志家の登場を大いに期待しているところです。

この次あたりがまた雑誌に戻って、検閲をパスした雑誌の山のマイクロフィルム化となるでしょう。少なくとも未製本の20万冊、300万ページという量のものが、中性紙の封筒に収められて保存されています。これらの雑誌の場合には、封筒に収められていることと、各雑誌は表紙が付

いていますので、中のページがひどくいたんでいるというものは少ないです。保存という面に限れば、急いで、マイクロフィルム化する程のことはないと思いますが、利用という面からみると、マイクロ化はビジネスとしても成り立つ程需要度が高いようにも思われます。なんとなくこの辺りの仕事は、私達の次の世代の図書館員のものという感じです。

4. ウィリアムズ・コレクション

以上はすべてプランゲ文庫中の資料の保存・整理・解題・利用の対策でしたが、メリーランド大学には、ほかにも目ぼしいコレクションが幾つかあります。そのうちの一つは、ウィリアムズ・コレクションと云われているものです。これは、戦後アメリカが日本を占領していた時代の文書という意味では、プランゲ文庫と年代的に重なるものです。当時日本の国会を牛耳っていたGHQ国会課の責任者であったウィリアムズ博士の個人文書であると同時に、執務上の記録文書でもあります。たまたまの事例にすぎないかも知れませんが、この文書の内容の紹介に入る前に、アメリカの一市民の文献資料と自分の職業上の公文書に対する理解度をお伝えしたいと思います。その人の性格とは云え、几帳面な整理方法にまず驚き、これを譲り受けたメリーランド大学側も再整理するなど、見事に保存されています。一体、日本の役人で、例えば、課長クラスの人が退職したからといって、こんな立派な文書が残るでしょうか。都合の悪い文書を捨ててしまうことも多いでしょう。発信・受信の書簡、文書類をきちんと保存し、次代の人の用に立てられる人といえ、かなり限られてしましましょう。さて、ウィリアムズ・コレクションの内容ですが、その博識で外国では特に定評のある羽仁五郎関係の文書・メモ・紙片が出てきたりします。彼は今の国立国会図書館を創設する頃の国会議員で、その設立委員長だった人です。吉田茂とマッカーサー元帥との往復書簡（カーボン・コピー）もあれば、中曾根康弘の建白書なるものがあつたりします。吉田や中曾根は「日本の独立」を堂々と占領軍に訴えています。羽仁五郎の下で「中井正一」が実務的に個性を発揮していた様子を見ることも出来ます。中井正一の文章なり、活動記録は、中々人の心に迫るところがありますが、ウィリアムズ文書の中にも面白いのがありました。大変な勢いで国会図書館の人達が左翼的な考え方になってゆくのをみてとったGHQは、ある時、中井の出頭を求めて、事情聴取しています。この席で、職員の最高責任者格の中井は、人が自分について来るのだという意味のことを発言しています。あなた方の側からみれば、自分は箱の中の腐ったリンゴであろうから、問題があるとすれば、まず自分をはねのけてくれたまえ、という自信ぶりです。根っからの図書館員という人ではありませんが、この世界に片足以上のめ

り込んだこのような人が居たということはひとつの遺産です。こういうふうに歴史文書は実におもしろいものです。文書の中の人物と、それを保存（所蔵）していた人と、今それを整理する「ワタシ」がいるのです。図書館員の楽しみの一つは、この辺りにもあるように思っています。

5. 真珠湾攻撃ドキュメント

それからもう一つ貴重な文書を紹介しておきたいと思います。これはまだメリーランド大学側で入手したわけではないのですが、時間の問題でいずれ寄贈されてくるといわれているものです。その文書とはダンボール箱で約30箱といわれる真珠湾攻撃関係の文書類です。御存知の人もいるかと思いますが、これらの文書を使ってプランゲ先生は『トラ・トラ・トラ』という有名なパールハーバー秘話を雑誌に発表し、これは映画化されました。プランゲ先生は、真珠湾攻撃に実際に参加した旧日本帝国海軍の英語の出来る人達——例えば現参議院議員の源田実——アシスタントとして自由に使える立場にあった人です。しかしながら、皮肉なことにプランゲ先生は四千枚の原稿を残して、著作らしい著作もないままに、他界してしまいました。博士の死後、この原稿はアメリカの大手出版社の手によって日の目をみ、一時はベストセラーにもなりました。プランゲ先生は他人に自分自身のために集めた資料を見せなかったことでも有名な人ですが、なにはともあれ実に四十年振りに本も出せたことであるから、そのために使った原資料は奉職先に寄贈しようという遺族や関係者の考えがあって、やがてマッケルデン図書館に収まろう、という次第です。この原資料が「公」のものとなった時の意義は大きいと思います。一方、プランゲ先生の遺著も続々と刊行される公算で、その二冊目の著作権者が、プランゲ・エンタープライズとなっていたのにアッと驚きました。この方面も注目されるところでしょう。また、例の『トラ・トラ・トラ』はついで同書名では英文版が出なかったということになります。

6. メーソン・コレクション

日本の学校音楽教育の創設は、妙なところからスタートしています。理化学・地質学者であった信州長野県出身の伊沢修二が、明治政府の留学生としてアメリカへ渡ったのは、1875年の7月のことです。しばらくして彼は、「物好きな米国人」（伊沢の言葉）に会いますが、この人が日本の音楽教育の教祖といわれる、ルーサー・W・メーソンです。もっとわかり易く紹介すると、例の「蝶々蝶々」という唱歌を日本に広めた人で、向こうでは「ライトリロウ・ライトリロウ」と親しく歌われています。メーソンは、所謂「お雇い外国人」の一人として、1880年代の初頭に

数年の間日本にも来ておりますが、彼のコレクションのうち、約 250点が日本関係のもので、これらは研究用に、メリーランド大学図書館において利用することが出来ます。メリーランド大学図書館の中には、世界中の音楽教育史資料センターの本部があって、この面でも積極的なサービスをしています。何回か私は調査に立会いましたが、この人もナゾの人物です。1896年に死亡していますが、生年がわかりません。向こうの文書と、例えば「太政類典」 四一五編 などの記録とも相違するところがありました。メーソンは「賜暇帰国」していますから、これは体（てい）の良いクビです。物欲のない人で手ぶらで船上の人となったように本には書かれていますが、それにしては、我楽多的な楽器その他が沢山残っています。そして、このコレクションは今でもメーソン家の所有物です。メリーランド大学は無期限の「寄託図書館」という立場で、これを預り、徹底的に整理・分類し保管しています。よく書誌作りは「腕力」如何だといわれますが、その通りでして、「元気がよくなければ」この種の仕事は出来ません。我々図書館員は主として「これら」を提供し、利用者・研究者は主として「知力」を結集することによって、図書館を中心としたすべての関係者の存在価値が表面に出てくるのではないのでしょうか。私もこの構図を職業上の主義としております。

7. 相互協力以前のこと

なんでこんな遠廻りな話をダラダラと続けるのか、と嘯み付かれる心配のないのがこの研究会の良い所です。他の席ではこうはいきません。私の云っていることや、やってきたことは、図書館相互協力の源流であり、出発点であって、まだまだ組織化、機構化される前段階のもので、日本の図書館の蔵書一つに加えて置きたいものが、アメリカの大学図書館にあったので、部分的ではありますが、それをマイクロフィルムの形で日本に持ち帰り、同時に解題書も出版出来たということは、大したことはないようにみえますけれども、その実現に向けて発散された精神は、日本とアメリカの「相互協力」のそれに他なりません。名もない現職の日本人図書館員が、これ程多く参加したプロジェクトは他にありません。これ程多く私費を投じた企画の例が他にあるだろうか。アメリカ側からみても、メリーランド州政府はその価値をろくに吟味もしないままに、多年にわたり多額の公費を投じてきました。アメリカ政府はその価値を認めて、資料整理のための助成を行って来ました。アメリカらしいところでしょう。このような事実に対して、日本側の公的な対応は今までのところ皆無に近かったということになります。大方の日本人にとって、「終戦直後」の時代は忘れてしまいたい歴史とも云えましょう。価値判断をどこに置こう

と、それは自由です。ですけれども、たまたま私がかゝったこの仕事を例にとっただけでも、日本側が損をしたというか、無駄をしたということを、ここで云い残しておきたいのです。我々は、現実を選択したのであって、理想的な事業を完成させたわけではありません。敢えて飛躍した表現をしますが、手頃な大きさの日本の国土に「相互協力」精神が宿りにくいのは何故か？ここを突いてみる必要があると思います。あとでゆっくりと皆さんと一緒に考えてみたい点がございます。

今までのところで何かこの際、はっきりさせておきたいことや関連質問が有りましたら遠慮なく発言して下さい。

質問① ウィリアムズ・コレクションというのが、今までの真珠湾攻撃に関するコレクションということなのですか？

答—— いいえ、両者は全く別物です。ウィリアムズ・コレクションはすでにメリーランド大学に寄贈されてきていて、利用出来るものです。真珠湾攻撃に関するコレクションというのは、まだプランゲ家の所有するもので、図書館に寄贈されて来たわけではございません。

先程紹介しましたように、ウィリアムズ博士はGHQ側の国会担当課長だった人ですが、数年前にはメリーランド大学総長室付の肩書きを持っていました。そして、自分の実体験と長期間にわたる研究とを体系づけまして、これを一冊にまとめ、バージニア大学出版部と東京大学出版部から英文の立派な本の形で同時出版いたしました。その後、間もなくして、彼は自分の蔵書と原資料のほとんどすべてをメリーランド大学に寄贈したのです。私蔵していたものを自分の関係した大学（出身校ではありませんが）へ寄付した、ということになります。すでに、プランゲ文庫がメリーランド大学にありましたので、そういうものと一緒に保存し、研究者に利用していただきたいという気持ちが働いたことも事実でしょう。

事実、同系統の内容のものが一ヶ所に集まったということは、研究者にとっては願ってもない朗報となりました。ウィリアムズ先生から寄贈を受けたもののうち、単行本は重複調査の上で、一般書庫に収めました。これによって、英文で書かれた日本関係図書——特に戦中・戦前それと占領期のもの——がかなり充実しました。意外とよく整っているのです、私は一つ書誌でも作成しておこうと思った程でありました。メリーランド大学には、GHQ図書館やGHQ関係者から寄贈を受けた英文図書が、東亜図書部ではなく、一般の書庫にも相当量あるということをお伝えしておきます。ところで余談になりますが、ウィリアムズ・コレクシ

ョンについては、「読売新聞」の全二頁を使って紹介する機会がありました。大きな記事になったのを見て驚いていると、今度は、在日米軍基地内にあるメリーランド大学の分校（若い兵士に現地で通信教育の機会を提供しています）から同じ紙面が送られてきたりもして、二重にビックリした思い出があります。取材してくださったのは『読売』の当時のワシントン支局長で、「やり手」の人でした。アメリカの一大学図書館に寄贈された資料に、あれ程の紙面を割りふるということは、中々出来るものではありません。今にして思うと、この人は矢張り考えるところが有ったのではないかと、思います。今は社を去り、見事に研究者に転身なされています。シュルマンさんという私の直属上司を動かして、資料保存に関し「日本人に告ぐ」もしくは「日本人よ目覚めよ」という激文を用意していただいたことも、また思い出の一つです。この文章は「英文読売」にも載っていました。連絡先として、私の勤務先を横文字で残しておいたのですが、最終段階でこれが全部カタカナになって印刷されてしまっていたのには、苦笑したものです。お陰様で直接には反応がありませんでした。でも、積極的にやっておくことも手です。まわりまわって、結果的にはスポンサーが現われたのです。

このように、ウィリアムズ・コレクションが話題となって、本来はこれがマイクロフィルム化される筈だったのですが、話が一転して、プランゲ文庫の中の「実際に検閲を受けた雑誌と関係資料」のマイクロ化に関心が転位した次第です。これが今回完成したものです。ウィリアムズ・コレクションの方も近い将来にマイクロフィルム化され、日本においてでも利用できるようになるでしょう。

真珠湾攻撃ドキュメントについては、別の機会に詳しく話してみたいと思っています。

質問② ウィリアムズ・コレクションの中に羽仁五郎とか中井さんの関係の文書があると聞いたのですが、中井さんのことに関しては分っていたのですが、本にのっていたと思うんですが、特に読書会のこと、母親一人、子一人で講演会をやったということには、僕は非常に感動して読んだ記憶があるんですけども、そういう選集に今お話されたようなことが、載っているのか、どうか、入っていないものがかなり有るのか、どうか。羽仁さんの場合も国会図書館について本を出しているから、入っている部分と、落ちこぼれている部分があれば、ぜひ『図書館雑誌』なりなんなりを利用して、紹介してもらえば、ある意味で国会図書館の全容が出てくるかと思えます。国会図書館も館史を作ったり、なんだかんだしている部分もあるの

で、ここにはもうすでに、国会図書館の人達も向うへ行っているから、資料として日本へ持ち帰っているかどうか、そこらへんの経緯をお願いしたい。

答—— ご質問の中に幾つかの項目があるように思いますので、やゝ身勝手に整理してお答えしていきたいと思います。この席に戦後とくに占領時代に関心をもたれている方も少なくないのですね。中井さんの関係では、先程紹介したようなドキュメントがあるわけですが、これとは別に同氏関係の文章にふれた記憶があります。中井さんの専門は美学・美術史であったかと思いますが、同時に図書館員であり、実践家でありましたので、何度か感動するところがありました。あんなに良い文章が、ひょっとしたら選集（全集）からもれているのではないかと私も心配です。「全集」とは良くいったものの、実際には欠落部分の量がバカになりません。中井さんや羽仁さんの場合も例外ではないので、今後、新発見の形で色々な人が紹介して下さることを期待しています。私自身も細々とこの種の資料の紹介に努めたいと思っています。日本の国立国会図書館関係の文書も確かにありました。そのうちの資料的に価値のあるものを折にふれ、国立国会図書館の方々に紹介し、周辺部分を含めて、ゼロックスコピーという形で提供いたしました。メリーランド大学側の特別なはからいで、展示用にオリジナルを提供（館外帯出＝国外帯出）して感謝されたこともあります。

羽仁さんはもう亡くなられてしまいましたが、文書の中に登場する人物が現に健在（存命中）である場合には、この種のドキュメントを利用する上での、ジェントルマン・シップというものが要求されるように思います。とかく「新発見」的資料を引用する際には、ゴタゴタが起き易いのです。場合によっては、現時点でのそのドキュメントの所有者は一体誰なのか、とか、事前に当人同志が接触して資料的に引用させていただくとかの手続きや許可を受けることも大事なことです。まさか「公」に発表されるとは思わなかったという人も居るでしょうから、今になって政治的にこれを持ち出したり、プライバシーを侵害したりしないように注意する必要があります。図書館としては、原則的な判断は致しますが、それらがすでに「図書館」という社会的・公共的機関のサービス材料になっている限り、より広く利用させていただくという考え方です。図書館側では、利用者の要求があり、特にその人の研究上不可欠なドキュメントと判断すれば、見せないという立場をとるわけには行きません。ましてや、引用すべきではない、などとも云えません。そうでなくて、利用する御当人に最良にして、慎重な扱い方をとってもらいたいと願っているのです。このような意味あいから、私は立場上研究者の方々に助言をしたものです。真に研究上の利用という観点に立てば、プラン

ゲ文庫はこれから先に大いに注目されてくるものといってよいでしょう。そう考えますと、この話は、皆さんにとっても決して無駄事ではないように思います。皆さんの知り合いの方が、誰かの全集の出版でも企画するような場合には、是非良心的に情報を流してやってください。中井さんの件でも、羽仁さんの件でも、“新発見”が期待できるということを今はお伝えしておきます。残念ながら、こゝでは具体的なデータがありません。人の書いた文章を検閲で削除するという行為は、一般的にはその文献の大事な個所に向けられる場合が多いとみたい。私はそう思う立場ですから、自然と今後の研究に期待をかけています。図書館員の人達にも、研究者の人達にも、「何かをやれる」という材料を提供したいというささやかな快感に浸っています。

8. ひとつの実例

今になって、自分のして来たことを振り返ってみますと、私の図書館員としての持前は「研究材料の情報提供」ということにまともな気が致します。それが学問的に価値があるとかないのかということではなくて、私自身が比較的長い期間にわたって持ち続けてきた「関心」というレベルのことで良いのです。私の「提供」を受けてくださる人がいなくなれば、恐らくビジネスの世界では倒産という事態でしょう。その点、図書館の場合は、と云えばどうなんだろうか。

ところで今、舟橋聖一のおもしろい文章をもっています。この作家は昭和二十二年四月に、『白い腕』という短編集を出しています。この中に「新しい善意」と題する作品が含まれています。少しうがった解釈をしますと、あの当時、黄色い腕でもなく、黒い腕でもなく、「白い腕」といったり「新しい善意」などという言葉づかいにひっかかります。事実を先に云ってしまうと、この小品を書くに至った動機というか、そのいきさつを綴った部分が、占領軍の検閲で全文削除されています。多くの日本人は、次の文章を読む機会がなかった筈です。

「正直なところ、戦争犯罪人には、一種の滑稽感が伴ふのは、どういふわけだらうか。東条にしても、山下にしても、近衛にしても。或は、共産党によって、リストはあげられたのだが、斉藤 にも、西條八十にしても、他の犯罪人のやうに、深刻な感じが一向に、伴はない。そこへ、行くと、かつての人民戦線の検挙の時などは、捕まった当の被疑者はもちろん、その外廓にある知識階級全体を震撼せしめたのであり、その深刻味は、とうてい今日

とは、比較にも何もなかったものではない。新聞でも報じてるやうに、そこに拘置所といふ背景がなかったら、戦犯有名人を見送る船出か何かのやうな賑やかな光景だったといふのは、決して誇張ではなかったらう。指名された連中も、「はゝあ、来ましたか」といった程度のショックで愕然として挙措を失ふといふまでには至らない。時には多少得意でさへある。日本人の千人の中に入らないのでは、男の中の男とはいへないといふ尊大振りもある。正力などは、まさにその気構へで、それだけ、滑稽感も少いから、戦犯人の風貌を具へたものといへるのである。」

このような書き出しではじまるところが、ずーとこの後も削られている訳です。この手のものが東京裁判の判決の前に、しかも有名人の口や文章から、いろいろな形と立場で発表されるのは、確かに功罪相半ばしている面があって、当局としては気になったのでしょう。とにかく「第一章」は全文削除です。さらに校正刷りの「第二章」をみてゆくと、今までに削られた部分を受けて、

さて、これだけの前置をして、この小説ははじまるのである。といふのは、女主人公、とし枝の前のパトロンは、やはり、各界各層の代表者として、天下にその名をうたはれた菱川雄六であるからである。菱川雄六は、十三日までの入所者リストには、まだ、上ってをらないのであるが、そのメンバーに伍して、全く遜色のない代表人であるし、その生得の風貌からも、立派に、主演俳優の資格を持ってゐるのである。

この小説が、市場に出る頃には、マック司令部の指名もあって、拘置所の花道から、すでに本舞台にかゝってゐるかもしれぬ。

このような例が、舟橋聖一の小説にみつかるところが面白いところです。軟らかいものを得意とするこの著者が、社会派的フィクションに目を向けざるを得なかった一つの例で、これこそ時代の特性です。小説の中におけるこのような表現作法までが削られてしまうのだということを、この作者は事実として後世に残したことになります。

9. 「マイクロフィルム」上の問題

マイクロフィルムにカッコを付けた形で、ひと言伝えておきたいことがあります。

検閲資料のうち、典型的なタイプのひとつに、校正刷りの文章の上に色鉛筆で、問題視した部分をぬりつぶしたものが沢山あります。青色鉛筆を使ったものが圧倒的に多いのですが、その理由は赤色鉛筆を使った場合には、印刷校正関係者による作業と検閲作業とを混同してしまう点に

もあったようです。

昭和二十一年七月の『婦人文庫』（第一巻三号 鎌倉文庫発行）に川端康成の「生命の樹」という小品（長澤節画）がみられます。

「特攻隊員である植木さんには、死は定まったことだった。特攻隊の基地の水交社にゐた私は、その死を信じてゐた。〔それは特攻隊員の死といふ、特別の死であった。一里四方ほどの土地、一萬か二萬の人々が、その死を中心に動いてゐた、死であった。その時は、國の運命もその死にかかっているかのような、死であった。〕強ひられた死、作られた死、演じられた死ではあったらうがほんとうはあれは死でなかったと思う。行為の結果が死であり、それが同時におこっている。死は目的ではなかったのだから、自殺とはちがってゐた。」

このような文章のうち、〔 〕の文章が実は塗り潰されています。オリジナルではかすかに判読出来ませんが、今回のようにマイクロフィルムに白黒のイメージで収めたものは、とても読みとれません。九十九％はなんとか読みとれると思いますが、場合によっては依然としてオリジナルにあたる必要もあるわけです。余談になりますが、今云った〔 〕の中の部分は、検閲官が個人的感情を入れて無理に強く塗り潰したような気がしてなりません。一方、川端康成は占領軍にも注目されていた人物です。鎌倉文庫という出版社も、昔の日本橋の白木屋というデパートの中にありました。このビルは占領軍の出入りも多かったところです。市販された同誌十八頁には、〔 〕の部分が次のように書き換えられていました。作者の心境というもおだやかではなかったでしょう。

「あの時も、私は空を見上げた。しかし、見上げるより早く涙が出て、私に星空が見えたのは瞬間だった。

植木さんが悲しさうにおっしゃったわけではなかった。無邪気な調子だった。御自身で御自身が合点ゆかぬやうな風で…」

質問③ 日本の図書館では、こういう一次資料というか原資料というか、そういうものに対する処置が非常に貧困じゃないかと思うんですけども、ウィリアムズさんの文書なり、プランゲさんの文書なり集めたものの原資料の保存という考え方は日本では非常に少ないんじゃないか。まあ、国立公文書館とか、或いは、東大の附属研究所とかいう所にはあるんだけども。そろそろ我々としても、図書館自体の方向を文書的なものも保存するように替えていかなきゃいけないんじゃないかというようなことを、僕は常々思っていた次第で。それと、パ

ンフレット類に関しても、何だか邪魔もの扱いにしてきた歴史があるんじゃないか。

それは、うちの図書館だけじゃないと思うんだけど、そこら辺の重要性がお話を聞いていって非常に分るんだけど、具体的にたまたまメリーランド大学には、そういうコレクションが有って、現在まで保管されたっていうわけですね。貴重な時間というか歴史が経過して、それがいい方向に向いたんじゃないかという気がするんですが。こういうものを整理したりする場合には、図書館員としてはどうか、わりを持って来たのでしょうか。何十年間もメリーランドでも眠ってきた原資料を、奥泉さん、或いは、森園さんあたりが行った時点から、これらの整理作業を始められたわけですね。そこら辺の図書館員の姿勢というものに、図書館員っていうのはもっともっと可能性が一杯あるんじゃないかっていう気がするんですけども。それを、今の大学図書館なり、一般の図書館では、可能性を非常に狭めたかんにして仕事をしてしまうとすれば、前に進まないんじゃないか。そういう面でも何か関係したことをお話していただけますか。

答—— 長い伝統というか国民性の違いだと思うんですが、図書館という狭い世界で考えただけでも、アメリカと日本では少なからぬ相違がみられます。どこの図書館でも、同じような傾向の本を沢山買い込んで、その蔵書量に得意になるわけですが、これは日本でもアメリカでも同じことだと思います。この原則の中には無駄もみられますが、「蔵書量」が多いということ自体は利用者にとってうれしいことです。ところで、アメリカの大学図書館や専門図書館には、一般の蔵書冊数統計にはあらわれない多くの不可欠の資料のタイプがあります。例えば、いまここで紹介しているような文書（ドキュメント）とかパンフレット（小冊子）です。出版物（本）や集大成になる以前の重要なバラバラの状態の資料のことです。

歴代学長の手紙のファイルとか、選挙のときのポスター・チラシ・パンフレットなどです。アメリカでも日本でも図書館員も研究者もこれらの資料の重要性に気付いています。自分の論文の中で引用文献として用いる場合でも、原資料や「初出」から引用することは何かと研究の正確度を高めるものです。又、レファレンス的にも大変役立つことがあります。いいですか。図書館は、他の図書館でも基本資料として所蔵しているものについて、自館にも整えていくという考えがとても大切です。そして、その次に他より蔵書内容を充実させていくという積極性が望まれます。加えて、他の図書館で入手出来そうもない資料を自館に備え、きちんと利用可能な状態にしておく、このことも又大切です。この辺りまで欲張ってやる気力が有れば、図書館に働く人々に何かクリエイティブな仕事をするチャンスがまわってくるで

しょう。大先生に言わせますと、リソースの方からあなたがたにささやきかけてくるとか申します。

人々の関心と実力がこの辺りまで達しますと、今度はその人の図書館学的な知識や技術におとらず、その人の主題的な専門領域上の知識がものをいってきます。文書官も（アーカイピスト）とか、ビブリオグラファーの領域です。これはもう広い意味の研究者であり、新人を育てるという意味では教育家です。目録そのものは、今後も益々その重要性が認識されるでしょう。しかし、そのことと図書館の目録係の地位（位置づけ）とは殆んど逆比例の関係にあります。目録の共同利用はとうの昔から行われており、コンピューターの利用はさけることが出来ません。しかし、ここでこのコンピューター時代においても個性的なサービスを行える余地は沢山有ります。図書館は、自動車のように数段階の加速・減速装置（ギヤー）を持ちたいものです。免許証をもっていても、狭いジグザグ道をフルスピードで走られたのではたまったものではありません。状況に合わせた運転（運用）をしたいものです。アメリカでは、標準化を極度に進めて、例えば、新刊書などはいち早く何処かの図書館で目録をとれば、それを全国的に利用してしまうわけです。そこであまった労力を、今言った特殊資料みたいなものにまわし、充分時間をかけて、独独の質的な図書館本来のサービスを——目録作業も含めて——行うのです。

又、アメリカにはタイプを打ってやたらと文書を保存する習慣があるように思います。ところが、日本では以心伝心とか、全会一致などという芸があります。最終報告書がでると、途中の記録文書は大体処分してしまう場合が多いでしょう。アメリカでは「公」のものである以上、そういう場合（時点）でも、後々に研究者等によって、そこにみられた少数意見なども吟味できるように、どんどん保存するわけです。

従って、このような背景もあって、次から次へとオリジナル性のある研究が生まれるわけです。日本では、大先生の部厚い研究書の一冊か二冊を丹念に読んで、それで、論文を書く、という場合が圧倒的に多いように思います。この面だけをみれば、日本の場合は個々の研究者が相当量の蔵書をもっていますから、図書館員はおろか、図書館さえも、不可欠な施設などとはいえないでしょう。私は「研究」の「行動様式」を大雑把に観察していているのであって、その成果たるものの「質」とをよかく論ずる気はありませんが。

話がとんでもない方向にいつてしまいましたが、要するに今は価値感が何かと変化している時代です。図書館員の専門性などをいう場合、かなり気を付けて発言しないとやり込めら

れますね。そういう時、私などは「いかに専門性をきりくずして常識化するかが一番大事な
んでして…。私は利用者の常識的判断で使い易い図書館づくりをやっています」なんて云い
出してしまいます。

10. 相互協力の中味

図書館の相互協力活動というのは、本当は結構難しい仕事です。ここには明らかに「矛盾」し
た面があります。一般的には、何もやらないよりは良いという判断でやっている、かなりの実例
をみることが出来ます。そして、個々の方針の曖昧さにもかかわらず、確かに「成果」も見出さ
れます。

けれども、自分の図書館でうまくいっていないところを、他の図書館に「相互協力」の名目で
サービスを求める面が強いようにもみえます。自分の図書館の強い面を外部の人（他の図書館）
に積極的に提供する、というところに相互協力の原点があると、私は思います。つまり、自分の
組織で最大限度サービス活動に努力し、その上で不充分なところを外の力によって補う、これが
本当でしょう。大きな図書館も、小さな図書館も、結局は同じボートに乗った利用者のために活
動しているのです。

「相互協力」は自然と「標準化」を求めますから、その意味で、図書館の専門性・特殊性・高
度性という尺度はある程度までは、うすれて当然でしょうね。そうすると、相変らず同じような
図書館が同じような目的で活動している、という光景がみえてきます。でも大事なことを一つ一
つこなして、そういう形になったのであれば、その形は強いと思います。好意的にみれば、アメ
リカの図書館界にはどことなく積極的に相互補完的な図書館間共同作業がみられます。一方、日
本の場合は、かなりはっきりとわかる、自分のところで解決しなければならない問題点を、他
（よそ）に依頼するという形で解決する傾向がみられます。ですから、小さい所同志が寄り集ま
るという傾向がみられます。大きい所が相手になってくれない、という現実の厳しさもあります。
皆んなが、仲良く真剣に「相互協力」のことを考えてくれれば、私は思うのですが、この「相互
協力」という言葉は歴史上の言葉——現実には死語——になってしまうだろうと予想します。何
故ならば、一般論として、そもそも図書館の世界には、相互協力体制が有って当たり前だからです。
これは、図書館の生命線です。図書館の健全な活動が実在していれば、何もこのような分科会は
要らないのではないのでしょうか。そう思いませんか？。この会をつくったということは、矢張り、
上位からの発想ではなく、下位からのものでしょう。現場からの、何か自館の中でどうにか解決

できそうなことなのだけれど、自館だけではもうどうにもならない、ということで目を外に向けたのと違いますか。

アメリカでは、図書館の経営者が色々な機会をとらえて、「相互協力」運動を盛り上げた歴史があります。皆さんのような低い地位の人（失礼）が、「相互協力」の問題をうるさく云っているのは、皮相的にみれば、ややおかしいと思います。ところが、よくよく考えてみると、こゝにはここの「この会」を結成しなければならない諸事情がみられたわけで、その由来に迫ると、増々もって皆さんの先見の明に敬服せざるを得ません。長時間退屈させて申し訳ありませんでした。二次会の方の準備もよろしいようですので、私の話はひとまずこゝで終りとします。

この報告は、昭和五十八年十月十八日に女子栄養大学において行った相互協力分科会での報告。講演を加筆・訂正したものである。なお、録音テープを本稿の形に整理された会員有志諸兄姉の労に対しお礼を申しあげたい。

〔編集部注〕

本年早々、突如奥泉さんはシカゴ大学へ転出し、新任地で御健在です。この機会に奥泉さんのプロフィール（横顔）を次に紹介しておきたいと思います。

奥泉さんは、1940年、群馬県に生まれ、慶応義塾大学院で図書館情報学を専攻した後、1974年交換研究員としてメリーランド大学に派遣された。当時そこには膨大な日本語の古新聞、古雑誌、図書が、価値も判定できぬままほとんど死蔵の状態で放置されていた。占領下の検閲資料にも関心をもっていた彼は、大学図書館側にとっても格好のライブラリアンと映ったのか、そこにそのまま居ついて、同僚と共に資料の整理分類にあたると共に、日本のマスコミを通じて、この資料の利用、紹介につとめたのである。その集大成ともいうべきものが昨年（1983年）完成した「占領検閲雑誌」のマイクロ・フィルム化（雄松堂書店）で、この目録・解題をも手掛けている。

はじめに

報告書作成にあたって、海外への複写依頼について書くよう原稿依頼をお受けしましたが、理論的なことは私自信不案内なことも多いので、これから海外に依頼を出したいと考えていらっしゃる図書館の参考になれば、あるいは、既に実施していらっしゃる図書館から、ここはこうした方が良いのではないか、こういう方法もあるというご意見がいただけたらと思い、当センターの海外 I L L の実務についてまとめてみることにしました。

I. 申 込

海外からの文献の取り寄せは、到着日数が予想できないこと、料金が高いことから、サービスの対象を大学院生以上としています。但し、学部生についても、どうしても必要な場合は、ゼミの先生を通して（先生が申込という形で）受付けをしています。担当係は、情報サービス担当（レファレンス）で、昭和59年4月現在3名がその実務にあたっています。昨年度は368件の申込を行いました。

I-1. 受付

申込者には、申込文献の書誌事項をカルテ（図1）に記入して提出してもらい、その際海外からの取り寄せは、到着日数がかかること、料金がかかること、そして著作権法やその他の理由から、拒絶されること、またその連絡にも時間がかかることなどを説明し、申込者に了解してもらいます。

◎到着日数：通常1～3ヶ月、（B L L D：2週間）、著作権の許可を得る場合には1年以上かかった例もあります。

◎料金：相手館の請求金額を支払うために都市銀行、外国為替係で送金小切手を作成すると手

数料¥ 2,500を必要としたり、(アメリカン・エクスプレスではドルの場合は、¥ 1,500と手数料は安い)、他のマルク等の場合は¥ 3,000と高くなります。S. 59. 4(現在) 相手館が複写料金、送料の他にハンドリングチャージ(コロンビア大の場合、7ドル)を請求してくることがあるため、1枚のコピーが数千円かかる場合が多いのです。BLLDの場合は、コピー枚数に応じてクーポン(1枚約1000円)で支払うため、割安ともいえます。

I-2. 申込際の注意事項

申込者がカルテに記入したものは、誤りがないかどうか必ず確認します。

- ① 典拠確認 (verification) ……書誌・文献目録を使って、記述に誤りがないかどうか確認します。
- ② 所蔵確認 (holding ……国内で所蔵しているところがあるかどうか、海外での所蔵について確認します。但し、出版国、出版大学に申込みのが原則。経験上処理の速い機関に申込みをします。(注1)
- ③ 再版 (reprint) の有無、購入可否の確認……購入できるものは購入する。Books on Demand に収録されているものは、価格が掲載されているものよりかなり高額になるので、書店に問い合わせた方が良いと思います。(特に個人で購入する場合)
- ④ 著作権の確認
 - ・単行書(絶版) ……50年(米国55年)出版年から起算、期限内の場合は版元に許可願を出し、許可書を添えて、所蔵図書館に申込みをする。
 - ・論文……3年、厳格ではありませんが複写で申込みをしても、現物ローンに変更されることがあります。
 - ・学位論文……UMIに登録されていない場合、執筆者から許可を得たうえで、大学図書館に申込み。(注2)
- ⑤ 申込様式 三田情報センターでは以下の様式を使用しています。
 - ALA (慶大オリジナル) ……アメリカへの申込
 - IFLA (BLLDより購入) ……ヨーロッパ、その他
 - 専用申込様式……BLLD, BLRD, その他

I-3 事務処理(進行状況のチェックのために) ファイルの作成

当センターでは、申込件数が多いこと、また、到着がかなり後になること、複数が担当していることなどから、進行状況が誰でもわかるように、3つのファイルを作成します。

①海外研究機関文献複写申込控（図2）（申込番号順にファイル）

②申込者名のアルファベット順ファイル（図3 参照）

③申込機関のアルファベット順ファイル（図3 参照）

②は申込者が自分の申込んだ文献の進行状況を尋ねる場合が多いこと、③は複写物がこちらの申込書の控等を添付しないで送ってくる場合があるため、①の索引として作成したものです。申込件数が少ない場合は、②、③は不用かと思えます。また、申込者の記入したカルテも、申込番号順にファイルします。

I-4. 料金支払

相手館から INVOICEが届いたら、申込者に連絡をとります。支払い方法が指定されていない場合は、送金小切手で支払いを行います。また支払いは迅速に行わないと、延滞料の請求がきたり、その後の申込を受けてくれない場合もできます。一般的な支払いのケースは以下の四つです。

①送金小切手：申込者に請求書のコピーを渡し、申込者自身に小切手を作成してもらい、担当者が返送します。申込者に郵送させると事故が起りやすいので、必ず担当者が返送する。返送する際は請求書のコピーを添付し、書留で送ります。

②振込：口座指定のある場合、申込者に請求書のコピーを渡し、申込者に振込みをしてもらいます。その際、領収書を担当者まで届けてもらい、そのコピーを添えて送金した旨を相手館に連絡します。

③国際郵便為替（money order ②と同様）

④国際返信券：何枚かを買置きをしておき、請求枚数を書留で送る。申込者には実費を負担してもらいます。（1枚 170円）。フランスは最近この支払い方法に統一されています。

請求書のオリジナルは必ず保存し、送金小切手も番号を控えるか、コピーを取って保存しておきます。クレームが来たり、請求書が二度来たりするケースも少なくありません。三田情報センターでは申込件数が多いので申込者に支払いの一部を担当してもらっていますが、件数が少ないとか、他の仕事に影響がなければ、担当係員が全て代行した方が確実かもしれません。また、書留で返送するものにつき通信費を一律 500円徴収しています。書留の控えも保存しておきます。

I-5 現物・複写物到着

複写物が届いたら、確認し申込者に連絡を取り、引き渡します。欠ページがあった場合など、国際返信券を2～3枚送ってクレームをすることがあります。また、ゼロックスによる複写で申込を行っても、現物のローンやマイクロフィルムに変更されることがあります。現物ローンの場合は、返送料も申込者に負担してもらうこととなりますが、本の包装状態によっても料金が左右されるので、実際に返送した実費を申込者に請求します。（見積りと違うことがよくあります。）現物は本が傷まないよう充分注意しなければなりません。全ページのコピーをとる場合、申込者に注意してとるよう念をおします。返送の時の包装もしっかりしておかないと事故のもとになります。

I-6. まとめ

ILLは相手館の好意により運営される側面が強いので、料金の支払いは迅速に、現物は傷めずに返すことが大切だと思います。また、支払いや返送した証拠は最低1年以上保存しておかないと、損をすることにもなりかねません。加えて進行状況のチェックを忘れずに行うことも大切です。3ヶ月以上返事のないものは、クレームを出しても良いと思われませんが、クレームを出すと同じ物が2度送られてくるケースは少なくありません。申込者が急ぐ場合などは、キャンセルして他の図書館に申込みことも考えられますが、キャンセルできるかどうかは出してみなければわかりません。海外ILLにはこういった事故や、トラブルが避けられないので、最初の受付の際には、申込者に事情をよくわかってもらうことも大切だと思います。

2. 受付

逆に海外から三田情報センターに複写依頼が来ることがあります。数枚のコピーの場合には手続き等が面倒なので無料で送っていますが、枚数が重むものも少なくありませんので、その場合についての処理を概説します。

2-1. 複写

単行書1冊といったように量の多いものはゼロックスではなくマイクロフィルムの複写とします。これは、ゼロックスの場合、郵便物の印刷物扱にならないので、送料がかかること、量が多いと包装すること自体大変な仕事になるためです。また、到着するまでに扱い方や、重さなどが

ら考えて、包装がこわれ中味が傷むことも予想されるからです。

2-2. 請求書作成

慶應のオリジナル INVOICE (図4) を作成し複写物とは別便で郵送します。支払いは円の送金小切手に指定しています。額が少ないときは、国際返信券で請求することもあります。国際返信券は購入は170円ですが、日本で切手に替える場合は140円になります。請求書の内訳は、複写料金と送料、更に送金小切手による支払いの場合には、銀行手数料(送金小切手を現金に替える時に必要で、請求書金額の0.005%、最低750円)と手数料500円(口座振込になり、たいていの場合取引銀行と異なる銀行からの振込になるため、その場合の手数料を含む)を合計して、FEE FOR SEARCHINGとして請求します。支払いは高額の場合は前払いとしています。高額の場合はキャンセルされることが多いようです。

2-3. まとめ

三田情報センターでは、現物のローンは国内とともに行っていません。料金の受領については、今までのところトラブルはありません。但し、大学宛に小切手を返送された場合大学の経理への入金と間違われることがありますので、返送先を図書館にすることや、小切手のあて先に~ Libraryとあるのに、口座名が~図書館となっていない場合は、原則として振込んでもらえないことになっているなど、自館の事情に応じて、支払い方法、あて先を明示した INVOICEを作らなければならぬと思います。

あとがき

三田情報センターは、人文社会系の図書館であるため、比較的古い出版物や単行書について海外へ申込むことが多いことが特徴といえます。ですからここでの実務処理もそういった文献の入手を主眼にして書いてきました。そのため、自然科学系の図書館での事情にはあてはまらないことも多いと思います。BLLDは確かに速く、比較的廉価にコピーを入手することができますが、人文社会系の資料や古いものの所蔵が弱いため、やはり、人文社会系の資料については、他の大学図書館等に頼らざるをえません。そして相手館の負担を軽減するためには、典拠確認等の事前調査や、相手側のILLの実状等について予め知っておくことが必要ではないでしょうか？

参考文献

- ・ Interlibrary loan procedure manual. ed. by Thomson, S.K. 1970. Chicago, American Library Association.
- ・ Interlibrary loan involving academic libraries. Thomson, S.K. 1970. Chicago, American Library Association (ACRL monograph no.23)
- ・ International loan services and union catalogues a manual issued under the auspices of the IFLA section on Interlending. ed by Valentin Wehefrits Frankfurt am Main.1980.
- ・ International lending. Principles and guidelines for procedure. IFLA. 1978. Frankfurt am Main. (最近, 各国間直接貸借に関する一部分が変更されたことが, 『図書館雑誌』78 (3) (Mar.1984) p.127 に記されています。)

注1. 処理の速い機関

(アメリカ)

Stanford University

University of California, Berkeley

University of Illinois

University of Iowa

University of Michigan

Princeton University

University of Chicago.

Duke University

Harvard University 前払いだが, 最近は比較的処理が速い

(ヨーロッパ)

BLLD

Bibliothèque Nationale Centre de Prêt

Bayerische Staatsbibliothek

処理の遅い機関

Library of Congress

New York Public Library

University of Hawaii.

注2. ドイツ・フランスなどでは、提出大学の図書館に申込みば、だいたい許可を取っていても受付けてくれる。まず図書館に申込をしてみて、執筆者の許可をとるように連絡がくれば、許可申請をするというプロセスのことが多い。執筆者の現住所がわからない時は図書館に問い合わせる。

他館蔵書の 紹介 <input type="checkbox"/> 複写 <input type="checkbox"/> 依頼 <input type="checkbox"/> 調査 所 No.	日付 19 年 月 日 所属 氏名 Tel. 住所 ex.	<input type="checkbox"/> 雑誌(誌名、巻号、年月日、出版地、頁) <input type="checkbox"/> 単行書(書名、著者名、出版年、版次、頁) <input type="checkbox"/> 論文(論文名、著者名、雑誌名、巻号、頁、年、月、日)	<input type="checkbox"/> 要目使用
上記文献中の論文または記事 執筆者名 論題		上記文献名の出所(その欄所のコピーを添付して下さい) 1. 書誌:(その書名、巻号、年、月、日) 2. 引用・参照されていた(原行本の題名: 著者名、書名、該書該当ページ、雑誌の題名: 誌名、巻号、年、月、頁)	<input type="checkbox"/> 要目使用
所在確認 1. していない 2. 蔵書目録類と調べた(その題名) 3. その他		種写形式: 電子・フィルム(大きさ) その他() 年 月 日 前 後 日 月 日 年 月 日 複写本長(フィルム) 年 月 日 複写本厚(フィルム) 年 月 日 複写本重量(フィルム) 年 月 日 複写本寸法(フィルム) 年 月 日 複写本材料(フィルム) 年 月 日 複写本色(フィルム) 年 月 日 複写本枚数(フィルム) 年 月 日 複写本金額(フィルム) 年 月 日	発行者 レジスタス発行部

(複写処理)

海外研究機関文献複写申込控

Ref.No	—
申込日	19 年 月 日
完了日	19 年 月 日

氏名	所属	住所	〒
申込国	専門	電話	
Acct.No	申込機関		
資料	Acct.Date	Inv.No	Inv.Date
進行状況	単行書 論文 その他	複写 Xerox Microfilm	その他
(返信書)	請求書	見積書	著作権
(届申込)	連絡	連絡	図書費払
現物着	請求書	引渡	署名
連絡	連絡	小切手受領	返送
引渡	引渡	返送	返却
小切手受領		現物着	備考
返送		連絡	
完了		引渡	
		完了	
手数料			担当者

申込機関	
申込日	
Ref.No.	
申込者	
著者	
書名	

KEIO UNIVERSITY
LIBRARY AND INFORMATION CENTER AT MITA
PHOTODUPLICATION SERVICE INVOICE

ORIGINAL

TO:

DATE:
INVOICE NO.:
YOUR ORDER NO.:

ITEM	QUANTITY	PRICE	AMOUNT
FEE FOR SEARCHING			
<input type="checkbox"/> AIR MAIL POSTAGE <input type="checkbox"/> SURFACE MAIL POSTAGE			
<u>THIS INVOICE PAYABLE JAPANESE YEN ONLY</u>	TOTAL		YEN

* CHECKS should be made payable to the 'Keio University' and sent to the following address. When remitting, please quote Invoice No.

REFERENCE & INFORMATION SERVICE
LIBRARY & INFORMATION CENTER AT MITA
KEIO UNIVERSITY
2-15-45 MITA, MINATO-KU, TOKYO, JAPAN

日本大学・総合目録について

湯浅 ツル

(日本大学総合図書館)

1. はじめに

日本大学は1都4県の広域の中に12の学部が点在し、15の図書館を擁している。各学部図書館は独立した図書館として、20年から30年余の歴史があり、約20万～40万冊近い資料を持っている。これらの図書館の間には数年前迄は何の連携もなかったが、昭和50年より全学協力の下に日本大学総合目録作成業務が始まった。この総合目録作成の経過と相互協力及び相互利用の状況を報告することにする。

2. 日本大学総合目録作成経過について

昭和38年に日本大学の図書館の有機的利用をはかり、蔵書構成の質を高めようと日本大学総合目録(案)が総合図書館(旧日本大学図書館)で練られた。この(案)が決定機関の議を経ない内に日大紛争が起り、総合図書館員の配置転換、人員削減等があり、総合図書館は閉鎖され、学生のいない研究図書館となった。昭和44年8月の学部長会議に再び上程され、総合図書館の重要な機能の一つとして総合目録作成業務が承認された。

その内容は単行本の著者目録と書名目録及び雑誌目録を作成することであった。昭和44年当時の蔵書数は85万6千冊で、総経費2,500万円を要して5年から6年で完成する予定であった。然し実際に作業が始まったのは昭和50年12月の単行本のカード複製が最初であった。単行本カードの複製は昭和53年2月迄続けられ、91万枚のカードを複製したが、昭和55年4月迄総合目録編成作業は行われなかった。単行本の総合目録については昭和55年4月の図書館課長連絡会に於て、人文・社会学系の6学部(法学部、文理学部、経済学部、商学部、芸術学部、国際関係学部)の総合目録を編成することになった(総合図書館及び理工学部-駿河台の昭和56年迄分-は別立で編成されている)。昭和55年4月の人文・社会学系蔵書数は175万冊余で最初カード複製した後の増加分のカードについての取り決めが行われていなかったために、編成終了

までには手間がかかった。学部によっては総合目録用のカードを複製しやすいように色分けするなどの配慮がなされていたり、他の学部ではカードの取り直しに快く協力してくれた。この協力によって人文・社会学系だけであるが、単行本の総合目録は昭和56年末には大体完成し、以後半年毎に総合図書館に増加分のカードが送られ、現在も作業が継続されている。

雑誌の総合目録は昭和52年に日本大学総合目録刊行委員会が、全学協力の下に設置され、「日本大学学術雑誌総合目録 自然科学欧文編」の編集作業を開始し、昭和53年2月に発刊した。昭和54年9月には「日本大学学術雑誌総合目録 人文・社会科学欧文編 1978」、昭和55年11月には「日本大学学術雑誌総合目録 自然科学和文編 1980」、昭和58年7月には「日本大学学術雑誌総合目録 人文・社会科学和文編 1983」が各目録毎の編集委員会によって完成した。雑誌目録は紀伊国屋で入力して冊子化したもので、最新誌名方式である。

以上が日本大学総合目録の作成概要であるが原案が作成されてから完成まで20年の歳月を要した。

3. 図書館利用状況

(1) 総合目録を中心とした総合図書館の利用状況

総合図書館は学生がいない特殊な図書館であるため、利用者は主に学部図書館、日大会館内の研究所員及びその他（他機関、個人研究者）である。

(a) 参考業務

	所在調査	事項調査	合計
昭和56年度	160件	28件	188件
昭和57年度	1,199	141	1,350
昭和58年度	1,282	283	1,565
(参考-1館当り)			
イ. 全国大学平均(国・公・私)	915	233	1,148
ロ. 国立大学総合大学	2,024	351	2,375
ハ. 私立大学総合大学	867	338	1,205
ニ. 日本大学合計	9,493	2,099	11,592

注：イ、ロ、ハ、は「大学図書館実態調査報告」(文部省)昭和58年度(昭和57年度実績)昭和59.3刊に依る(四捨五入)
ニ、は昭和57年度実績

(b) 図書の貸出

昭和56年度： 133人 300冊 昭和57年度： 168人 266冊

昭和58年度： 318人 890冊

総合図書館が学部及び国会図書館より借用して貸出した件数及び冊数

昭和58年度： 144件 158冊

(c) 文献複写

受付件数 昭和56年度： 248件 昭和57年度： 195件 昭和58年度： 189件

昭和57年度、58年度の減少は移転のための謝絶による。昭和59年度は増加している。

(2) 日本大学文献複写

(a) 昭和57年度文献複写件数

機関	件数 受付件数	依頼件数
日本大学合計	17,345 ^件	5,958 ^件
日本大学 1館当り	1,156	397
(参考- 1館当り)		
全国平均	536	488
国立総合大学	1,145	519
私立総合大学	540	428

(b)昭和49年度より昭和57年度迄の文献複写件数

年度	件数 受付件数	依頼件数	
昭和49年度	4,979	2,929	件 件 日本大学 文部省 学術雑誌総合目録 学術雑誌総合目録
昭和51年度	6,469 (100)	3,353 (100)	
昭和52年度	7,128	3,478	←→S.53. 2. 自然科学欧文編 1977
昭和53年度	9,915	4,683	←→S.54. 3. 自然科学欧文編
昭和54年度	9,983	4,953	←→S.54. 9. 人文・社会科学欧文編 1978
昭和55年度	12,060	5,335	←→S.55. 11. 自然科学和文編 1980 ←→S.55. 8. 人文・社会科学欧文編
昭和56年度	16,135	4,727	
昭和57年度	17,345 (268)	5,958 (178)	←→S.58. 3. 人文・社会科学和文編 1983 ←→S.57. 6. 欧文編 補遺版

文献複写受付件数の増加は学問の急速な進歩に伴う文献量の増加と無関係ではないが、総合目録がなかった昭和51年度を100とした場合総合目録が完成した昭和57年度は268と伸びていることは「日本大学学術雑誌総合目録」や「学術雑誌総合目録」（文部省）がツールとして役立っていることを物語っている。

4. 利用が伸びた理由について

日本大学の図書館の参考業務や相互貸借文献複写等の利用が伸びたのは総合目録の完成に負うところ大であるが、総合目録を全学部で協力して作成したこと、即ちこの作業を通して学部間のコミュニケーションが行われたこと、相互貸借をスムーズに行うために“相互利用スタッフマニュアル”を作成したこと、このマニュアルの作成に当っては学部図書館を含めた数名の委員が、（案）を練り、それを全学部の実務担当者が検討し、更に課長、館長連絡会に諮り修

正して作り上げたこと、即ちこの過程の中で相互利用体制のルールが敷かれたことに依ると思
っている。

現在は閲覧及び参考係のための基本的な（初心者向け）レファレンスのスタッフマニュアル
を上記と同じようにして作成中である。これが完成すると学内の相互協力体制は一步前進する
ものと思う。

又、参考業務に役立つ総合目録でなければならないと云われているが、日本大学の単行本の
総合目録は副出、分出、人名件名、地名件名等から検索できること。又、著者目録においては
従来書名標目であったようなものも、出来る限り著者を標目としている（例えば全集に於ける
出版社名）こと。これ等のことは検索率を高め、かなり参考業務に役立っている。更に重複カ
ードを1枚のカードにまとめる場合、所蔵館名の押印と同時に請求記号を転記しているがこの
事は受付館に於てのカード検索の負担をなくすると同時に学部に於て検索出来ない場合にも役
立っている。日本大学に於ては校便というものがあり、これを利用すると資料が当日又は翌日
には届くことも相互貸借に役立っている。但し、工学部や国際関係学部は校便がないので他の
方法によっている。

相互利用を伸ばし、かつ円滑に行うにはいろいろな要件が整っていなければならないが、日
本大学の場合は徐々に相互協力体制を作っていったこと。総合目録が幾らか参考業務の役に立
っていること。何よりも肝要なことは相手館の負担を軽くし、必要な資料が必要な時に提供す
る体制が出来た事が利用を伸ばした要因ではなかろうか。

5. 終りに

総合目録は相互利用のツールとして必要なものであると云うことは誰しも認めるところであ
るにも拘わらず、仲々作成されないで来たが、これからは機械入力と相俟って総合目録は作成
されるであろう。日本大学の単行本の総合目録の場合は編成時期が半年から1年遅かったら現
在の方法では実現しなかったかもしれない。

総合目録の当初の目的は資料の有機利用と蔵書構成の質を高めることであった。この有機
的利用は4で述べたように“相互利用スタッフマニュアル”の作成等によりその目的は達せら
れようとしている。蔵書構成については分担収集委員会が発足し、雑誌の検討が始まっている。
予算と効率が釣り合わなくなっている現在、雑誌のみでなく、単行本についても一日も早く分
担収集の取り決めが行われるように願っている。

広い地域に独立した15の図書館の総合目録作成の経過と概要及びその利用状況の報告が相互協力を推し進めていく上で何らかの参考になれば幸である。

以上

『ライブラリー・インストラクション』

—効果的な図書館利用のために—

市古健次

(慶応義塾大学三田情報センター)

レファレンス・カウンターにいと、「この本はどこにありますか」、「日米関係についての文献をさがしているのですが」、「企業の主催するイベントにはどんなものがありますか」など、初歩的なものから調査を要する様々な質問を受ける。質問の比率からすると、圧倒的に、初歩的、基本的な質問が多い。それは至極当然かもしれない。高校では受験に追われ、文献目録を用いてレポートを書くことはまれであろう。大学に入っても、体系的、系統的に図書館、文献目録の利用に関する知識を得る機会を極めて少ない。

こうした状況の中で、一部の先生の要望に端を発して慶応では1979年以来、ゼミ学生を対象にしたツアー形式のインストラクションを行っている。当初二、三のゼミだけであったが、新館が開館した'82年は24ゼミ、'83年は30ゼミとなった。しかし、その数も総ゼミ数の七分の一に過ぎない。ツアーのプログラムは、

- 1 各々のゼミに即した図書を選び、その図書カードおよびNDC、分類目録の説明、
- 2 文献目録から適した雑誌論文を選び、その説明および雑誌の探し方、
- 3 ILLの説明から構成されている。※(ILL; Inter-Library Loan—図書館相互貸借
ツアーは1グループ、12~13人で行い、その時間は45分である。

インストラクションをより効果的に行う方法を求める研究の一環として、その現状把握の為、当分科会で調査を行った。調査結果の詳細は9月に報告した通りであるが、オリエンテーション実施館は参加館28館中15館で、その内、実験的にインストラクションを行っている図書館が2館あり、インストラクションのみ実施館は慶応だけであった。

慶応がインストラクションを行っている背景には、先生の要望のほか、学生の潜在的要望がある。そのことは、文献探索法を尋ねてくる学生が多いことや、ツアー後の感想の中でも見ることが出来る。

今年度はインストラクションの充実を計っている。以前は、文献目録の説明に必要なページのコピーをツアー時に配布していたが、今年からゼミに即した簡単な書誌の書誌を出来るだけ作成し、それも配布している。当分科会に参加し、インストラクションの担当者の一人である松本によると、レファレンス・カウンターは、3月末から5月末まで、ツアーの準備と実施にかなりの時間を割いている。

今後、私自身、インストラクションについて、AV資料を制作し、“利用者が必要な文献を自立的に探せるようになるために、カード目録、文献目録の基本的な利用に関する知識を、前もって必要最少限度、体系的、系統的に提供する”インストラクションの充実を計って行きたいと思う。他方、オリエンテーションの面では、調査によれば、その効果は、うすいという感想が目立ったものの、その必要性は痛感している。昨年、AV資料を巧みに駆使して、オリエンテーションを実施している独協大学を見学することができ、ノウハウや運営法など多くの点を学ぶことができた。今後、実施館に問い合わせたり、見学させて頂く機会が増えるかもしれませんので、その際はひとつ宜しくお願い致します。最後に、当分科会の活動を離れて、調査に御協力下さった皆様に深くお礼を申し上げます。

(追記)

市古さんは「ライブラリー・インストラクション」について慶応義塾大学刊『塾監局紀要』NO.11 (1984)にも発表されています。より具体的に記述されていますので、ここに転載させていただきました。

ライブラリー・オリエンテーションの調査結果

'83.9.20

調査対象館 28 ('83.6実施)

実施図書館 16

担当部署

参考	3	オリエン専委	3
参・閲覧	1	管理者	2
運用	2	全員	2
関・整理	1	特定せず	2

開始年度

1955-1, '65-2, '72-1, '73-3, '75-1, '77-1, '79-1,
'83-2 不明-4

対象

実施時期

全学	1	4月	12
新入生	9	4~5月	2
新・4年	1	4~6月	1
新・ゼミ	3	特定せず	1
ゼミ	2		

人数/回

20人未満	2	600	1
50~60	1	1300	1
150~160	2	(20~300)	1
200~400	6		

配布資料

利用案内	9
利用案内+利用券	3
利用案内+文献リスト	3
なし	1

形式

説明	7	20分-1, 30分-3, 60分-1, 90分-1
ツアー	6	15分-1, 30分-2, 60分-1, 90分-2
8mm	1	
スライド	3	20分 25分-2
ビデオ	1	17分

内容

利用全般	7	文献目録	2
目録カード	7	複写	1
館内案内	6	展示	1
貸出	2	I L L	1

目的

卒論のための文献収集	1
一度利用させる	1
ある方がよい	1

効果

ある	3 (利用者の増加, 目録カード)
悲観	4
わからない	1
改善検討中	3

文献複写に関する諸問題と解決方法について

(文献複写グループ)

はじめに

第Ⅰ期文献複写グループのテーマは、「文献複写に関する問題点の現状把握とその解決策を探る」ということであった。グループ員は、馬場（早大）、出村（創価大）、石谷（和光大）、栗屋（女子栄養大）の4名。途中で、出村氏が機械化グループに転向、湯浅（日大）がオブザーバーの資格で加わった。片や名だたる総合大学、片や小規模大学の組合せで、単に文献複写といっても、一方では「依頼される」立場でものを考え、受けとり、一方では「依頼する」立場で考えるといったふうで、面白い対比であった。打ちとけたザックバランな話し合いの中で、双方が各々の立場を理解でき、収穫の多い分科会であった。

第Ⅰ期の2年間だけでも、相互協力という共通の関心事の中で、最も具体的に行われている「文献複写」に関して色々な流れがあった。すでにあった私大図書館協会の「文献複写申し込み様式統一検討委員会」の中間報告の後、最終報告が出る前に、「国公立大学図書館協力委員会文献複写委員会答申——大学図書館に係わる文献業務の改善について——」が出された。さらにその私大の受皿となるべく、私大図書館協会に、相互協力委員会が組織された。めまぐるしく移り変わる流れの中で、その行方を追うのにせいっぱいのグループ活動ではあったが、私大としての結論がいずれ出されるであろうから、それを待って静観している状態が続いた。（Ⅱ期め終了の現在もなお同じ状態といえ、遺憾の念を禁じえない。）

大きい流れは流れとして、グループとしては、当面のテーマについて検討をはじめた。各々の実情報告を行い、問題点を整理してみると、申し込む側からは、①料金及び支払い方法の不統一、②国立大、一部私大の料金前納制の不合理的、③申し込みから入手までに時間がかかる等申し込まれる側からは、①件数が非常に多い、②不完全な記述、見込み依頼が多い、③学内刊行物は少なくとも整備したい等が出された。学内刊行物については、本来なら図書館に納本されなければならない筈の資料が、必ずしも納本されていなかったり、図書館側のPRが足りず収集しきれていないものを、他大学より依頼を受けて初めて知るといったことがままあって整備の必要性を感じ

たという。このことに関しては、文献複写グループとは別に、久保田（学習院大）、山口（日本女子大）を含めたグループが派生し、その研究成果は、別項で報告することになっている。

各々の問題点をふまえた上で、前述の国公私立大学図書館協力委員会文献複写委員会答申——以下答申という——を検討、さらに私大図書館協会の「文献複写様式検討委員会」委員の稲沼日女氏（東経大）より活動報告を受けた——以下稲沼報告という——。（第10回例会）答申の内容は、衆知のとおりであり、代表機関設置や、料金相殺制など大きな問題を含んでいて、国立大学のように即実施というわけにはいかないであろうことが、容易に想像された。稲沼報告は「私立大学図書館協会文献複写相互協力マニュアル（要旨）と様式」という資料に添って行われた。答申と大きく異なる点は、①料金の問題にはふれていない、②書誌記述典拠、所在指示典拠について記載しなければならないの2点にしばられる。複写依頼にあたり、相手館になるべく迷惑をかけないようにするというのが、担当者の最低のエチケットであろう。複写を受けることは権利ではなく相手の好意によるものであることを、ともすれば忘れがちなものであるが、稲沼報告は、この精神を改めて確認させられるものであった。相手館に成るべく迷惑をかけないということを前提にすれば、前述の申し込まれる側の問題点②の不完全な記述、見込み依頼などは、起り得ない筈である。しかし、現実には起きている問題であり、その解決のために、書誌記述典拠及び所在指示典拠の記載を義務づけたものであろう。ただし、学術雑誌総合目録——以下学総目という——で所在確認して依頼するのがせいっぱいという現状があり、書誌記述を確認する二次資料が全分野でそろっているかどうかということも確とは言えず、形骸化するのではないだろうかとの懸念が持たれた。さらに稲沼氏より、日本医学図書館協会（JLMA）の相互貸借マニュアルが優れたものであるとの紹介があり、当グループとして次の検討資料にした。また折よく、雑誌「医学図書館」282 P.132～142, 1981に角田昭夫氏（横浜市立大学図書館医学部分館）の「日本医学図書館協会相互貸借業務の現状と課題；相互貸借業務実態調査報告の概要」が掲載されたので、併せて読ませて頂いた。

JLMAの相互協力は、昭和2年協会創立以来の努力の積み重ねにより、日本の図書館界の中でも高い評価を得ている。従って、マニュアルにしても報告にしても、非常に整備され、円滑に相互協力を行っていることがよくわかるものであった。特にマニュアル「IV章 書誌的事項の確認・所蔵館調査の資料と解説文献への案内」は有効なものと思われ、他の分野でもこのようなりすとあって、それをうまく活用すれば、より円滑な相互協力が可能になるであろうと思う。また問題点の1つである料金支払い方法については、JMLAでは、「郵便振込」が最も容易で大

勢を占めてきたとしている。さらに申込様式は、現行の往復葉書でよいとする館が85.3%であることも注目される事項であった。

次にグループとしてとりあげたことは、新入会の湯浅（日大）紹介の、「日本大学医学部図書館の相互貸借マニュアル」を検討することであった。JMLAの加盟館として活発な活動をしている日大医学部図書館では、文献複写は受付後2時間内に処理、年間12,000件以上の申込を受けているという。驚くべき数字であった。ここに新しく、申し込まれる側の限界という問題があることを知った。受付件数が多いので、相手館の種類（JMLA加盟館中心）とか、受付資料の範囲（国内所蔵自館のみ）とかを明確にし、それに合わないものは謝絶するということになる。料金も前納制とし、相手館の負担を重くするというのであった。相互協力とはいっても、多くの資料をもった館同志はともかく、流れが一方通行になり、大きい館に集中し過ぎると、相互協力とは言えず、申し込まれる側の限界は当然生じる。依頼する側としては、

- ①自館での申し込み頻度の高い資料はできるだけ自館で持つ。
- ②他館にはあまりない専門性の強い資料は自館での利用がそれほど多くなくても、相互協力目玉資料として持ち続ける。
- ③申し込む際には単一館に集中させない。
- ④多くの館が所蔵している資料については、大図書館への申し込みは避ける、等の配慮が必要なのではないかと思われた。

日本医学部相互貸借マニュアルには、非常に細かい部分まで文章化され、担当者に変更があっても、すぐにでも仕事ができるのではないかと思われる実用的なものである。特に申し込みの際の書誌データの確認に力を入れていることがよくわかり、稲沼報告に盛り込まれた精神を十分にふまえた良い参考資料であった。

グループの最後の検討資料として東京西地区大学図書館相互協力連絡会「文献複写依頼書」記入手続きマニュアルの紹介を受けた。頂いたものは、手書きのコピーであったが、あれから2年余過ぎたことだし、現在では、印刷され加盟館間で有効にお使いになっておいでのことと拝察する次第。内容的には、稲沼報告と同様式のものであった。実施の状況については、いずれかの機会に、是非ご報告頂きたいものである。

以上が当グループの活動の大まかな報告であるが、最初のテーマに立ち戻って文献複写の問題点の解決策を探る——ということになると、現段階では3点にしぼられた。

- I. 申し込みの不完全な記述を避けるために、統一様式を採用し、正確に記入すること。

Ⅱ. 申し込みの集中や申込み依頼による入手の遅れを避けるために、所在・書誌事項の確認をさらに注意深く厳重に行なうこと。

Ⅲ. 支払い方法は、現段階の私大の立場としては、郵便振替がよいと思われる。

2年がかりの結論としては、当り前で、もの足りない気もする。しかし、Ⅰ統一様式は、ようやく金沢の総大会で賛同が得られたが、申込書の販売には至っておらず、Ⅱの実施のためにはツールが必ずしも充分でない、Ⅲについては当グループが考えているだけで、全国的な呼びかけには至らない。----- 様々な動きはあったが、4年を経た現在でも、状態としては何も変わってはいないのである。ただグループ員の意識の上では、成長があり、これからの学術情報センターを始めとする、新しい飛躍の波が予想される今、それまでどうであったかという現状把握と、問題点はしっかりと確認できたものと思っている。

文責

栗屋 皓子

追記

- ① 相互協力で最も大切なのは、人の輪（和）であるという実感。国公立大学においてすら輪ができていれば、借りられる筈のないものが借りられたり、コピー入手が短時間で済む場合がある。この分科会に参加して得た一番大きい収穫は、私にとって輪が、和が、非常に広がった点であり、私大図書館協会の集まりでも、借りてきた猫の如くに参加していたが胸を張って一員として発言できるようになったのも、背後に強力な輪の支えを感じていたからである。今後も広く暖かい輪を持ち続けていきたいと思う。
- ② 文献複写にずっと関心を持って来たが、近ごろの傾向で気になるのが紀要論文の依頼。原則として発行先という気持はわかるが、願わくは、集中管理の組織化ができないものであろうか。1か所に依頼すれば済む故、封書宛名書きの手間がどんなに省かれるであろう。
- ③ 共通閲覧券の制度があちこちで採用されているようだが、私は疑問に思う点が多い。うわさ話程度の情報ではあるが、ほとんど有効に使われていない組織もあるとか。……ある時期が来たら、制度自身を見直す必要があるのではないだろうか。
- ④ 我館は、全国の大学の中でも文献複写に関しては特異な存在で、依頼 400件受付その1割と、極端な依存館である。うち1/3強は、日本医学図書館協会加盟館への依頼である。JMLA加盟館では、葉書形式の申込用紙に統一されており、私大図書館協会の4枚綴封書形式でお願いするのは、かえってご迷惑と判断し、二つの様式を併用しようと考えている。双方を使ってみての実情報告ができる日の来ることを期待している。

学 内 出 版 物 の 図 書 館 で の 受 入
状 況 に つ い て

(学内資料研究グループ)

はじめに

内部資料をテーマとするグループは、山口（日本女子大学）、馬場（早稲田大学）、久保田（学習院大学）の3名でスタートした。はじめ、それぞれの図書館の実情報告を行った。ついで、内部資料（＝学内資料）の範囲、図書館に学内資料を集める意義について話し合い、関係資料を持ち寄った。マニュアル化ができないであろうかということで、各大学にアンケート調査を試みることになった。今回はとりあえず学内発行の逐次刊行物に限定した。以下、その内容と集計結果である。

1 学内出版物（逐刊）アンケート

昭和57年9月実施 参加館 29館 注

主旨：相互協力体制を維持・発展させるためのツールの一つとして所蔵目録があります。学内出版物も登録記載されていますが、学生のクラブ活動誌などもれることがあり、外部からの文献複写依頼などによって、はじめて存在を知ることもあります。相互協力の円滑化のためには、まずは学内の出版物を各自の図書館でしっかり把握しておく必要があると思われます。皆様の図書館ではどのように対処していらっしゃるでしょうか。今回は特に逐次刊行物に限定してアンケートをとることにいたしましたので、ご協力をお願いいたします。

I 納本制度の規定がありますか

①ある 1 ②ない 26 ③検討中 0 ④その他（内規・慣行） 2

（ないと慣行の両方に○をつけたもの2校あり、ないに入れた）

II 積極的に収集していますか

①収集している 11 ②寄贈されるのを待つ 22

（研究室に対して積極的で、学生の出版物に対して寄贈待ちという回答が2校あった）

ため合計が参加校数を上回る)

III 収集の範囲はどこまでですか (収集しているものに○をつけて下さい)

- ①大学 (本部) 出版物 (例: 要項, 広報誌) 28 ②研究室, 附属研究機関出版物 28
③学生のクラブ出版物 8 ④附属園, 附属校出版物 12 ⑤同窓会出版物 20
⑥図書館出版物 22 ⑦その他 2
(その他: 学友会出版物 1 記述なし 1)

IV 各研究室等 (学生のクラブ誌が特に困難であるが) の出版物の把握はどのようにしていますか

大学祭の時に集める	2	研究所出版物は職員に配布される	1
図書館ニュースで呼びかけ	1	そのつど研究室から送ってくる	1
クラブ (員) 募集の出店で集める	1	寄贈のあったもののみ受入	1
会議で依頼する	1	学生のクラブ誌は収集しない	2
出版されたら寄贈依頼する	1		
関連事務局に問い合わせる	1		
寄贈された時点で把む	2	特に積極的に行っていない	3
教授会で配布されて知る	1	特に行っていない	3
人伝てに知る	1	全く把握していない	1
広報誌等の刊行物案内で知る	1	記入なし	7

V 収集の窓口はどこですか そのための担当者がいますか (たとえば逐刊係, 受入係, 総務係等具体的に)

逐刊係 21 受入係 4 総務係 1 庶務係 1 特定の係なし 2

VI 整理作業等で特に変えている点がありましたら, ご記入下さい

- ①分類 090 (明治) 095 (独協) 097 (東洋) G9□ (□は10区分 (学習院))
②目録 簡単な所蔵カード (成城)
③配架 別置配架 (成城, 明治, 東女, 学習院)
未分類も 097の後に誌名アルファベット順に (東洋)
製本を黒表紙 (日女)
④利用 制限なし (成城)

未製本は館内のみ（東洋）

紀要目次コピーファイル（東女）

Ⅶ 学内出版物の目録がありますか

- ①ある 13
- (a)カード式 11
 - (b)冊子式 4
 - (c)一覧表（図書館だより等に掲載されたものを含む） 2
- ②ない 15

Ⅷ ご意見がありましたらお願いいたします

各大学の刊行物リストができればよい（明星）

学内出版物の展示計画中（東女）

アンケート結果を発表してほしい（文教）

〔以下略〕

2 まとめ

アンケートの設問方法が雑だったため、十分な回答ができなかった館もあると思われる。結論めいたことはいえないが、寄贈されたものを受け入れているというのが大半のようである。学内出版物を網羅的に収集するのは難しく、出版されると図書館に寄贈されるようになっているところもあるが、大部分は発行者まかせということで、図書館員が気を配っていないと収集もれしてしまうようである。ひとえに図書館員の熱意いかにかかっているといえよう。

メンバーの個人的事情などによって、グループはアンケートの集計をしたところで解散となった。アンケート参加校以外でも、雑誌所蔵目録、図書館報、図書館利用案内等に学内出版物を掲載したり、展示会で現物を展示して出版物の紹介を行い、同時に寄贈の呼びかけをしている図書館が多い。内部資料（学内資料）には、もちろん学内出版物だけではなく、各大学に関係のある資料を含む。帝塚山大学では「帝塚山大学関係資料保存規程」を制定して資料の収集運用に当たっている。歴史のある大学では、校史資料室等の名称で、図書館とは別の組織（あるいは図書館内の一部局）が、学内資料の収集を行っているが、図書館としても、それと協調しつつ、独自に積極的に収集する姿勢が大切ではないだろうか。

注：アンケートの数値は、分科会で報告したものと一部異なる。

参加校名：青山学院 文教 獨協 学習院 城西歯科 女子美術 女子栄養 慶応（三

田) 国士館 明治(和泉) 明治学院 明星 日本(総合図書館) 日本女子 立
正(熊谷) 立正(大崎) 相模女子 成城 芝浦工業 創価 杉野女子 東海 東京
電機 東京女子東京家政 東京農業 東京理科(野田) 鶴見 東洋

文責:久保田 安子

米国における図書館間相互協力について

奥泉 栄三郎

(メリーランド大学図書館)

どうも皆さん、今日は暑い中をご出席下さいましてどうもありがとうございました。只今紹介いただきました奥泉です。私は1974年に慶応大学のほうからメリーランド大学に渡りまして、その後一度も帰国するチャンスがなく、とうとう8年間むこうで、約3000日になりますが、過ごしました。滞米生活がこれといったこともできずに終るかと思っていたところ、皆さんご存知のように、雄松堂という出版社がスポンサーになってくれまして、我々がプランゲ・コレクション (Gordon W. Prange Collection) と呼んでいるものの一部がマイクロフィルムの形で日本に戻って来ることになりました①。今日のテーマとはちょっとかけ離れるんですけども、多少時間的な余裕があるかと思うんで、その辺の所をまず初めに簡単に紹介しておきます。

今回私がこちらに帰ってこられた理由と言いますか、帰って来られることになったのは、一応メリーランド大学側からの出張という形で来ております。従って多少仕事らしきものもあるわけです。それは何かと言いますと、メリーランド大学というものを日本にもっと知ってもらえたら、ということです。ハーバード大学とかシカゴ大学、コロンビア大学、ああいったものばかりが日本研究をやっているのではなくて、メリーランド大学でも着々とやっているということができるだけ宣伝してこいと。正式なものではないんですけども、そういったことを考えてるんです。それからもうひとつ、これはむしろ私個人の仕事と大学の仕事と半々位になるんですけども、今言ったマイクロフィルムをいかに利用してゆくかという、むこうではユーザーズ・ガイドと言っていますけれども、利用案内を編集しまして、その校正刷りが出来上って来るので、それを東京の印刷屋さんの近くで、出来るだけ時間の許す限り、校正読みをしてこいと、そういう仕事も持って来ております。

この俗に云う利用案内は大体、仕上がった段階で、B5版で500ページ位のものでですけども、原稿は大体2,000枚ほどこちらに送りました②。それで、第一章が、ちょっと皆さんにはなじみ薄い事柄かも知れませんが、いわゆる占領軍というものが、終戦直後の日本の出版物をどうい

ふうに検閲もしくは目を通していたか、そういう歴史を紹介してあります。それから、どうしてこのような資料がメリーランド大学に行くことになったのか、あるいはメリーランド大学側でその後どういう形でその資料に対処して今日に到ったか、そういった略史みたいなものを収めています。

第2章はこちらで言えば、形式的には自分の大学図書館で持っている雑誌所蔵目録というようなスタイルのものです。ただし、内容は非常に変わってまして、一部の人はもう御覧になっているんですけど、ゲラ刷りが出てますので、今からこの席でお返ししますから御覧になって下さい。大きな特徴を言いますと、ほとんどの収録雑誌が公共図書館あるいは大学図書館の蔵書目録をみてもそういうものにリストされていない、まあピンからキリまで載っているんですけどね、そういう雑誌が収録されています。

それで、この本は著作権は雄松堂とメリーランド大学が持ってまして、私のほうで編者になっています。個々の内容を見ますと、皆さんがあるいは体験したものと大きく違っている点は、配列がヘボン式によるアルファベット順であるということ、各タイトルは正しくヘボン式によってローマライズされているということ、それから横文字のタイトルを持っている雑誌はそれから参照がきくように可能な限り参照を出していること。各雑誌の各号は出版年、出版月、出版日とここまで詳しくいれてあること、各雑誌が事前検閲を受けたか事後検閲を受けたか、そういった情報を記号でもって示してあること、その他必要に応じて注記を入れてあります。

第3章にまいりますと、今度は各雑誌がどの程度の割合で検閲をうけて、これを示すドキュメントもしくは資料をどの位残しているかということが一目瞭然と解るような早見表になっています。

これが今回マイクロフィルムに収めた文献資料です。コマ数の多い順あるいは検閲を受けた程度のひどいほうから数えていきますと、例えばこんな順位になっております③。この数字(コマ数)はある意味で、占領軍にいらまれていた程度を示す数字とってよいかも知れません。第一番目にあたるものは、日本共産党機関誌の『前衛』という雑誌で、これは、今回のマイクロフィルムに約3,100コマ収めました。大げさに言いますと、編集者がつくりようとした角度と実際に読者の前に出回った号の内容とは、原形を止どめぬほどの変化を強いられているわけです。で、その他『中央公論』とか『潮流』とか、そういう当時の代表的な雑誌がひどく検閲を受けたものとしてなっていますけれども、大雑把に言いますと大体28の雑誌が、どっちかという、占領軍の言うことを聞かない雑誌だということでマークされまして、一貫して事前検閲を受けています

④。このことは、案外日本でも知られていなかったことなんで、この28タイトルをうまく研究することによって非常に注目される研究ができるのではないかと、そういうふうにご考えておりますけれど今後そういった研究が進んでくると思います。

そのあとサプリメントと言いますか補遺の形で、いまいった28タイトルに対する占領軍が残した雑誌の評価ですね、これをリスト形式にしまして紹介してあります。それから、当時空襲で東京地区の出版社がほとんど焼けてしまったわけですが、ここにあげた、大体3,500タイトルの雑誌が一体どういう地方で出版されていたんだろうか、そういう観点から各都道府県別にどういったばらつきを示しているか、そういうデータをとる為に、約3,500タイトルの出版地別の統計を出してあります。

大体以上のような、大枠を言いますとそういった体裁で約500ページ、日・英両文の本になります。大体、価格が15,000円位ではないかと思えます。マイクロフィルム（全260リール/セット）のほうを買って下さった図書館にはサプリメントとして無料で差上げる約束になっています。一種のレファレンス・ツールの的に使うという意味で、大学図書館等で利用案内だけを買いたいという場合にはそれだけでも販売するというような計画になっています。日・米図書館界における、広義の「相互協力」のためのツールたり得るものと考えています。

そういうような計画がありまして、こちらに戻ってきたわけなんですけれども、大体これは、私達が考えている仕事の内容の約10分の1の仕事なんです。まだまだアメリカ側でこの仕事の意義の評価を高めてゆくという段階にありませんので、日本の研究者もしくは適当なスポンサーを見つけて、できるだけそういう力を結集してコピー化（マイクロ化）して日本に持ち帰ろうと考えているわけなんです。

図書館員の方とか各大学の先生方にも色々声をかけまして、この16日にはそういう研究に理解ある人達を招いてホテル・ニューオータニで多少の声をあげておきます⑤。それで、今朝、田舎の方から上京してきたんですけれども、ここに来る前は2時間ほど朝日新聞と記者会見して来ました。近々記事になるものと思えます⑥。それから、8月17日に（私が向うに帰る前日）グロリア・クラブというところが主催になりまして「最近のアメリカにおける日本研究——図書館員から見た感想——」というようなテーマで、日本出版クラブ会館で、ちょっとした講演みたいなものをする計画になっております⑦。それについては、こういう往復葉書で案内状が用意され、会費2,000円となっています。これもお返ししますので後でご希望があったら、こちらにその旨連絡していただければと思います。かなりの宣伝も含めてお話しすると、以上のような目的と予定を

組んでこちらに参りました。

今日のテーマにそろそろ進みたいと思います。実は何度か真面目にこのテーマについて考えたわけですが、**「米国における図書館間相互協力について」**の一般論については、あまりいい資料も持ち帰っておりませんし、またいい考えも出なかったんですけども、出来るだけ皆さんの方から質問のような形をとっていただいて、皆さんの考えと実例とをうまく利用させていただきながら話を進めていきたいと思っています。

おそらくこちらでも、アメリカでも同じだと思いますけれども、図書館の仕事全般はあまり注目されませんし、また期待する方（利用者）も、やる方（図書館）も、そうはっきりした目的を持っている所とは仲々言いがたいような気が致します。ところが、図書館が消えてしまったらどんなことになるか。困ってしまう人がたくさんいるはずですよ。その辺から考えて話を進めていきますと、終り頃になると多少自分も意義あることの一端を担っているのではないかと、そういうところに戻るかもしれません。初めからあまり（講習会とか何かで言っているような）高尚なことをやっているというところから出発すると大体、最後はろくな事は無いというのがこの世界の一つの特徴ではないかと思っています。それで相互協力ということですけども、これは要するに図書館活動のある部分では無く、元々、むしろ全体に関わる問題だと思っています。従ってひとつの成功した実例というのを見つけるよりは、現実の必要性に着目することですね。相互協力というのは目的ではなく、多分に結果的なものですね。図書館活動の永い歴史と組織化の中で生まれる健全な発想が**「図書館間相互協力」**ということになると思います。

「相互協力」と言う場合に、とかく実例として上げることができるものとしては、例えば図書の相互貸借ですか、こういう問題があると思います。これについて、私の知る限りで、若干の報告をしますと、アメリカではおそらく、日本より活発にこれが行なわれているように思います^⑧。というのは、私の体験では、特に日本研究者に対する見方というのがかなり入ってしまうんですけども、結局、自分の図書館では無いから他の図書館で借りる場合が実に多いわけです（一方的なサービスの流れ）。そういった場合にも、こちらでもそうでしょうけれども、個人の動きでなくて、一応図書館の窓口を通して、そういった依頼を申し出るということです。例えばメリーランド大学の周辺には、大きな図書館がいくつかあります。国立医学図書館（National Library of Medicine）も国立農学図書館（National Agricultural Library）もメリーランド州にありますし、議会図書館（Library of Congress）も、大学から車で20分位で行くことができます。しかし、そういった図書館では直接に個人で資料を館外に借り出すことができません。従っ

て大学図書館を通じて資料を持っている図書館に借用依頼するという形をとります。先方から大学図書館が文献を依頼者のためにとり寄せてしまえば、その後の利用は原則的に大学図書館の利用規則に拘束されます。私がこちらに来る直前には、ノースカロライナ大学というところから、朝雲新聞社の「戦史叢書」という大きなセットがありますけれども、あの中で終戦の時に九州防衛計画がどうであったかというところを書いた巻がありますけれども、そういうものを借りたいという例がありました。きちっとしたタイトルが解っている場合には直接その係を通して借用依頼が来ますけれども、そういった関係のものが出たらしいというような時にはいくつかの参考書を見ながら、そこの担当者に誰がいるかということ調べて、その人に自分の研究はこういうことで、使う目的はこういうことで、ぜひよろしく頼むという手紙が普通来ます。一種の「相互協力」の前提としてココが大事です。で実は、私の所にも手紙が来まして、そういうんだったらあなたの場合はこういう然々の手続きをとれば自由に見られるから、ということに関連情報も含めて教えてあげるわけなんです。それで、研究者 利用者 にとってわかりかし大事なことは、その大学図書館にどういう人間がいるかということをおぼろげに調べる事です。それが第一のポイントになります。その人が直接に知らない場合には、さらにその人が次のわりと知っている人を紹介してくれますし、さらに落ちこぼれないような初期調査といいますか、初期段階の書誌的データが集まるのが普通です。

これもまた、ちょっとPRになるんですけども、実例でいってみましょう。すでに皆さんの図書館に入ったかもしれませんけれども、今年、アメリカ図書館協会ですべての人名録を出しました。この種のものはいくつかあるんですけども、アメリカ図書館協会ですべてのもの、比較的網羅的なもので、おそらく日本円にして25,000円位の本なんですけれども、このタイトルは Who's who in library and information service というタイトルです⑨。こういうものに「人」に関するあらゆるインフォメーションが載っています。生年月日から生まれた土地ですね、それから何を今やっているか、前歴、学歴、所属学科、主たる発表論文もしくは著作活動、こういうもの。それから本人の関心領域、例えば政治資料に非常に（図書館員の立場で）関心を持っているとか。そういったインフォメーション、それから個人の住所もしくは勤め先の住所、こういうものがぎしっと入っているわけです。

自分の図書館に、自分の研究上でどうしても必要なものが見つからない場合で、具体的にどの本が欲しいという時には、総合目録（Union Catalogue）で探して、その持っている図書館に問い合わせればいいんです。これは図書資料の「相互貸借」の典型です。しかしながら、特に大学

図書館なんかの相互貸借になりますと、はっきりしたタイトルはわからない、又、はっきりした著者は解らないけど、こういう分野で、恐らく数十冊のタイトルが有りそうだけれども、今自分がこういうテーマで力を入れてやっているんだけれども、それに一番関連のあるものはどういふもんだらうか。そういった形で質問がしばしば来ます。この場合、事前にその図書館にどういふ「人間」が働いているかと、それを掴まえてそこからスタートしてゆく、そういうケースをとる場合が非常に多いです。従って、日本だとどうしても、何々大学の何々さんという形式が問われる場合が多いんですけども、向うは、誰々が先にきますね、だいたい所属がどこかというのが次に来るような形で。見方によっては自分を大いに売りこんでいます。それで、結局、出来の良さそうな連中がさらに給料の高い方向へと流れていってしまう、この種の「人事異動」はアメリカ特有の現象なんですけれども、そのくらいですから、メリーランド大学の場合を例にとりますと、私なんかはもう在職8年で、すでに古い方の職員に入ります。ご存知のように、プロの段階の図書館員が辞めますと、全国的なしくみによって、専門雑誌に、この程度の人間を募集したいという雇用者側の要望を入れた広告を出さなければならないんです。

(欠員補充・増員) その段階からすでに、優秀な者を集めるというような考え方が有ります。で、そういったプロセスを経て、スタッフを固めてありますので、どうしても何々大学の何々さんというよりは誰々さん、誰々さんで、本人次第。Eさんは去年まではあそこだった。今年はどこそこの図書館にもう替っている。その変化が非常に激しいです。こういう強引なやり方は損失も一面にはあるんですが、国家的にみれば図書館界に「活性」を吹きこませいきいきした側面をみせていることも事実のようです。これも最近の話なんですけれども、私が留学した時の上司はこの8月で比較的有名なY大学の図書館の要職に転職してしまわれたわけです。この人なんかは例のプランゲ・コレクションについて全く学者タイプのドクター論文を書いていて、どうも自分は学者向きじゃないと悟るや(?)途中から管理職に移って一生懸命やっていた方なんです。彼などはかなり、思い切った生き方をしております。その裏側にあるものは結局、例えば館長と合わないとか、色々中味は複雑な問題があるんでしょうけれども、自分で図書館界に対して、そういう実績を売り込んでいますから、早い話、どこにでも就職先が、どういう年齢でもあるわけですね。日本の場合のように退職金のランクがあるわけでも何んでもないですから、本人も気軽に直ぐ他に移っていってしまうわけです。

で、そういった大きな流れの中で、各図書館が、なんとか運営をしていっているというのは、結局、各図書館が非常に標準化されているからなんです。STANDARDIZATION というのが非常に

徹底しているから、新職員でも直ぐその日から自分のやる仕事が決まっています、そのやり方って
いうのは、前の図書館とそんなに大きく変らないという、そういう性格の仕事が待っております
ので、その点ではある意味では、かなり合理化されております。けれども、自分の職場に対する
愛着みたいな、あまりこうはっきり言えない、貢献度といいますか、そういうものは、日本から
比べたら非常に少ないようです。

それから、割と、相互協力の中で問題になるのは、日本で言いますと、複写依頼というような
ことですね。例えば、一方的な流れになってしまうとか、色々な問題があるかと思えますけれど
も、アメリカでは一般的な傾向としては、システム化されていて統一性あり、弾力性ありという
ところですね。料金の設定にも各図書館によって幅がありますし、特殊資料などになりますと枚数
制限をしている所もあります。書庫から取り出してきて、複写係にまわるまでの時間がどれ位か
かったかという所に RESEARCH といいますか調査の時間がかかる。それを人件費に換算して何
ドルかの費用を加算請求する所もあります。私立大学の場合には、よく利用者からかなり高い、
例えば相場で言いますと、7万から10万位（年間）の利用許可証を発行しているところもありま
す。日本でも割合よく知られたある私立大学の例をひとつ。小さな大学で英語で教える日本文学
の講座をもっている先生、こういう先生は、日本の図書館を沢山持っている大きな大学の図書館に
行かないと、自分の大学図書館には見たい本がないわけです。そういう場合大きな図書館を利用
する為に自分の費用（ポケットマネー）か、或いは学校の講座に割当てられた費用（公費）で、
その利用券を買って、それでその大学まで車をとばして、一利用者として資料を入手する、そう
いう形をとっております。

それから、機械化とか、いわゆる今盛んに行なわれているような形態の情報サービスについて
は、ブロックというか REGIONAL というか、各地区に色々なサブ・システムがありまして、それ
が全国ネットに結ばれているわけです。今、OCLC（Online Computer Library Center）の
例をとりますと、メリーランド大学がこれに加入したのはごく最近です。しかし、周囲の小さな
大学は既にかかなり以前からこの全国的規模の組織に加入しております。で、これについてどうい
う事情があったのかと思って、いくつか資料を見たんですけども、メリーランド大学の場合に
は州立大学で、メリーランド大学という名でない州立大学のいくつかと（州政府は複数の大学を
設置・運営している）、それから、こちらで言えば市民大学みたいな、そういう所の面倒をもみ
なければならなかった事情があるわけです。それで、そういう面倒をみて、その他自分の大学の
事を考えると、高い費用を払って加入するのは得策でないというようなことを州の高等教育委員

会の方から勧告を受けまして、何かにつけて、資料を利用するのであれば、中央政府が作っている大規模図書館がいくつも近くにあるから、そこに行ってみればいい程度に考えていた所が多いわけですね。で、近くの私立大学の場合には、とても規模的に自分の大学だけでは加入する力がないから、4つか5つの私立大学が例えば、ジョージ・タウン大学（Georgetown University）とか、ジョージ・ワシントン大学（George Washington University）とか、ホワード大学（Howard University）とか、カソリック大学（Catholic University of America）ですね、こういう中ないし小規模の大学図書館が一緒になって、ワシントン地区の一会員（CONSORTIA）になるわけです。費用を出しあって。それで、実際にはその端末をうまく利用して、ひとつの大学図書館システムの各ブランチが使っているような形で、加入者としては一ヶ所のうまい名前を使ってやるわけですね。そういうことをしていましたから、近辺の大学はかなり早い時期から機械化の恩恵を受けることができたのです。メリーランド大学のように立地条件がよくて、規模が中途半端だと⑩、一時期、そういうひとつの大きな波から遅れるようなことがあったんですけども、これではいかんということで、自力開発か、既存の組織に加入かの選択に迫られました。今から4、5年前に、新しい女性館長を迎え着々と機械化を進めてまいりましたので、今後5年位のうちには、日本でもそのことは話題になるかもわかりません。おそらくアメリカでも有数の機械化システムを実用化するものと思われまます。

これは何かと言うと、いよいよ手を抜き過ぎたので、今までのものにこう、つけ足していった程度の改革では、結局また、さらに10年位たったら、遅れをとってしまいますので、この点慎重に事を構えて、過去のものはずでにもうほとんど切り捨てて、全く新しい発想で進むということに割切っていくわけです。従って、割と過去に実績のあった人の業績というか、仕事の跡がみんな消されていきますので、今言ったように、自分はY大学の図書館長でいくとか、大体給与が一般的にあってアップする議会図書館の方に移ってしまう、そういう動き方をします。ちょっと話がそれましたけれど、機械化システムの方は、かなり難かしいとは思うんですけども、5年先には、本格的な情報サービスの時代に突入すると思います。そこまで一応、目指しています。データというか、ファクトというか、書名や借り出している人をオンラインで出すとか事務の機械化でなくて、むしろ、そういう機械操作の段階で一つの“判断”を途中で入れてしまうというようなことを考えています。それで今言った情報提供という意味では、議会図書館とか、あるいは医学図書館、農学図書館、その他の図書館を丸がかえてしまいますから、大学図書館としては空前のものすごい量のインフォメーションを実際にこなせるという規模のものになります（オンラ

イン情報面の直結化)。

メリーランド大学の場合には、幸いに、機械化を推進してゆく人間を引き抜くことに成功しまして、これは大変なことになると思っております。で、そういう機械化が進んだ段階では、図書館員の考えても見なかったようなサービスが可能になるし、図書館員がそういうふうを考える位だから、利用者の方がおそらくは、ついてこれられないような、あるいはものすごく金のかかるような図書館サービスという形に発展していく可能性が十分あります。

従って、そういう時代の図書館のサービスというのは、ある講座に対してサービスするとか、ある大きな研究資金をもった特定の何々先生のグループにサービスするとか、そういうサービスが図書館の経営的な観点からいっても盛んになってくるのではないかと、思います。個人でコツコツ何かを研究してゆく人達が今後、大きな図書館を使う場合に、ひところ期待していたものとは違う形のものが出き上がって来るのではないかと。それで今から図書館の側でどういふことを考えて、5年とか10年先のことを改革してゆこうとしているかということ、根強く周囲の関係者に説いておくことが非常に大切な役目になってくると思います。そういった場合に図書館の人が自信をもって、そういう人達にある方向づけをできるだろうか。ポジションの違う立場から、ひとつの利用教育を与えてゆくということですから、こういうことについては同等に物を考えていただきたいとか、あるいは、こういう面については自分達の領域だというようなことが、はっきり言えて、しかも相手方もそういう認識を十分してくれるような、そういう状況づくりをしておかないと、困るわけです。大多数の人が図書館のうまい利用の仕方を知らないような状況が出てくるようでは情ない。その辺まで進んでしまう傾向さえみられるわけです。

これからまた、最後のテーマになるかと思うんですけども、今度はぐっと具体的に、この中で多くの方が雑誌の研究分科会にいたというようなこともありまして、私も逐刊の分科会に関っておりましたもので、その点から例えば雑誌の総合目録のようなことを(編纂ではなく)利用の立場から考えて、ちょっとそれを相互協力的な意味からひとつこんな問題もあるというのを紹介してみたいと思います。

正しくはタイトルを忘れましたけれども、日本で研究上ぜひ雑誌をみてみたいということで、参考書を見ますと、大体国会図書館でやった全国の公共図書館の雑誌の総合目録、あるいは「学総」(学術雑誌総合目録)と言われているもの、それから国会図書館の例の所蔵目録、各大学で出している所蔵目録、そういうものはおそらく雑誌の所蔵を確認するいい材料だと思うんです。その他にちょっと変わったのでは、例えば、東京大学の社会科学研究所で出した戦後雑誌総目次み

たいなものがありますけれども、これは必ずしも所蔵先がわかるわけではなくて、むしろ目次にどんなものがあつたかというのをリストしたものですけれども、準じて使えるような資料だと思ふんです。私の経験では、こういうものをみていって、たとえば『中央公論』なんかを例にとりますと、どの目録をみても、非常なスペースを使って、どこの図書館でももっているわけですね。ところが非常に高級な雑誌もしくは風俗的もしくは社会学的に面白いような雑誌で、国会図書館を含めてどこにもないとか、そういうのがあるテーマをみつけて追求していこうとすると、非常に目立つわけです。それで、例えばメリーランド大学には、昭和20年から24年までの、それだけの期間で大体1万3千タイトル位の雑誌が所蔵されているわけです。評価はマチマチなんですけれども、非常に多くのタイトルが日本のどの雑誌所蔵目録をみても載っていません。タイトルが載っていても、ある特定の号数をみたいということになると、またこれがどこにも、個人の何々先生とか何々収集家とかは別問題ですけれども、そういう公表されている参考書類をみただけでは全く出て来ません。こういうように日本で出版した雑誌であっても、総合目録にまったく顔を出して来ないタイトルが比較的いい形で、メリーランド大学にあります。ですから、今後、何かの形でその辺の時代の参考質問を受けた場合には、ひとつには我々のところに問い合わせをしていただくことも、ひとつの手であると思います。また、何かスポンサーという意味で出版社がみつければ、所蔵先は外国であるけれども、本来、日本の総合雑誌目録に加わるべきものであるという意味で、そういうものにメリーランド大学の所蔵内容をつけ加えていくということもまた意義があると思います。

また、もうひとつのやり方としては、かなり我々に雑誌の見方という力がついておりますので、ある特定のタイトルをできるだけしばって行って、日本の大学図書館ではどこにもないというようなタイトルをかなり厳密にしばって行って、それで、もしその雑誌が出版社が現在生きていれば、そういう出版社の許可を求めた上で、例えば、リプリント版を作成する。それを我々のひとつの成果として各大学図書館で購入していただく。各大学図書館では、そういう貴重な号数を、そういう形でもって補充ができるというわけです。これはひとつの事業になりますけれども、こういうことも考えられるということです。

そういうことをできるだけ積み重ねていくことによって、非常に地道ではありますが、現代史や戦後の研究に寄与することができると思います。今後どれ程続くか分かりませんが、戦後の研究なんかに限って言いますと、今の若い研究者は大体、その辺の年代のものを読まないとちょっと自信をもって論文を書けないという、ある意味では相当気を使っている所ですから、そ

ういう意味ではやりがい、もしくは反応というのめかなりあるのではないかと思ひます。

本日の話はまともりませんでしたが、私の考へていることというのは、ズレがあると思ひますので、具体的に皆さんの中から、こういう問題はどうかっているかというやうな質問をしていただき、できれば、そういう質問をいくつかうかがった上で、共通したものが、あるいは、私の体験から何か紹介できれば、そういうものをまた話してみたいと思ひます。具体的にみなさんのほうから何か、あまりテーマをしぼらなくてもけっこうです。また、ぐっとしぼってもかまいませんけれども、何かありましたら。

山口：どうもありがとうございます。一応司会を市古さんにお返しをいたしまして、市古さんのほうで色々進行をつとめていただきたいと思ひます。よろしくお願ひします。

それから、ちょっと御紹介しますが、逐次刊行物分科会の報告に36号から「メリーランド大学通信」というのが載っております。これは一番新しいので、39・40号合併号に「メリーランド大学通信13」というのが載せられております。逐次分科会の報告への掲載は、一応、ここまでになっておりますけれども、こういうのが皆さんの図書館にあると思ひますので、今日の話をつまえて、もう一度読み返していただければありがたいと思ひます。

もうひとつは『本の周辺』という雑誌を御存知だと思ひますけれども、そちらのほうにも奥泉さんの「アメリカだより」というのが載っております。今私の手元には「アメリカだより」の第1回と第2回を持っておりますが、そういう本、あるいは他に「図書館雑誌」その他色々この8年間に奥泉さんがなされた仕事の全体像が、そういうものをみればわかりいただけるんじゃないかと思ひて、あとでまたリストでも作っておまわしたいと思ひますが、そういうものを御覧いただければ、参考になると思ひます。

市古：それでは質問を受けたいと思ひます。たしか奥泉さんはアメリカにいらっしやる前に逐次刊行物の分科会に出てらっしやるそうなんですけれど、その頃から一緒に分科会に出てらっしやる生野さんとか宮崎さん、質問ありましたらお願ひしたいんですけど。

山口：私は今、図書館のこと、今までは逐次刊行物だけをやっていればよかつたんですけど、この頃はその他のことをちょっとかじらなければいけないやうな状況になっておりまして、ひとつ今、大きく問題として私がとらえているのは、先程もちろちろ話が出て来たんですけど、図書館員の養成なり、自館での養成を含めてどういふやうな形でアメリカではなされているかということ。それから、もうひとつは日本の大学図書館でも欧米の図

書館ほどではないですけども、夜間開館というようなことが行なわれているところがあるわけで、日本女子大学も従来私が入りました約20年前は9時まで行ってたわけです。で、利用の面等々を考えまして、今は7時までということに開館時間がカットされてきた状況があります。で、そういう観点から二点ほどおうかがいしたいと思います。

奥泉：はじめのほうの養成の問題ですけども、これは図書館員の養成ということで、同じ程度に重要なことは、利用者の養成というのは変ですけども、利用者教育というものがあるわけです。けれども、図書館員の養成というのは、特に最近の傾向かもしれませんけど、図書館では一般的にやらないですね。むこうでは、採用時点でプロフェッショナルとして採用してくるわけですから、その日か次の日からもう仕事をやれ！ですね。また、教える人もいないわけです。大体相手も知っているし自分も同じ程度しか知らないということで、ただ、結局この世界で自分がなんとかならうという場合には、自分の金を使って、あちこちの学会に出ていって発表するなり討議者のひとりに加わってみるなり、あるいは参加するだけの人もいますですけども、とにかくそういうふういろいろな所に出て行って、自分で自分を養成する。それで、そういうものにかかった費用はやがてはいい職を見つけて、そこに行って取り返してしまうというような、そういうファイトですね。それでやってます。

例えば、私なんかの場合にはアメリカ図書館協会の、日本で言えば大学部会みたいな所に行くとか、あるいはアジア学会というようなほうに行くとか、占領史研究の国際会議に出るとか、そういうところにどんどん参加して行って、それを自分の所の館報に、どういう所に出て行って何をやったかということをいちいち報告するわけです。それは例えば自分がむこうの日本語学 校の理事をしたとか、図書館の仕事とは離れたことであっても、何かそのコミュニティーとか、社会に対する活動、何んでも良いんですけども、自分が過去1年間こういうことをやると、やたらとぶつけるわけですね。そういうことをすることによって、自分を自分で教育してゆくというのは、非常に盛んですけども、図書館の側からそういうことをするというのは、むしろ非常に少ないです。

で、メリーランド大学の場合には、図書館の職員は300人ほどいるんですけども、そのうちの5人に1人位が常勤のプロフェッショナルです。あとは大学でやとっているんじゃないくて、メリーランド州でやとっている人のプール要員で、ひとくちに言えば事務員です。その事務系の人間とプロフェッショナルな人間と、ある種の合同委員会をつくって自

己防衛的な活動を行なっています。プロフェッショナルなグループのほうのコミッティー (COMMITTEE) では、図書館から予算をもらって、一切の条件はつけてもらわないという、そういう形の予算をもらって、メリーランド大学の場合には図書館学校もありますので図書館学校の先生を呼んだり、多少啓蒙的な事はやります。けれども、これは図書館側がやるのではなくて、その任期にあるコミッティーの委員が割と活発だったりするときに行なわれるものです。

それで今言った、先に言った方の自己啓発というんでしょうか。そういうことを高めるために案外面白い方法をとると感心したものは、例えば、図書館学校の先生は恐らく事前の連絡もきちっとしておいたんだと思いますけれども、“RQ”か何かの雑誌に論文を載っけておいて⑩、その論文を中心に皆んなの前で講義します。その後で実際のレファレンスのサービスをしている人間二人を前に出して、そこで簡単に言えば劇をさせるわけですね。実演させるわけです。それでその若い男の職員を前にして女の人（この場合は利用者の役）が前に出て、「図書館員」にあの手この手の質問を浴びせるわけです。こういった場合に、例えば、物があるかないか、これですぐ、いわゆる、利用者に対しては門前払いをくわしてしまうレファレンスの係員もいるし、そのレファレンスの人が聞かれていることについて知識が深いと、聞いている方に嫌味を与えないように非常にいい感覚で周辺の事を紹介していきながら実際に本人に聞いていることが、はじめに言っていることと違って、こういうことなんだなあということが分ってきたりします。そうすると、それならばこれありますよと回答できる場合があるんですけれども、そういうことをひとつの実演をさしておいて、色々コメントをつけていく。そういうやり方というのは非常に現実的ですし、それまで席でねむっていた人も起きてきたりして、ハラハラしながら聞くようになるという具合です。

そういう非常に効果的な教え方というのか、あるいはサービスの仕方というのを生 (ナマ) の形でやって、養成のひとつになるのかどうかはしれませんけれども、要するに、いわゆる養成だ養成だと、どっかに集めてただ誰かが講義してゆくという、そういうんではないんですね。メリーランド州の図書館協会でもやる研修会もありますけれども、驚いたことにはテーマがそこにありながら、テーマのことはあまり言わないんですね。新聞のニュースのことだとか、そんなことを言って終っちゃったりして。大体、ブレイク・タイムとか、あるいは受付の時間とか、そういう時にかえてテーマの重点をきき取ることがで

きるのですね。熱心に何かのことを知ろうとして参加した、問題意識をもってる人はそういう時間に聞くことを聞いてしまうから、本番のその1時間という講演では、話す方も聞く方もリラックスして、ふんぞりかえってやっている。そういう会が案外多いんです。

それから、夜間開館ということになると、ちょっと前にも書いたことがあるんですけども、これはこちらからみれば非常に変わっているというか、相違があります。今はエネルギーの問題が出てきて、燃費の節約といいますが、そういう観念が出てきて、多少時間は短縮される傾向があります。それでも例えば、メリーランド大学の場合には、月曜日から木曜日までは午前8時から午後11時まで、金曜日は午後6時まで、土曜日が午後1時から6時まで、日曜日が昼12時から11時まで。こういう時間帯で、本館のほうは動かしているんです。それから、いわゆる学部学生用の図書館は今でも24時間ルームというのがありますがけれども、これはどっちかっていうと学習室的な機能をもたせたもので、一度はそこに住み込んでしまった学生が出て来たこともあります。これはいかんということで、しばらくの間、1時間ばかり短縮したこともありますけれども、非常に軽犯罪が多いんです。もちろん、24時間ルームの前には、その学生が寮まで帰るのにけっこう距離がありますので（キャンパスが大きいので）途中があぶないということで、エスコートの学生が立つことになっています。しかし、そいつがまた頼りない場合があったりして、アメリカのキャンパスでは、FBIの調査によると5番目に事故が多いキャンパスとなっています。しかし、事故のほうと図書館の開館時間は直接的な関係があるわけではないんで、先生方もしくは学生の要望で、またもとの24時間ベースでやっています。私立大学の場合には大体が学生が休みに入ると、夏期講習でもなければ、閉め切っていますね。もちろん平常時の開館時間も州立からみたら非常に少ないです。州立大学の場合になぜそんなにがんばっているかという、結局はこれは税金で運営しているわけで、地域の住民に万全のサービスをするという建前が一方にありますし、また一方ではこれだけ多くの時間をかけてサービスしたということをアピールしています。それしかじかの予算をくれと、予算をぶんどる理由がここにあるんだぞということを数字をもって示すために開いている場合が露骨に見える所もあります。

例えば、層でいうと7層、8層という大きなビルを2～3人の人しか使ってない。いかにも不経済なんですけれども、その3人の利用者にとってもものすごく必要だっている場合もあるわけで、そういう意味で、閉めるということは完全に0（ゼロ）だし、開けとい

利用しないのは利用者のほうの問題だということです。図書館側では、要するにいつでもいらっしやいという態勢をとっていることを、ラジオ、テレビ、新聞、そういうもを通して盛んにPRしながら長い時間開館している。

それで、これからの日本の図書館における夜間開館はいかに、ということです。皆んなのための図書館なんていうことが割と組織的に浸透してきたのも、やはり戦後なんですね。一部の人にはもうお話ししたことなんですけれども、実はアメリカの陸軍で、開かれた日本の図書館という映画を作ってるんですね。これは図書館活動としては、特に今からみれば、歴史的なものだということを書いておきたいと思います。素人の作ったものなんですけれども、ただ考え方として、皆んなの図書館、開かれた図書館というのを作ったのはおそらくあの辺が初めてではなかったかと思えますし、千葉とか新潟のブック・モービル、移動図書館ですね、こんなものがもうすでに走っています。占領軍の政策がうまくいっているという宣伝用にはしらせただどうか分かりませんが、昔の三輪車ですね、棒ハンドルの。三輪車の荷台に本棚をつけて、いわゆる自動車図書館をかなりへんびな所にまで走らせています。当時娯楽と言えろくなものないから、皆んな村の停留所みたいな所に集ってきて、ブック・モービルをかこみ、これが皆んなの図書館なんだというようなことを非常に好ましい、しかも抵抗のないように知らせている映画ですよ。あの辺の、あの頃の図書館員の考え方もしくは一般市民のとらえ方というものは、守りの図書館員というか、できるだけためるものをいためないように、できるだけ紛失しないようにというような、まったく、一冊一冊を大事に書庫からもってきたり、というものでした。紹介状とか何か色々な必要な書類、そういうものはいっさいいらないんだというような考え方に切り替えていって、しかも、視聴覚なんていう新しい考え方をいれていたんですね。そういう過去の事情を記録した映画が、ひとつ、色々探しているうちに、国立フィルムセンター (National Audio Visual Center) という所で見つかりました。戦争中あるいは戦後のどさくさということもあったでしょうけれども、その直後の状況の中で開館時間をできるだけばしていくことは、職員に対するいろいろ付随した問題も出て来るけれども、無条件にそのこと自体は望ましいというようなことを言っていたと思います。

市古：だいぶ時間もまいりましたけれども、あと2～3の質問を受けたいと思うんですけども、誰か、ありますでしょうか。

安藤：僕も20年近く図書館員をやっているんですけども、職員の異動があるでしょう。自分は

図書館だということだけで仕事しているから。中味で仕事をしていない。中味で仕事するとお茶くみもできない。その辺の展望は。

奥泉：私は日本の事情というのが、この8年間にどれほど変化したか、あるいは大体経済状態の本当の所は分っていませんけれども、新聞とか雑誌でみる限り、建物というか、あるいは物としては非常に目ざましい発展をしていますし、また今後もその線にあると思います。それはもうアメリカなんかほとんど問題じゃないんじゃないですかね。そういった設備というか、物というか、建物の充実さ。これははるかにと言っていい位、アメリカより上にあると思いますね。ただ、それは表面上の豊かさです。例えば、学生数をみたら、キャンパスの広さは？。まだアメリカの大学の三分の一位のキャンパスだけれども、多くの学生とこんなに大きな図書館をもっている。非常に聞こえがよくて、うっかりするとその点で比較を終わってしまうということになってしまう。その中に例えば何万人もの学生がいるなんていうことや、一人一人の学生がどれだけのメリットを受けているかということになると、話はガタガタになっちゃうんですね。そういう色々なファクターを入れていくと、まだまだ日本はこれから、というのが私の感想なんですけどね。

図書館員ということになると、私は今んとこ、まったく利害関係がないから、割と気安く言えるんですけども、結局、我々自身の心の問題としても、また対教員もしくは学生に対しても、私の目から見た限り、図書館員の個人の努力は大いに認めつつも、組織的または制度的な意味で何か上昇線にむかっていると、そういう具体的ないい意味の変化があったかという、はっきり言って非常に疑問ですね。それはどこに原因があるかということ、どうしても追及して行かなければならない。本当は中味で勝負したいところですけども、制度上の問題が多い。これだけアメリカと似かよったことをやっていて、また大多数の人間がそういう方向を目指してやっているのであれば、例えば、そのひとつの改革点は図書館行政という問題でしょう。どうしてもっと組織的に「人」を集めないのか、またそういう養成課程と実戦をこなしてきた人間にそれらしい義務と責任を与えたり、それらしい待遇を与えたり、あるいはポジションを与える。そういうことがなぜできないのか。一番残念なのは、人を生かしているようなことを言いながら、図書館で長くやった「図書館的」人間をまったく別なセクションに異動させてしまうことです。これはその大学からみても、図書館界あるいは日本の社会教育というか、図書館振興策からみても、非常にロスをしているわけです。ですから、例えばその図書館で何かの問題で、居られなくなった

り、あるいは積極的に考えて、自分から出たくなったり、それはかまわないんですけども、その人達がすぐ外を向いた場合に何々図書館でこういう仕事があるという世界をつくりたいですね。それで前よりははるかに良いという、その辺は難かしいところでしょうけれども、少なくとも本人の満足できる仕事が横の関係でうまく確立している、そういう受け入れ側の態勢というものも期待したいですよ。

それから、例えば大学教育の中でひとつの確実な養成計画をたててゆくという意味でも、果して需要に対して適切な養成計画というものが出来ているか。養成計画というものが、こちらではどちらかと言うと、いわゆる下から登って来た学生に対する養成で終わっているから、その卒業していった学生が図書館に就職するとは限らないわけです。そういう知識を持った人が利用者の側になって全国に散ばっているということも非常に大切なんですけれども、まあ急いだ話としてはそういう人達にできるだけ図書館員になってもらいたい。そういう学校に出て、そういう勉強をした人には図書館員になってもらいたい。そう考えた場合に、やはり下からすんなり来た人には、どこかで挫折するような面があちこちにありますね。

ところが、アメリカの方では、必ずしも比較は良くないんですけども、すでに博士号を持っていたり、子供が2～3人いる人が、生活費をかけて1年半とか2年で図書館学のマスターを取っているんですね。そういう人が役立つ図書館員となれるわけで、どっかの図書館員ということではなくても、自分一人という意味でも図書館員という資格に対して誇りを持っているし、金をかけちゃっているわけですね。早い話、生活をかけてするほどではないけれども生活費の一部をかけて自分の人生をかけてそれをおさめるわけです。そのおさめたものは必ず社会で使ってやるぞという気概があるわけですね。その辺が、バックの問題として、日本とアメリカの「人」的な——人を使う人と人に使われる人の——大きな差だと思います。そういう意味で言えば、日本の図書館界っていうのは、「甘えの構造」社会の副産物のようにも見えます。まだまだこれからというところでしょうか。

(本稿は、1982年7月20日、相互協力研究分科会例会〈日本女子大学〉での講演をもとに、若干の脚注と資料を付したものである。録音テープから原稿に直して下さった、麗常夫、宮崎日出子等の皆さんに心から感謝の意を表しておきたい。

——奥泉)

〈補 注〉

- ① 「秘めた戦後史」里帰りへ——GHQ〇検閲資料マイクロ化
米メリーランド州立大所蔵——『朝日新聞』〈夕刊 昭和56年 1981 2月28日（土曜日）〉
第一面記事参照。
- ② 奥泉栄三郎編著『占領軍検閲雑誌目録・解題』雄松堂書店 昭和57 1982 531頁 User's
Guide to the Gordon W. Prange Collection, Mckeldin Library, University of
Maryland at College Park. Part I: Microfilm Edition of Censored Periodicals, 194
5-1949, compiled and edited by Eizaburo Okuizumi. Tokyo YushodoBooksellers, 198
2. xviii, 531p.
- ③ 別表資料〔1〕参照
- ④ 上掲書補遺(1)「占領下の極右・極左事前検閲雑誌」(P.512-525 参照。
- ⑤ この模様を文芸評論家の磯田光一氏が下記の雑誌で報道している。
〈東洋大学・村田氏が情報をもっている〉
- ⑥ 『朝日新聞』〈昭和57年 1982 7月26日（月曜日）13版（社会面）22.〉および同紙〈同
年8月7日（土曜日）夕刊(4)〉を参照。
- ⑦ 奥泉栄三郎「アメリカにおける日本研究の一側面」『Pinus』第6号 1982年9月20日
発行（雄松堂）P.5-6
- ⑧ メリーランド大学図書館には「相互貸借」の専任部門（この部門の略称を一般的にILL
（=Inter library Loan）という）があり、最近の実績の大略は次のようになっている。

サービスの種類	1981	外国	1982	外国
他の図書館に依頼発信した件数	4,350	—	3,850	46
	2,923	—	2,535	
他の図書館から依頼発信した件数	26,843	—	25,862	208
	12,511	—	12,703	

(同大学図書館年次報告書より再構成したもの。()内は実際に処理した件数)

(解説:数字はいずれものべ数で現物の貸借とコピー提供を合算した件数である。原則的に

「相互貸借」の窓口サービスは、事前に各種の総合目録や所在目録などをチェックした上でアクションをおこすことになる。他の図書館に依頼した件数に対する実際の処理件数が割と高い率を示しているのは、この種の事前調査が行き届いていることにもよる。一方、他の図書館から依頼を受けた処理件数の比率が低下気味であるのは、いろいろな館内事情を反映しているものと思われる。

なお、ILLの活動は対外的に物的な文献資料のやり取りが実際に行なわれるのを特色とし、レファレンス・サービス部門の場合には、“情報”(インフォメーション)の受送・交換を専らとする。)

一方、アメリカ全体では年間約2千万点の文献が貸借されているといわれ、そのうち約60%は部分的もしくは全体をコピーする目的で、残りがオリジナルをみたいという要望からである。アメリカ国内に約3万の図書館(そのうち大学図書館は約5,000館)があり、約200館が名実共に第一級の図書館サービスを展開中。全国教育統計センター(NCES = National Center of Educational Statistics)の発表によれば、主要な約2,600の大学図書館間で500万点が貸借の対象になったという(1978/79年度)。また、大学図書館界では年間3,000万件のコピー依頼を受けているともいわれる。

⑨ Who's who in Library Information Services. Ed. by Joel Lee. 736p. 1982 150.00

ISBN 0-8389-0351-7 . ALA.

(奥泉の“人物情報”も詳しく載っている。)

⑩ メリーランド大学は1807年に創立され 1982年に 175周年記念行事 ,現在では8ヶ所に主要施設とキャンパスを持つ首都圏唯一の州立総合大学。パートタイムの学生を含む在籍総学生数は約8万人。年度予算総額(1982年度)は約1,500億(\$543,777,751)。専任教職員(Facultyのみ)は3,200人。博士過程81プログラム,修士過程95プログラム。全10館から構成されている大学図書館の蔵書数200万点以上,中部地区諸州高等教育委員会認定校。

⑪ Johnson, K.A. White, M.D. The cognitive style of reference librarians. *RO*, Vol. 21, P.239-46. Spring, 1982.

Johnson, K.A. White, M.D. Field dependence field independence of information professional students. *Library research*, Vol.3, p.355-69, Winter 1981.

両博士はいずれもメリーランド大学図書館学校教授。ホワイト女史は経営・経済の主題をバックグラウンドの知識として,レファレンスライブラリアンの知的専門性を力説する。主題専門家との相違を Question negotiation の術に求め,ここに独立の分野を設定し得ると主張。

一方,ジョンソン氏は色彩な経歴の持ち主で教材研究のエキスパート。映像認識の効果に注目し,かつてはニューヨーク州の聾啞学校運営担当官などを務めた視覚教育の専門家。

⑫ センターは General Services Administration, National Archives and Records Service の管轄下にあるが所在はメリーランド州。この映画の題名は『格子なき図書館』(原題名: Libraries without Bars)で1951年米国政府(陸軍)制作。上映時間25分。16mmフィルム。白黒。終戦後の日本図書館界の復興と発展の模様を伝え,美術,音楽,文学に対する関心の普及と奨励を目的とした映画でナレーションは英語。複製化して奥泉所蔵。

〈資料 I〉 :

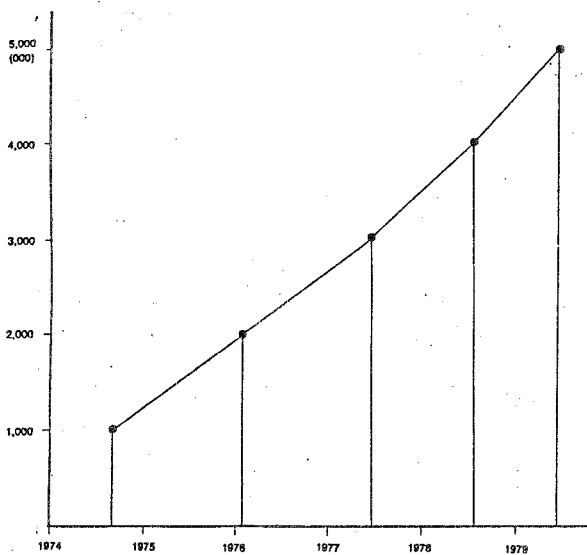
Rank 順位	Title 誌名	Frames コマ数	Reel リール番号	I.D. 雑誌番号	Notes 備考
1	前衛 (Zen'ei)	3,040	254-258	3455	日本共産党中央機関誌
2	潮流 (Choryu)	2,615	18-21	276	総合雑誌
3	新しい世界 (Atarashii sekai)	2,379	6-9	119	日本共産党発行誌
4	世界対日輿論週報 (Sekai Tainichi yoron shuho)	2,085	191-193	2544	外務省政務局情報部秘
5	世界の動き (Sekai no ugoki)	2,075	187-189	2537	毎日新聞社発行週刊誌
6	真相 (Shinso)	2,008	215-217	2822	代表的暴露雑誌
7	世界評論 (Sekai hyoron)	1,899	182-184	2528	左傾誌
8	社会評論 (Shakai hyoron)	1,698	198-200	2601	"
9	人民評論 (Jimmin hyoron)	1,689	67-69	953	"
10	改造 (Kaizo)	1,656	87-89	1116	"
11	不二 (Fuji)	1,377	37-38	442	右傾和歌 (短歌 雑誌)
12	世界 (Sekai)	1,326	178-179	2520	左傾誌
13	中央公論 (Chuo koron)	1,336	26-27	308	"
14	民主評論 (Minshu hyoron)	1,301	126-127	1773	"
15	民主朝鮮 (Minshu chosen)	1,265	124-125	1771	(在日朝鮮人系総合誌)
16	東洋経済新報 (Toyo keizai shimpo)	1,170	243-244	3222	経済専門誌
17	人民戦線 (Jimmin sensen)	1,163	70-71	957	左傾誌
18	真相・特別通信 (Shinso・ Tokubetsu tsushin)	981	218-219	2823	代表的暴露通信
19	評論 (Hyoron)	969	61	843	左傾誌
20	日本評論 (Nippon hyoron)	946	142	1987	"
21	真相特集版 (Shinso Tokushuban)	908	220	2824	代表的暴露雑誌
22	文化評論 (Bunka hyoron)	830	15	220	左傾誌
23	ダイヤモンド Daiyamondo	814	31	333	経済専門誌

24	(日本共産黨) 調査時報 (Nippon Kyosanto) (Chosa jiho)	812	136	1928	日本共産黨発行誌
25	旋風 (Sempu)	786	195	2552	代表的暴露雑誌
26	日本週報 (Nippon shuho)	780	144	1987	総合時局週刊誌
27	The Oriental Economist	738	151	2107	経済専門誌 (英文)
28	日本共産黨解剖 (Nippon kyosanto kaibo)	723	137	1929	右傾誌
29	世界文化 (Sekai bunka)	720	181	2524	左傾誌
30	(日本政治経済研究所) 研究通信 (Nihon Seiji Keizai Ken- Kyujo.) (Kenkyu tsushin)	673	139	1941	政治経済研究通信誌
31	自由国民 Jiyu kokumin	662	79	999	総合雑誌
32	自由評論 Jiyu hyoron	644	78	994	左傾誌
33	労働評論 Rodo hyoron	643	159	2218	労働問題専門誌
34	文藝春秋 Bungei shunju	621	13	207	総合雑誌
35	朝日評論 Asahi hyoron	593	4	87	総合雑誌 (朝日新聞)

<資料 II> : 文献情報の増加

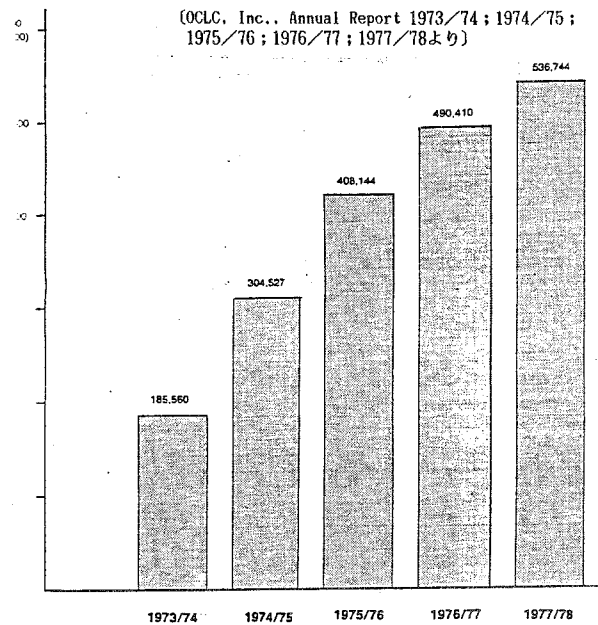
OCLCデータベースの増加

(OCLC Newsletter No.123 (June 13, 1979) : 5より)



OCLCシステム年間文献増加数

(OCLC, Inc., Annual Report 1973/74; 1974/75; 1975/76; 1976/77; 1977/78より)

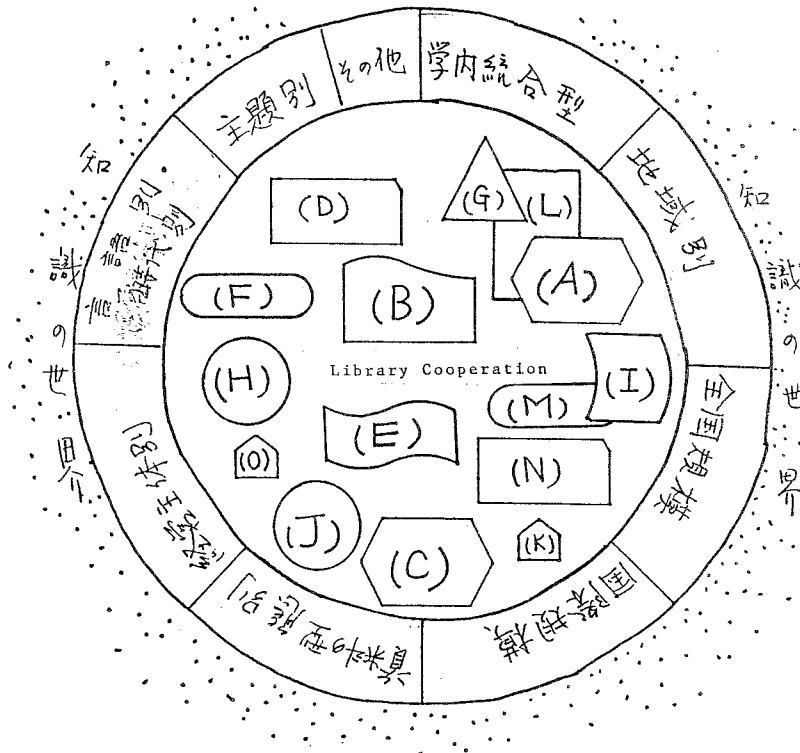


〈資料 Ⅲ〉：「図書館間相互協力」のパターン

〈アメリカにおけるモデルを統合した試案。各群はそれぞれに併合し再分離・発展解消し、変形する社会的有機体の性格を有している。成功の鍵は(1)総合的であること、(2)経済的であること、(3)より完全であること、(4)組織化されていること、(5)開かれたシステムであること、等々の条件を同時に満たすことである。〉

◇凡例◇

- | | |
|---|---|
| (A) Cooperative Acquisitions | (J) Communication Systems Cooperation |
| B Bibliographic Centers | (K) Library Storage Cooperation |
| (C) Cooperative Cataloging | (L) Library Information Networks |
| (D) Union Catalogs | (M) National Programs for Acquisitions and Cataloging |
| (E) Centralized Processing | (N) Union Lists of Periodicals (Serials) |
| (F) Exchange of Bibliographic Information | (O) Library Consortia |



相互協力の現状・実態に関して一言！

- ・文献複写は、他大学への依頼が多いので、たまに学外からの依頼を受けると救われる思いがします。
- ・学生に参考資料の探し方など積極的にP、Rすればする程、他大学への依存度が高くなると思います。
- ・外部への依頼はほとんどが卒論のためのものです。
- ・簡単なレポートなどは、図書館の資料を利用するように指導しています。 (立教大学)

- ・関西方面からの申込が多い。関西地区であるものでも当センターに申込んでくるものが多いし、書誌的事項の確認ができていないものも多い。
- ・阪神地区の列挙型申込様式を何とかしてほしい。様式を統一するにあたっては、必ず一件一様式にしてほしい。
- ・大学紀要の論文は、その紀要を発行した大学の図書館に申込むように統一してほしい。
- ・国費払いの申込の書類作成が繁雑なのをなんとかしてほしい。(こちらで作成して請求する)
- ・国立大学も料金後払い制にしてほしい(東大、九大、筑波等除く、すでに後払い)

(慶応三田情報センター)

- ・なにかとお世話になる側におります。中小図書館といたしましては、せめて速く、正確に送り届けることをモットーに仕事させていただいております。しかし、五年も一人でやっていると、いささかコピー屋、集金屋、払い込み屋業はもうたくさんと叫びたくなるような業務でもあります。 (立正大学)

- ・相互協力の件数もたかが知れている実状だが、以前の人とのつながりでコピーを依頼したり受付したりした頃からすると、相手館の多種多様なことに、今更のように驚いた。小規模館にしては受付が多いが、本学の特種性によるのだろう。うちのような小さい館においては専門外の資料は所蔵できないので、その時は他にお問い合わせすることになるが、分科会に参加して一番良かったと感じるのは、人とのつながりがふえたことで、古いなあとは思いますが相互協力ではまだまだ

人が主役と感じる。 (女子美術大学)

・国公立機関の文献複写料金支払い方法の改正を望む。 (相模女子大学)

・相互協力制度を実施する場合、当初から、大きな地域を想定すると、問題が多すぎて遅々として進まないといった感がある。だから地域をしぼり、またさらに同種の学科をもつ大学間などに限定して、実施することが望ましいと思う。そして、それを基盤として、拡大していくといった方法が、結局早道なのではないだろうか。 (杉野女子大学)

・分科会を通して他大学の館員と友達となれたこと(良き友を得たこと)。この事は個人のコミュニケーションを通して大学間の相互協力関係を作り上げる基礎(いしずえ)ともなるのではないかと考えている。 (日本大学)

・資料の所在を確認の上紹介状を発行したり、文献複写を依頼するので所在調査に時間をとられる。

・全国的規模の総合目録の作成が望まれる。 (学習院大学)

・資料をそろえる事→ただし、担当者の努力だけではどうにもならない場合が多い。

相互協力でよく依頼するものはバックナンバーを購入するなど方法はある。

・迅速(24時間以内に処理) 確實(お金がかからむので大切) 丁寧(コピーの濃淡。折った時、コピーの中心をビシッと決める等)

・単行書の貸出を行う。③

・はっきり行って担当者の問題。ただし、③は上層部とうまく話をつけるか内々にやって事実を積み重ねる。 (城西歯科大学)

読みにくいかもしれませんが、いろいろなことをアト・ランダムに書き連ねます。

※ 昨年度のコピー依頼、250中の「雑誌」131件について依頼の適切性について調査したところ、当館のみ所蔵(含、本学紀要) 23件 17.6%他館ももっているが、地理的、所属団体等の

関係で当館に依頼がきても納得できるもの 73件 53%よって71%は適切と思われた。

しかし他の29%は、地理的に近い大学に依頼していない、「国立大学」というネットワークを利用していない、という2つの理由で依頼は不適切と思わざるを得ない。

しっかりした所在目録のある雑誌でさえ、この始末である。書籍ではこの割合がもう少し高くなるように思われる。ある特定の大学にとって、当館が音楽関係文献の依頼先のトップであることは疑いえない。所在典拠を記すところに、どんな種類の文献であろうと、「学総目」と書いてあるような無神経な依頼にはあきれはてる。

※ 同様に昨年のコピー依頼のうち、参照不定は16件、そのうち、当館で調査をやりなおしてコピーしたのは9件、どうにもわからなくて謝絶したものは7件である。調査をやりなおしてわかったことは、これらのいずれもが、利用者からの依頼に対して図書館員が再調査していないことである。単純な聴き取りミスから、この世に存在しない文献が突如として出現してしまうのだから恐ろしいものである。分野によっては依頼館で再調査できないものもあろう。その場合ははっきり明記してほしい。あまりにひどい依頼にたまりかねて電話をかけたことがある。相手は、利用者を信頼して出した、国立音大に出せば、どんなものでも調べてくれると教授から言われた。今まで調査不備などと言われたことはないし、第一時間がない…ひたすら逃げの一手である。

(この大学、名前を言えばだれもが知っている国立大学ですぞ!) 対応をしながら、こういう図書館では、そこの利用者が気の毒になった。普段のサービスが思いやられる。又同じ職業のものとして情けなくなった。だから、『図書館員風情が…』などとバカにされるのである。

※ 当館では昨年、一年間の登録をしている外部の利用者 360人と、当日利用者 442人を受け入れた。利用資料は合計9659、全利用数の10%を占めた。資料別では雑誌22%、マイクロフォーム30%、楽譜の全集もの23%が特に目立つ。全員、当館の資料の特殊性を目あてに来館しているといいたいところだが、所属している図書館のサービスの悪さや、蔵書構成の不備から当館をもらら利用する人々もいるし、他大学の卒業生で、母校では利用できないため、当館に足を向ける人々もいる。当館のように外部にオープンするのは無理にしても、せめて、同館の利用者が気持ちよく利用できるようなサービス体制の確立とともに卒業生の利用を受け入れるような政策をとってほしいと切に願っている。

(国立音楽大学)

相互協力分科会での二年間

前山富士子
(東京農業大学)

二年間、分科会活動に参加してみて、非常に刺激になって勉強になったと思う反面、とまどいも少なからずあった。今でもそうだがそのころの私は、図書館員としての経験はもちろん、相互協力の仕事についてからも、まだ日が浅く、日常の仕事をこなすことにせいりばいの時期であった。そんな私にとっては、とりあげられた題材のなにもかもが、むずかしく感じられたのである。例会に出席していても、すみのほうにちょこんとすわって傍聴しているのが常で、積極的に自分の意見を述べることは、とてもできなかった。自分の未熟さを痛感させられる思いであった。

分科会に参加するにあたっては、だれでも各自の目標、興味を持って参加するはずだ。

キャリアが異えば当然、興味の対象もちがってくるだろうし、レベルの差もあるだろう。

目的のちがう人たちが集まるのであるから、そのすべてを満足させるというのも無理な話なのかもしれない。

私の場合、分科会に参加することで、日々の仕事そのものに、少しでも役立てたいという、ごく初歩的な目的をもっていった。正直いって、分科会で勉強してきたことは、私には高度すぎたような気がした。とはいえ、決してマイナスではなかったと思っている。なにより情報交換の場が得られたのだから。そしてそれによって、今までほとんど無知だったことが、おぼろげながらもわかりかけてきたのだから。

日々の仕事におわれていると、ついつい外に目を向けるのを怠ってしまう。また、自分で何か勉強しようと思っても、今の私では、雲をつかむような話で、どうしていいやらわからない（はづかしいことではあるが）。そんな時に、忙しさの中から無理にでも時間を作って、例会に参加し勉強をつづけてきたことは、たとえ二年間という短い期間ではあっても、私に新しい目を開かせてくれ、勉強意欲をわかせてくれた。この気持は、これからも持ちつづけていきたいし、機会があれば、再び分科会に参加したいと思っている。その時は、他の人たちのお荷物にならないようにしっかりと実力をつけていきたいものである。

分科会に出席して

倉岡 みち

(文教大学図書館)

長いこと図書館に勤めているが図書の目録整理の仕事がおもだったので、今回、閲覧関係の仕事を希望し配置がえとなった。これを機会に長いことブランクのあった分科会にも出席してみようと思った。

資料相談係は、初めてでもあり図書の整理と違い利用者と直接話し合うことなので、自館のことでも自分は知っていると思い込んでいたことが多く、実は何も知らなかったことを痛感した。

分科会に出席してみて、各大学図書館で意欲的に研究テーマを持ち仕事に取り組んでいる方々と知り合いになれたことや、実情報告の中では実務に直接役立つレファレンスマニュアルのことや、BLLDを実際に利用している館の話や、学術情報システムのこと、奥泉氏の講演会などとても有意義だった。

今後は研究発表を通していろいろな問題が提起されたら、さらに掘り下げて検討してみるのも面白いだろうと思った。

相互協力分科会に参加して

原口 法子

(東洋大学図書館朝霞分館)

相互協力業務に携わり、前任者のやってきたものを、そのまま受け継いだ。そして、その業務をやっていくうちに、自館だけでは解決できない数々の問題に直面した。他館は、どのように解決或いは、努力しているのか、又、相互協力という組織がどのように活動を開始しているのか、そのような疑問と期待をもち、この分科会に参加した。

期待していた以上に、いろいろの情報が入り、他館の人たちとの情報交換ができ、親睦を深めることができた。そして、それらは業務に取り入れられたと確信している。

昭和58年中頃、期待通りに文献複写申込書様式が一応統一された。まだまだ解決しなければならない問題が残っているけれども、その中でお互い前進的に協力的な意見交換をし相互協力活動を円滑に進められるような形をとっている。

分科会会場が、各大学持ち回りということで、いろいろの大学図書館を見学でき、見聞を広めたことは、自館の業務に大いに貢献できたと思う。

約1年間の参加であったが、実に収穫の多い充実した1年であったと確信している。

今後の相互協力分科会の発展と活躍を期待して……!!

相互協力研究分科会設立の経緯

“相互協力研究分科会”は逐次刊行物研究分科会が行った「学術雑誌総合目録人文社会科学・政文編」の所蔵データ提出状況調査を担当したメンバーが中心となって計画された。

この調査は、今回「学術雑誌総合目録」の編集には機械が使用され、次の2点が従来にない特徴となっていた。

- ① 各図書館の所蔵内容をデータベース化することによって今後の改訂を容易にし、データソースの多目的利用の開発をはかる。
- ② 「自然科学政文編」との調査をはかり、データベースの標準化と相互互換性を重視し将来に備えようとしている。

この編集方法の変更を機会に、今後の編集に参考となる資料提供を目的として各図書館の所蔵データ提出作業の実態調査が行われた。

アンケート調査メンバーは、学術雑誌総合目録の目的である図書館間の相互利用についても検討を重ねた。そして総合目録と相互協力の調査、研究を行う分科会の設立を計画し、昭和50年4月、私立大学図書館協会・東地区研究部会の一分科会として発足された。

研究分科会新設要望書

1980年2月20日

私立大学図書館協会
東地区部会研究部
理事校 国立音楽大学図書館
松 下 鈞 殿

発起人代表
東洋大学図書館
村 田 基 宏

今般、新研究部分科会を発足させたく、規約に基づき次のように要望いたします。

—記—

1. 主旨

相互協力は制度としては定着し、すでに協定（地区レベル、法人レベル）に参加している図書館も多くなりました。

しかし、実質的な相互協力は協定とは別のレベルで行われているのが実状であるといえます。

たとえば、分科会活動を通しての担当者同志の協力、あるいは二次資料を介しての相互利用などがあります。

しかしながら、これら二次資料についての現状は、たとえば一館独善主義的などところもあり、記述のアンバランスや網羅性の欠如が目立ちます。また刊行に時間がかかり、up-to-dateともいえないものがあります。個人的レベルでの協力には当然限界があります（例えば現物の相互貸借）。これまでの相互協力態勢は制度として確立されると、どうも実質が伴わず形骸化しがちです。

そこで改めて、相互協力の現状を明らかにし、実質的な協力態勢の確立をめざしてあらたな研究分科会を発足させたいと切望致します。

1. 研究分科会の名称：相互協力研究分科会（仮称）

1. 研究テーマ：

- ①相互協力の実態と問題点の把握
- ②相互利用に不可欠な総合目録の比較検討
- ③各研究分科会に共通する境界領域の諸問題

1. 発起人

千葉工業大学	高梨 昇	日本女子大学	山口 武義
国士館大学	木下 幸子	東京理科大学	安藤 英雄
明星大学	麓 常夫	東洋大学	栗沢 順吉
			村田 基宏
			以 上

相互協力研究分科会（仮称）研究計画書（1980年度）

1980年2月29日

私立大学図書館協会
東地区部会研究部会
理事校 国立音楽大学図書館
松下 鈞 殿

発起人代表
東洋大学図書館
村田 基 宏

先般おとどけ致しました相互協力研究分科会（仮称）の年間計画書を提出致します。

研究計画書（1980年度）

- I. 相互協力の歴史を調べる
 - a. 国内
 - b. 海外
 - c. 私立大学
- II. 相互協力の現状を把握する
 - a. 国内における相互協力の実態と問題点
 - b. 海外 " " "
 - c. 私立大学間における" "
- III. 相互協力に不可欠な合同目録の比較検討
 - a. 逐次刊行物目録
 - b. 図書目録
 - c. その他
- IV. 相互協力方式の比較検討
 - a. 集中センター方式（イギリス方式）
 - b. 分散主題方式（アメリカ方式）
- V. 各研究分科会に共通する境界領域の諸問題
- VI. スケジュール
 - a. 年6回以上の定例会及び見学・講演会・特別例会の開催
 - b. 文献収集と記録化
 - c. 参加にあたっては、各自関心のあるテーマまたは発題のテーマを400字原稿用紙2枚程度にまとめ提出すること。

以上

私立大学図書館協会東地区部会研究部細則

(昭和29年4月1日 制定)

(昭和34年5月8日 改訂)

(昭和35年10月14日 改訂)

(昭和44年2月18日 改訂)

第1条 本研究部は、私立大学図書館協会会則第35条第2項、第39条および第40条に基づいて定められたもので、私立大学図書館協会東地区部会研究部（以下本研究部と称する）と称し、事務所を私立大学図書館協会（以下本協会と称する）東地区部会研究部担当理事校におく。

第2条 本研究部は、本協会東地区部会に所属する図書館の館員で構成する。

第3条 本研究部は、館員の自由な専門的調査、研究を助長し、その成果を改善、向上させることを目的とする。

第4条 本研究部は、前条の目的達成のために次の事業を行なう。

1. 研究部会の開催
2. 研究分科会の育成
3. 研究集会の促進
4. 機関誌の発行
5. 他地区部会研究会との連絡、インフォメーションの交換
6. その他研究部の目的達成に必要な事項

第5条 研究部会は少なくとも年3回開き、研究発表および研究部の事業についての報告その他を行なう。会場は加盟校が輪番で担当する。

第6条 研究分科会は各グループごとに適宜開催し、その研究の進行状況、成果その他を研究部理事および研究部会に報告するものとする。各分科会は本研究部より助成金を受けることができる。

第7条 研究集会は、加盟校各館において適宜開催し、研究部理事に報告するものとする。

第8条 機関誌は第四条の各事業の状況および研究成果を発表するもので、研究部理事が編集の責任にあたる。ただし、当分の間本協会会報をこれにあてる。

第9条 本研究部には、次の役員をおく。

1. 研究部理事 1名
2. 常任幹事 8名（理事校3名その他5名）
3. 幹事 加盟校各館1名

第10条 研究部理事には、本研究部担当理事校代表者があたり、本研究部を代表し、かつこれを統轄する。

第11条 常任幹事は、隔年4月幹事のうちから幹事会がこれを選出し、本協会東地区部会の役員会の承認を得た上、研究部理事をたすけて本研究部の運営にあたる。

第12条 幹事は、加盟校各館より隔年4月1名を選出し、本研究部の運営について協議する。

第13条 本研究部には、部の運営を円滑ならしめるため、次の機関をおく。

1. 常任幹事会
2. 幹事会

第14条 常任幹事会は、研究部理事が少なくとも年3回招集し、次の事項を行なう。ただし必要に応じて各研究分科会世話人あるいは当該研究部会会場校代表者の出席を求めることができる。

1. 研究部の事業計画
2. 研究部会の運営に関する事項
3. 研究分科会間の連絡、インフォメーションの交換
4. 研究部機関誌の編集、発行
5. その他本研究部の運営に関する事項

第15条 幹事会は、研究部理事が年1回以上招集し、次の事項を審議する。

1. 常任幹事の選出

2. 研究部の事業計画案

3. その他本研究部の目的達成に必要な事項

第16条 本研究部の経費は、本協会東地区部会の助成金およびその他をあてる。ただし、必要に応じて実費を徴収することができる。

第17条 本細則の改廃は、本協会東地区部会の承認を要する。

附 則

- 1 本細則は昭和29年4月1日よりこれを実施する。
- 2 本改訂細則は昭和34年5月8日よりこれを実施する。
- 3 本改訂細則は昭和35年10月14日よりこれを実施する。
- 4 本改訂細則は昭和44年2月18日よりこれを実施する。

私立大学図書館協会東地区部会研究部分科会申し合せ

第1条 本研究部分科会は、図書館に関する共同研究およびその知識の普及を目的とする。

第2条 研究部分科会には、研究分科会と研修分科会を置く。

第3条 各分科会は、それぞれ異った大学に属する者5名以上をもって構成するものとし、研究部理事の承認を経て、東地区部会役員会に受理された時に成立する。

第4条 各分科会の存続期間は、2年とし更新することができる。更新に当っては、研究部常任幹事会の認を経て研究部理事の承認を得なければならない。

第5条 研究部理事は、分科会の更新年度初頭加盟館代表者に、次の事項を通知し、加盟館における参加者選定の基準を示さなければならない。

ア) 各分科会の当該年度の研究又は研修テーマ

イ) 研究又は研修期間、回数

ウ) 当該テーマの研究又は研修のために必要とされる条件

エ) 会費徴収額

第6条 加盟館代表者は、更新年度初頭に、各分科会の参加者を決定し、研究部理事に通知するものとする。

研究部理事は、この通知に基き、当該分科会の世話人に因ったうえ、各分科会の会員として登録する。

第7条 各分科会は、本研究部より助成金を受けることができる。

第8条 各分科会は、会の責任者として、少くとも1名の世話人を置かなければならない。

第9条 世話人は、当該分科会を主宰するとともに、毎月末までに、翌月の開催計画につき、研究部常任幹事（分科会担当）に連絡するものとする。

第10条 世話人は、毎年1回研究部理事に、分科会の活動状況および会計報告をしなければならない。

第11条 世話人は、研究部理事の承認をえて、幹事会または常任幹事会に出席することができる。

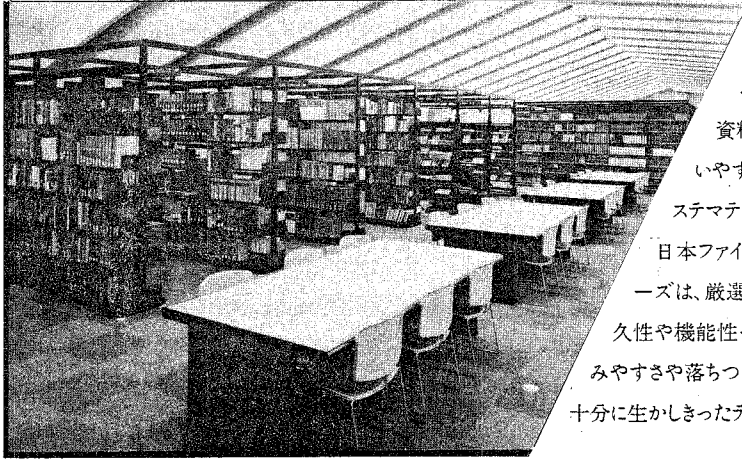
但し、議決権をもつことができない。

第12条 各分科会は、その研究の成果を研究部会において発表することができる。

附 則

- 1 準分科会に対しては、特別の規定はないが、研究部理事に届出のあったものは、第7条を除き、本研究部より可及的な援助を受けることができる。
- 2 本申し合せは、昭和48年4月1日より実施する。

(ゆきとどいた図書館サービスのために) 機能的で親しまれる家具・備品を…)



図書館の家具と備品

は、図書館の動きを左右する

重要な要素の1つです。

資料をひきかたて、利用者が使

いやすく、しかも融通性に富みシ

ステマティックなものが必要です。

日本ファイリングの図書館家具シリ

ーズは、厳選された材料を使用し、耐

久性や機能性への配慮はもちろん、親し

みやすさや落ちついた感触など、その特性を

十分に生かしたデザインです。



日本ファイリング

●本社/〒101 東京都千代田区神田駿河台1-6(主婦の友ビル) ☎03(294)1751

●大阪支店 ☎06(271)3091 ●札幌営業所 ☎011(241)8574 ●仙台営業所 ☎0222(97)5855 ●横浜営業所 ☎045(651)2214

●名古屋営業所 ☎052(582)7075 ●福岡営業所 ☎092(721)7601 ●広島出張所 ☎082(246)8226

私立大学図書館協会

東地区・研究部会

相互協力分科会 第1期

第2期

(昭和55年～58年度)

(第1期・1年目)

Ⅱ. 報告

1. 事務局報告②③ (日程, テーマ等)

第1回例会

1980年4月15日(火) 東洋大学 22名

- 1 相互協力分科会発足の経過報告
- 2 研究計画についての意見交換
- 3 会員自己紹介
- 4 役員選出(世話人, 事務局)

第2回例会

1980年5月13日(火) 東洋大学 28名

- 1 講演「相互協力」について(日本大学
理工学部講師・村尾成允)

第3回例会

1980年6月17日(火) 東洋大学 25名

- 1 相互協力のツールとしての目録
 - (1) 図書目録-「東洋大学図書館蔵書
目録」について-(東洋大学・村田基
宏)
 - (2) 逐次刊行物目録(日本女子大学・
山口武義)
- 2 今後の会の進め方について

第4回例会

1980年7月7日(月) 東洋大学 21名

- 1 相互協力の実験計画
 - (1) 大学図書館の相互協力体制につい

- て (千葉工業大学・高梨昇)
- (2) 研究プラン (案) (日本工業大学・稲垣謙太郎)
- 2 「東洋大学図書館蔵書目録」について
- 3 今後の会のあり方について
- 第5回例会
1980年10月14日 (火) 東洋大学 23名
- 1 昭和55年度第2回私大図書館協会東地区研究部会報告 (女子美術大学・小川桂子)
- 2 第1回大学図書館研究集会報告 (大東文化大学・小野正夫)
- 3 合同目録について
(1) 図書目録 (東洋大学・村田基宏)
(2) 総合目録とレファレンス (東京理科大学・安蒜英雄)
- 第6回例会
1980年11月11日 (火) 東洋大学 20名
- 1 「昭和55年度全国図書館大会 (鹿児島) 第6分科会—大学図書館—」報告 (明星大学・麓常夫)
- 2 研究分担 (グループ分け)
(1) 現状把握と展望
(2) 文献複写・分担蒐集
(3) 総合 (合同) 目録
(4) 機械化・ネットワーク
(5) 内部資料
- 3 合同目録について (東洋大学・村田基宏)
- 第7回例会
1980年12月10日 (木) 東洋大学 23名
- 1 グループ研究について
- 2 総合目録とその周辺 (東京理科大学・安蒜英雄)
- 第8回例会
1980年1月27日 (火) 東洋大学 17名
- 1 グループ研究
(1) 総合目録 (各国の総合目録の現状)
(2) 機械化・ネットワーク (資料の調査)
(3) 文献複写 (文献複写の現状と問題)
(4) 学内資料 (学習院, 日本女子, 早稲田の事例)
- 第9回例会
1981年3月17日 (火) 東洋大学 15名
- 1 グループ研究
(1) 総合目録
(2) 機械化・ネットワーク
(3) 文献複写

(第1期・2年目)

第10回例会

1981年4月21日(火) 東洋大学 18名

- 1 私大図書館協会文献複写申込様式検討
委員会活動報告(東京経済大学・稲沼
日女)
- 2 グループ研究
 - (1) 総合目録
 - (2) 機械化・ネットワーク
 - (3) 文献複写

第11回例会

1981年5月19日(火) 東洋大学 12名

- 1 昭和56年度私大図書館協会東地区連絡
懇話会(女子栄養大学・栗屋皓子)
- 2 グループ研究
 - (1) 総合目録
 - (2) 機械化・ネットワーク
 - (3) 文献複写

第12回例会

1981年6月23日(火) 東洋大学 13名

- 1 私大図書館協会東地区研究部会報告
(共立女子大学・沢田玲子, 女子栄養
大学・栗屋皓子)
- 2 グループ研究
 - (1) 総合目録
 - (2) 機械化・ネットワーク
 - (3) 文献複写

第13回例会

1981年7月4日(火) 東洋大学 12名

- 1 グループ研究
 - (1) 総合目録
 - (2) 機械化・ネットワーク
 - (3) 文献複写

臨時例会

1981年9月22日(火) 千葉工業大学計算
機センター 10名

- 1 見学会
- 2 機械化・ネットワークグループ

第14回例会

1981年10月20日(火) 東洋大学 18名

- 1 グループ研究
 - (1) 総合目録
 - (2) 機械化・ネットワーク
 - (3) 文献複写
 - (4) 学内資料
- 2 学術情報システムについて(創価大学・
出村豊)

第15回例会

1981年11月10日(火) 東洋大学 15名

- 1 講演「図書館機械化の現状について」
(女子美術大学・野島真二)
- 2 (1) 昭和56年度全国図書館大会(埼玉)
第5分科会-大学図書館-報告(日本

工業大学・稲垣謙太郎)

- (2) 大学の校史関係資料に関するアンケート報告 (日本女子大学・山口武義)

第16回例会

1981年12月8日 (火) 東洋大学 16名

- 1 グループ研究
 - (1) 総合目録
 - (2) 機械化・ネットワーク
 - (3) 文献複写
 - (4) 学内資料
- 2 分科会研究報告書作成について

第17回例会

1982年1月12日 (火) 東洋大学 15名

- 1 グループ研究
 - (1) 総合目録
 - (2) 機械化・ネットワーク
 - (3) 文献複写
 - (4) 学内資料
- 2 「学術雑誌総合目録・和文編 新版」の動向について

第18回例会

1982年3月16日 (火) 東洋大学 17名

- 1 グループ研究
 - (1) 各グループの報告
 - (2) グループ研究のまとめと反省

(第2期・1年目)

第19回例会

1982年4月22日 (木) 学習院大学 28名

- 1 1980~1981年度研究経過報告
- 2 会員自己紹介
- 3 役員選出 (世話人, 事務局)

第20回例会

1982年5月18日 (火) 早稲田大学 28名

- 1 例会運営方針の検討
- 2 日本大学, 城西歯科大学 (実状報告)
- 3 学内出版物アンケート調査 (案) について

第21回例会

1982年6月15日 (火) 日本大学 25名

- 1 文献複写と相互貸借 (1)
発表 (東洋大学, 東京農業大学)
- 2 鶴見大学, 青山学院大学 (実状報告)

第22回例会

1982年7月20日 (火) 日本女子大学 23名

- 1 文献複写と相互貸借 (2)
発表 (明治学院大学・菅育夫)
- 2 東洋大学 (実状報告)
- 3 講演「米国における図書館相互協力について1」 (メリーランド大学・奥泉栄三郎)

第23回例会

1982年9月21日（火）明治学院大学

- 1 第3回大学図書館研究集会報告（慶応義塾大学・市古健次）
- 2 文献複写と相互貸借（3）発表（明星大学・麓常夫）
- 3 日本女子大学（実状報告）

第24回例会

1982年10月19日（火）東京理科大学（野田）名

- 1 学内刊行物アンケート集計報告（日本女子大学・山口武義）
- 2 学術雑誌総合目録・和文編 編集経過報告（東京大学情報図書館学研究センター・永田治樹）

第25回例会

1982年11月16日（火）女子栄養大学

- 1 立正大学（熊谷）・女子美術大学（実状報告）
- 2 「学術情報センターシステムーパネルディスカッションー」

第26回例会

1982年12月21日（火）東洋大学

- 1 立正大学・成城大学（実状報告）
- 2 中国の図書館事情（日本女子大学・山口武義）

第27回例会

1983年3月19日（火）女子美術大学

- 1 独協大学・学習院大学（実状報告）
- 2 全国書誌と目録規則ー「国立国会図書館逐次刊行物目録規則1982」についてー（逐次刊行物目録規則研究集会報告）（明星大学・麓常夫）

(第2期・2年目)

第28回例会

1983年4月19日(火) 鶴見大学

- 1 慶応義塾大学三田情報センター(実情報告)
- 2 文献複写と相互協力

第29回例会

1983年5月17日(火) 東京農業大学

- 1 国土館大学・文教大学(実情報告)
- 2 私大図書館協会相互協力委員会からのアンケートについて(東洋大学・村田基宏)
- 3 世話人交代に伴う今後の活動について

第30回例会

1983年6月21日(火) 創価大学

- 1 東京家政大学(実情報告)
- 2 「学術雑誌総合目録・和文編 新版 中間報告とデータシートの記入を中心として」(東京大学文献情報センター・永田治樹)

第31回例会

1983年7月19日(火) 東京電機大学

- 1 芝浦工業大学〈大宮〉(実情報告)
- 2 私大図書館協会総大会〈金沢〉報告(東京電機大学・岡田浩一)
- 3 学術雑誌総合目録・和文編 作業上の

問題点について

- 4 総合目録とその周辺Ⅰ(東京理科大学・安藤英雄)
- 5 ブックスタイルファクシミリの実演見学

第32回例会

1983年9月20日(火) 慶応義塾大学三田情報センター

- 1 相模女子大学(実情報告)
- 2 オリエンテーションアンケート中間報告(慶応義塾大学・市古健次)
- 3 「第4回大学図書館研究集会」報告(創価大学・出村豊, 鶴見大学・鈴木誠)

第33回例会

1983年10月18日(火) 女子栄養大学 19名

- 1 東京電機大学(実情報告)
- 2 総合目録とその周辺Ⅱ(東京理科大学・安藤英雄, 東洋大学・村田基宏)
- 3 講演「米国における図書館相互協力についてⅡ」(メリーランド大学・奥泉栄三郎)

第34回例会

1983年11月15日(火) 立正大学〈熊谷〉20名

- 1 創価大学, 東京理科大学(実情報告)
- 2 私大図書館協会東地区研究部会報告

(創価大学・出村豊)

- 3 昭和58年度全国図書館大会〈山口〉報告 (女子美術大学・小川桂子, 相模女子大学・小山洋子)
- 4 分科会報告書作成について

第35回例会

1983年12月20日 (火) 学習院大学 16名

- 1 私大図書館協会相互協力委員会東地区作業部会報告 (東洋大学・村田基宏)
- 2 国会図書館対図書館サービス調査班アンケートについて報告 (日本女子大学・山口武義)
- 3 私大図書館協会研究部常任幹事と世話人の合同会議について報告 (日本女子大学・山口武義)
- 4 第1回東大文献センターシンポジウム報告 (城西歯科大学・高野恭一)
- 5 分科会報告書作成について (東京理科大学・安蒜英雄)
- 6 総合目録とその周辺Ⅲ (東京理科大学・安蒜英雄)

第36回例会

1984年1月17日 (火) 東洋大学 18名

- 1 東京女子大学, 女子栄養大学 (実情報告)
- 2 日本大学総合目録について報告 (日本大学総合図書館・湯浅ツル)

第37回例会

1984年2月28日 (火) 女子栄養大学 名

- 1 分科会報告書作成について討議

第38回例会

1984年3月27日 (火) 東京女子大学 名

- 1 杉野女子大学 (実情報告)
- 2 私大図書館協会東地区研究部会報告 (日本女子大学・山口武義)
- 3 分科会報告書作成について討議

相互協力研究分科会 会員名簿 (1980-1983)

大 学 名	会 員 名	1983	1982	1981	1980	大 学 名	会 員 名	1983	1982	1981	1980
青山学院大学 理工学部	菊地 真江			○	○	明星大学	麓 常夫	○	○	○	○
青山学院大学	笹目 義子	○	○			武蔵大学	小野寺倫夫				
"	岸田万紀子			○	○	日本大学 総合	湯浅 ツル	○	○	○	
文教大学	倉岡 みち	○				" 松戸歯学部	中村 吉夫			○	○
"	金田千津子		○			日本女子大学	山口 武義	○	○	○	○
千葉工業大学	高梨 昇			○	○	日本工業大学	稲垣謙太郎			○	○
大東文化大学 東松山	小野 正夫			○	○	日本大学 商学部	日高ゆり子			○	○
大東文化大学	伊豆 桂子			○		立正大学	新堀喜代子	○	○		
独協大学	宮崎日出子	○	○	○	○	" 熊ヶ谷	高橋 孝志	○	○		
学習院大学	久保田安子	○	○	○	○	相模女子大学	小山 洋子	○	○		
城西歯科大学	高野 恭一	○	○			成城大学	野口 忠男	○	○		
女子美術大学	小川 桂子	○	○	○	○	成蹊大学	玉置 健児				○
女子栄養大学	栗屋 皓子	○	○	○	○	芝浦工業大学 大宮	市村 吉克	○	○	○	
慶応大学 三田	松本 和子	○				創価大学	出村 豊	○	○	○	○
"	市古 健次	○	○			"	村上 正臣			○	○
国際商科大学	竹内寿美子			○	○	衫野女子大学	左川 真美	○	○		
国土館大学	木下 幸子	○	○	○	○	東海大学	石川 美佐	○	○		
国立音楽大学	後藤多恵子				○	東京電機大学	岡田 浩一	○	○		
共立女子大学	沢田 玲子			○	○	"	馬場 文雄		○		
明治大学 (和泉)	小林 純一	○	○			東京女子大学	平塚 義行	○	○		
明治学院大学	菅 育夫		○			"	広瀬 民人			○	○
東京家政大学	伊藤 光子	○	○	○	○	東洋大学工学部	原口 法子	○			
東京農業大学	前山富士子	○	○			鶴見大学	鈴木 誠	○	○	○	○
東京理科大学 野田分科	安蒜 英雄	○	○	○	○	和光大学	石谷 潤也			○	○
東洋大学	村田 基宏	○	○	○	○	早稲田大学	馬場 静子			○	○
東洋大学	生野 幸子	○	○			" 理工学部	溝淵日出世			○	○

1982年度

収 入		支 出	
会費 (31名)	62,000	通信費	6,500
私大図書館		記録費	
協会交付金	25,000	(カセット等)	7,030
利息	1,820	領収証	250
前年度よりの		講師謝礼	10,000
繰越金	121,470	資料コピー代	5,280
		次年度への	
		繰越金	181,230
計	210,290 円	計	210,290 円

1983年度

収 入		支 出	
会費 (29名)	58,000	記録費	
臨時会費	600	(カセット等)	2,598
私大図書館		領収証	280
協会交付金	28,000	講師謝礼	20,000
利息	2,835	資料コピー代	1,800
前年度よりの		次年度への	
繰越金	181,230	繰越金	245,987
計	270,665 円	計	270,665 円

相互協力アンケート集計 (中間報告)

〈はじめに〉 アンケートの目的

相互協力研究分科会は、「相互協力の現状を把握する」ことを研究課題の1つとして、第Ⅰ期の2年間で国公私大学図書館間での動向、実際の問題点は何かについて検討を行い、第Ⅱ期に入って、分科会参加各館からの事例報告を2年にわたって行ってきた。

相互協力のデータについては、文部省・日本図書館協会の統計に報告されている。この報告からは扱えない、Ⅰ文献複写の①国公私大間、依頼先別の比率、②依頼する際に考慮している事項、③謝絶の割合とその理由、Ⅱ紹介状による直接利用について調査し、改めて現状を見直すことを目的として、アンケートを行った。

今回は中間報告として全般的傾向について記し、詳細なデータと分析は別に報告する予定である。

A 一般項目

下記事項が、相互協力にどう反映しているかを調査した。

①学部・学科数、②奉仕対象人数(学生・院生・教職員)、③資料構成、④管理運営形態。

表-A-1は一般項目の回答集計一覧である。(学生数の多い大学順)

表-A-2は項目別格差指数を表している。(最も少ない数値を100として算出)

(B) 項の相互協力関係項目は規模別に集計されているので、規模間の格差指数を示した。この指数は、奉仕対象者の総数を比べてみると大規模館は小規模館の3.66倍、一館平均では6.96倍となっていることを表している。以下同様。

(表-A-2)

項目別規模間格差指数

項目 \ 指数	大規模	中規模	小規模
奉仕対象者総数	366	182	100
一館平均奉仕対象者数	696	211	100
蔵書冊数(図書)総数	337	183	100
一館平均蔵書冊数	632	211	100
継続受入雑誌総数	146	139	100
一館平均継続受入雑誌数	313	160	100
一校平均の学科数	339	186	100
一校平均の学部数	406	193	100

B 相互協力関係

1. 相互協力関係回答集計一覧

表は全調査館の回答を学生数の多い大学順に一覧表にまとめたものである
(個別館のデータ一覧)

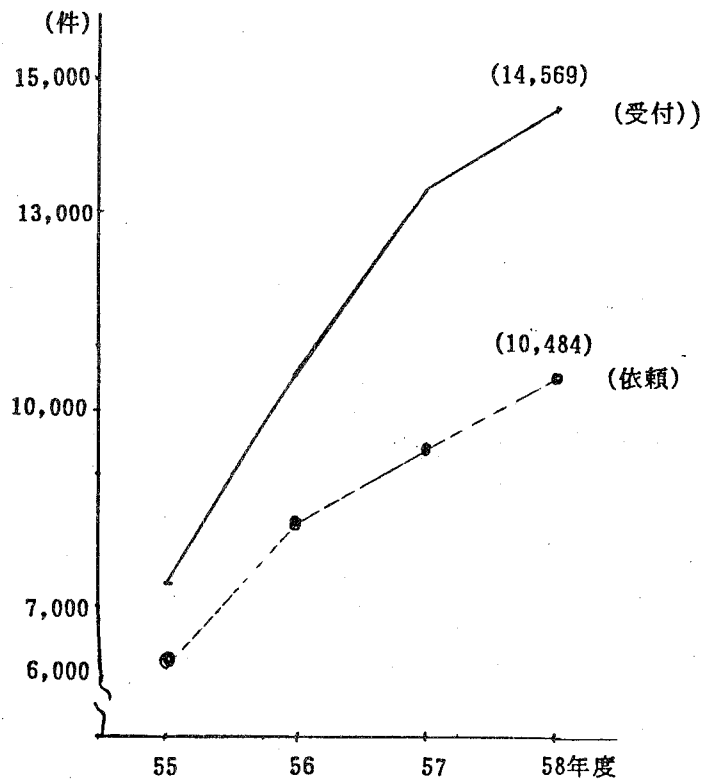
2. 文献複写件数

2-1 文献複写国内受付

1) 受付件数推移

昭和58年度の総件数は、14,569件(回答館38)1館平均は405件で、昭和55年に比べ件数は約2倍となっている。
平均値の指数(昭和55年を100とした時の値)で見ると、56年:126
57年:145、58年:159となり受付件数は年々増加している。

(図-1) 文献複写・受付・依頼総件数



2) 規模別推移 (平均値)

図-2は規模別の年次推移を表している。

大規模館は年々増加率が伸びているが、小規模館は56年度を境に減少傾向にあり、大規模館への集中がうかがえる。小規模館は中規模館よりも高く著しい特徴をしめしている反面、中規模館は平均の2分の1とふるわない。

その他特徴的事項

- ① 昭和58年度受付1,000件以上6館(早大、慶応三田、東洋、東理、鶴見、城西歯)あり、その合計件数は全体の69%をしめている。
- ② 明星、東理は前年に比べ急劇に増加している(58年度)
- ③ 減少傾向が見られる館(東洋工、電機大、城西歯、女子栄養、明学、国立音、東女)もある。

図-2 文献複写・受付推移(規模別)

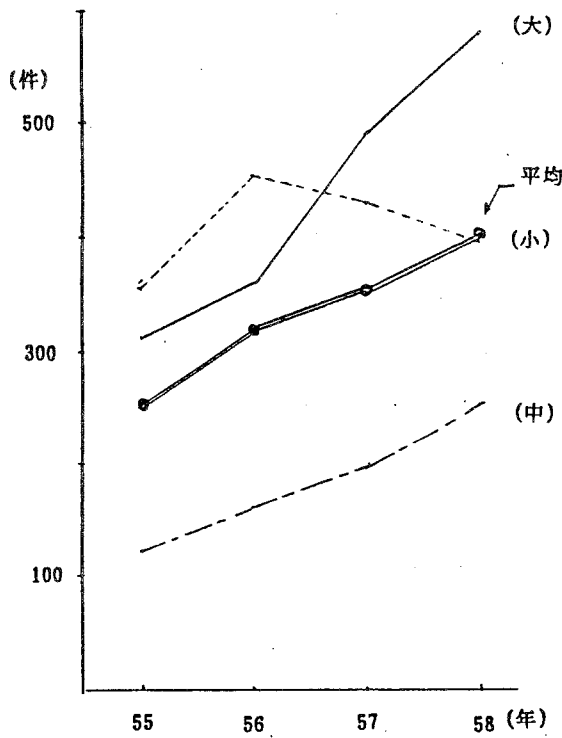
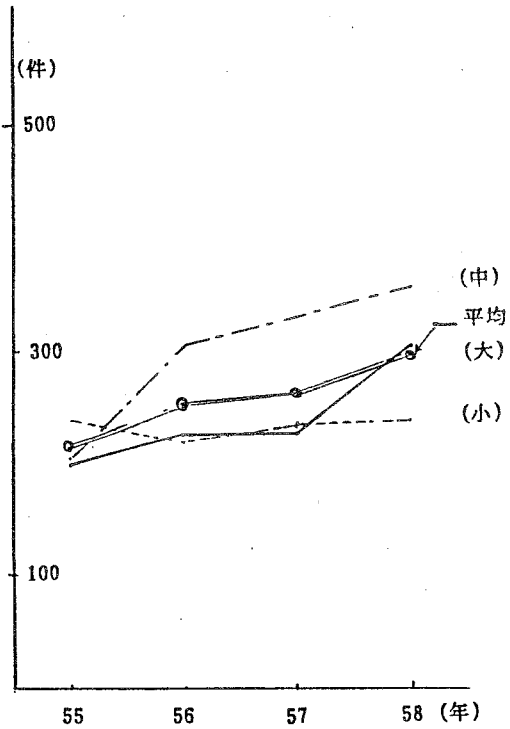


図-3 文献複写・依頼推移(規模別)



2-2 (国公立、私立、その他)館種別、受付状況

図-4は館種別受付件数の比率を表している。

図-4にみられるように館種別受付件数の比率は昭和55～58年 国公立22～25%、私立59～66%、その他11～16%となっており、館種間の年次変動は少ない。

国立からの受付の多い館の、上位2館(慶応三田、東洋)で全体の60～72% 上位4館では78～89%と著しく上位館に集中している。

* 女子美は半数以上が国立大学からの受付となっている

2-3 文献複写・国内依頼(回答館数18、規模別では各6館)

1) 依頼件数推移

昭和58年度総件数は10,484件、1館平均300件である。総件数は受付同様年々増加しており、昭和55年に対し58年は1.7倍になっている。

(図-1)は依頼総件数の推移を表してしる。

2) 規模別推移

(図-3)は1館平均による規模別推移をあらわしている。

中規模館の依頼が受付と逆に一番多くなっている。

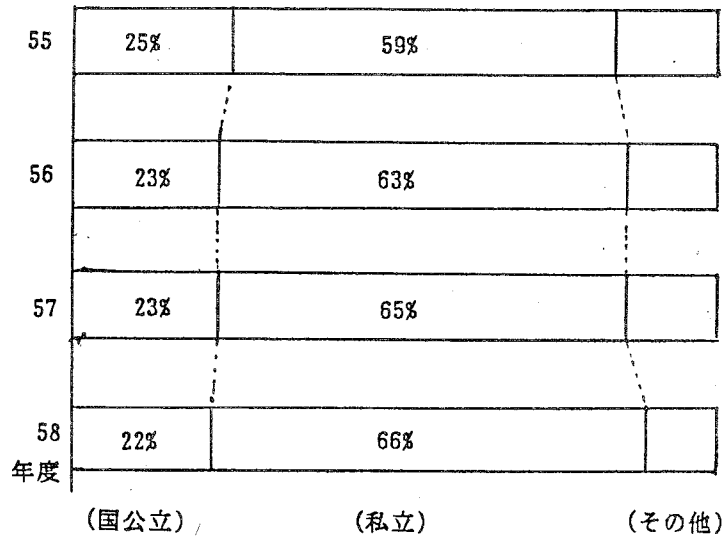
個別館でみると、理歯系に依頼の多い館が集中している。

理系4館(東理、鶴見、城西歯、女子栄養)の合計が総計にしめる比率についてみると、昭和58年総件数10,133件、理系4館計4,276件で42%となっている。

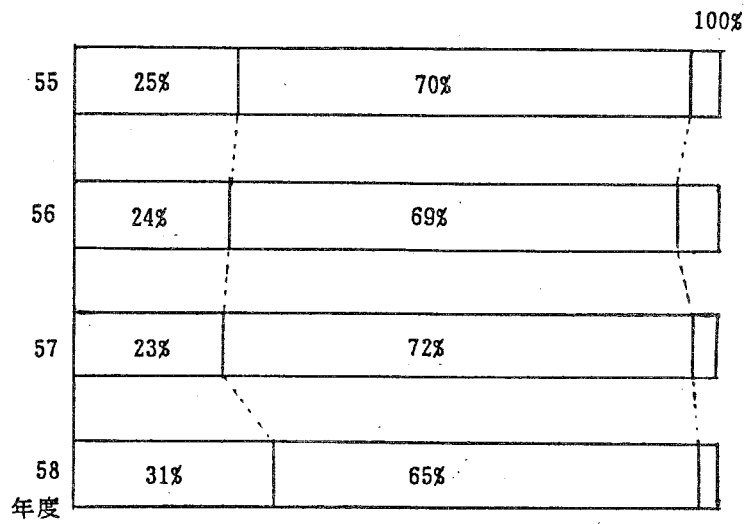
このうち東理を除く3館は小規模館に属しており、この3館で同規模内の84%(昭和58年総件数3,113件、3館計2,624件)をしめており、この3館を除いた1館平均は42件となり、さきに調べた規模間格差は7.9倍と大幅に広がる。

中規模館についても同様の傾向がみられる。依頼にしめる理歯系の比率は規模が小さい程非常に高くなっている。

(図-4) 館種別受付件数比率



(図-5) 館種別依頼件数比率



2-4 国公、私立、その他館種別依頼状況（回答館数37館）

（図-5）は館種別比率を表している。

昭和55～58年間の総計で比べてみると、国立23～31%、私立65～72%、その他3～7%、58年度国立への依頼が上昇しているほかは年次による変更は少ないといえる。

さきに受付について数館に集中していることを見たが、依頼においても同様の傾向が見られる（上位6館で総計の64～79%）

その他特徴のみられる館

- ・国立音、女子美は受付が圧倒的に多い
- ・女子栄養は依頼が受付の10倍程ある
- ・理大は企業からの依頼が多い

国内文献受付依頼の集計結果をまとめると

- ①依頼総件数は年々増加している
- ②理系のしめる割合が著しく高い。特に小中規模館内では顕著である。
- ③国公、私立別では年次による変動は少なく、3分の1弱が国公立への依頼となっているが、これも上位の数館に集中している。
- ④国公立大学からの受付が多い館は、慶応三田、青山、日女、女子美、学習院、大東で、他館は依頼が多くなっている。
- ⑤受付と依頼の比が3>1以上の館は10館ある。
（早大、慶大、青山、明大、成蹊、日女、東女、鶴見、国立音、女子美）
*いずれの館も歴史のある、又は特色のある学部構成の館である。

2-5 文献複写受付謝絶件数

- 1) 受付謝絶件数の比率は、大規模館7.7%、中規模館7.2%、小規模館7.6%と規模による差は少ない。
- 2) 謝絶比率の高い館は人文系に多い。〈東女(58)36.7%、独協(57)19.1%、成蹊(58)18%〉

2-6 受付謝絶理由

①所蔵なし	51.2%
②書誌事項不備	29.3%
③製本中	9.8%
④その他	7.3%
⑤貸出中	4.9%

(昭和55～58年度の総回答の比率)

所蔵なしが半数以上をしめており、所誌事項不備を大巾にうわまわっている。
(所在未確認で申し込まれている)

2-7 料金決裁方法

切手	39%
現金	26%
銀行振込	18%
郵便振替	16%
その他	4%

2-8 複写料金

20円	18%
30	24%
40	37%
45	2%
50	11%
未回答	8%

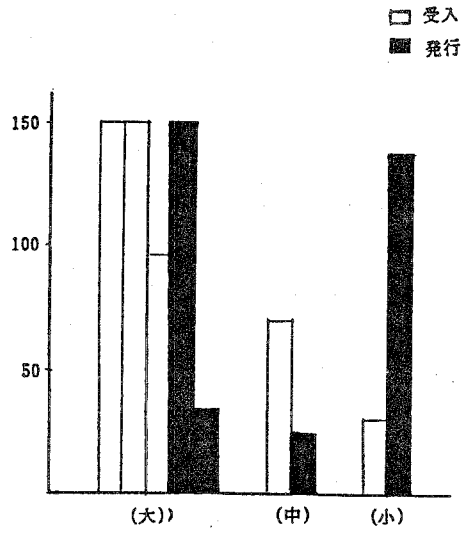
* 全館あと払い（私大間においては支払時期についての合意が得られている）

* 支払方法で、現金・銀行のみを指定している館がある（小額の支払には不都合）

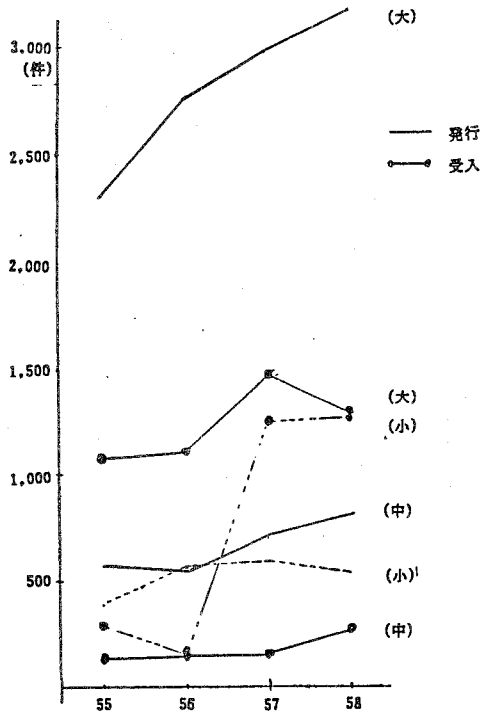
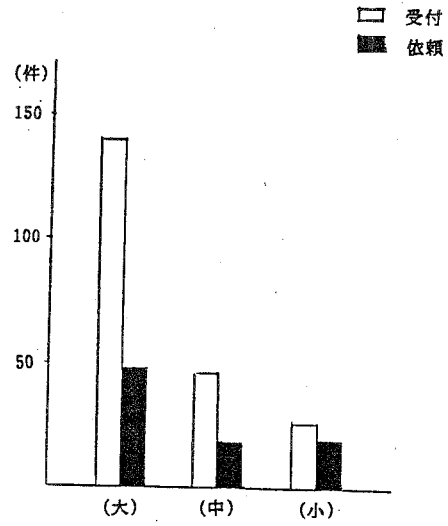
2-9 紹介状（他図書館の利用）

- (1) 受入件数よりも発行件数が上回っている（実際には利用していないことになる）
- (2) 総件数では大規模館は受付、依頼共に中・小規模館に比べ大巾に多い。
- (3) 総件数では中規模館は受付、依頼共に一番少なく、大規模館の5分の1程である。
- (4) 総件数では小規模館は受付は少ないが依頼は多く、受付の約3倍となっている。
- (5) 都内館に集中しており、地域性がはっきり表れている。
- (6) 大部分が受付の館（国立音楽大、女子美術大、杉野女子大）があり、主題による利用傾向が顕著である。

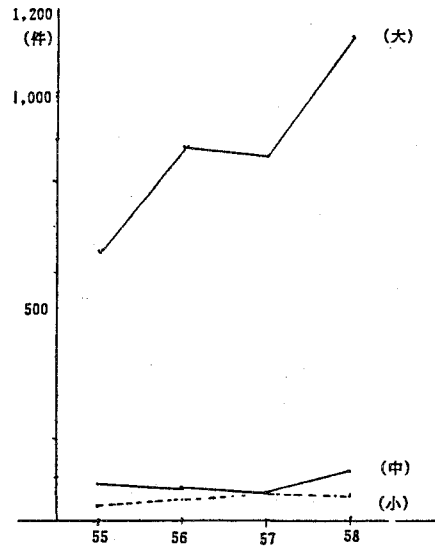
(図-6-2) 紹介状受入・発行 (昭和58年度)



(図-8) 現物貸借 (昭和58年度)



(図-6) 紹介状受入、発行推移



(図-7) 国外依頼、推移 (総件数)

2-10 国外依頼

(図-7)に見られるとうり、大規模館に集中しており、この内慶応、早大が大部分となっている。

2-11 現物貸借

図-8は現物貸借の件数を表している。

受付が依頼よりも多く、大規模館程その差が大きい。

1館平均では、受付69件、依頼26件となっている。

(C) 相互協力の現状・実態に関して一言(本誌参照)

(D) 文献複写を依頼する際に優先している事項、及び依頼を受けることになった理由

(図-9)(図-10)は依頼をする際及び申し込まれることになったと思われる理由の比率を表している。

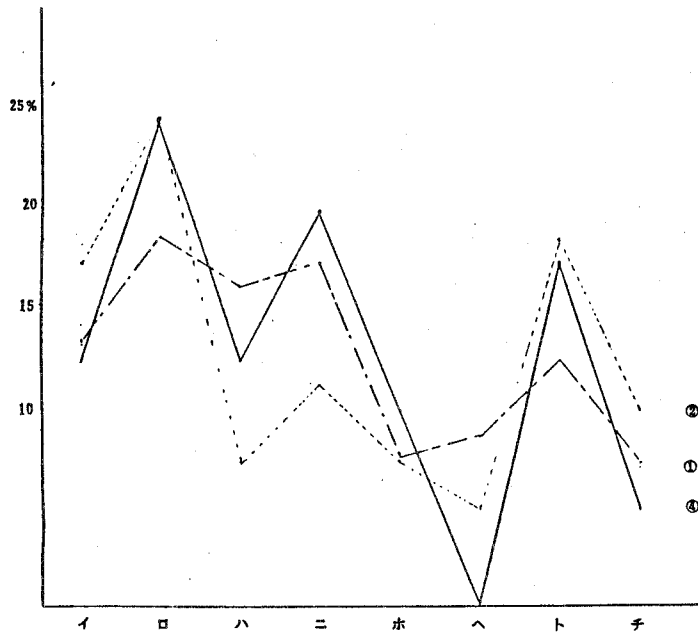
* 館種(主題)による傾向が読み取れる。

* 手続の簡便さ、事務処理の信頼性が依頼する際には優先されている。

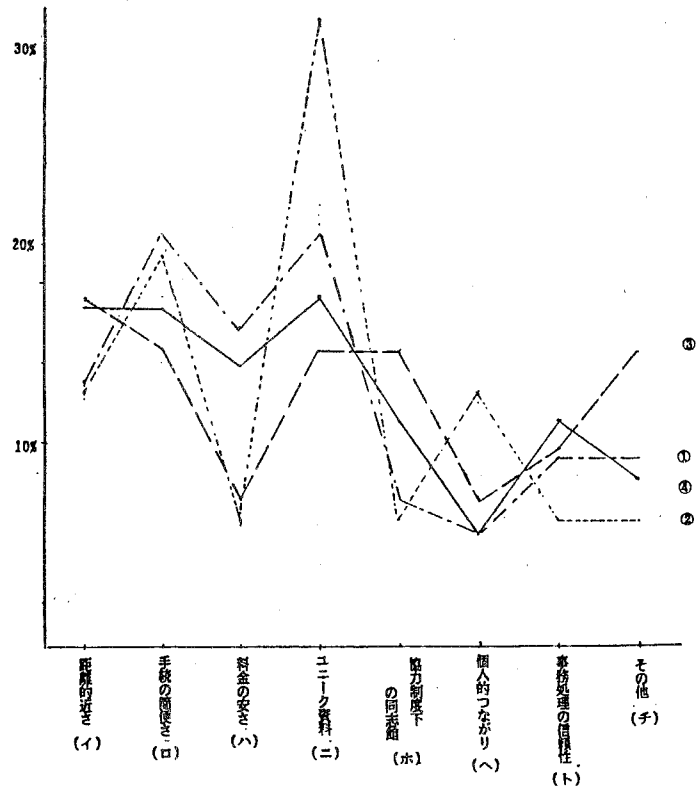
* 依頼を受ける側は、ユニークな資料、手続の簡便さという順になっている

(図-9) 文献複写・依頼先を決めた理由

- ① - - - 人文系
- ② - - - 理歯系
- ③ - - - 美・音・家政系
- ④ - - - 総合系



(図-10) 複写依頼を受けることになったと思われる理由



大学名 (学生数)	年度	文献複写件数(国内)						謝誌提出件数				(国外)			現物貸借 (冊数/件数)	他機関 紹介状 送込 発行	料金請求				
		国公立		私		其他		謝誌 提出 件数	理由 品目 別	送付 体数	複製	BLD	送込	加肥				計	送付 体数	貸行 期間	料金
		送付 体数	送付 体数	送付 体数	送付 体数	送付 体数	送付 体数														
日大 総合 (71621)	55																				
	56																				
	57							195		3								40			
	58																				
日大 商学部 (5385)	55																				
	56																				
	57							1049		290											
	58							1344		392											
早稲田 (40535)	55							721		200											
	56							1033		262											
	57							1049		290											
	58							1344		392											
中央大学 (31447)	55							139		121											
	56							227		223											
	57							289		220											
	58							427		311											
東海大 (湘南校舎) (24771)	55									489											
	56							278		286											
	57							265		301											
	58							327		538											
慶応 日吉 情報センター (16628)	55							105		43											
	56							114		175											
	57							138		195											
	58																				
慶応 三田 情報センター (9908)	55							182		277											
	56							187		373											
	57							268		517											
	58							220		719											
慶応 理工学部 情報センター (2090)	55							27173		1312											
	56							28285		1270											
	57							27185		1316											
	58							28042		1222											

大学名	年度	文献複製件数(国内)						(国外)				現物貸借 (冊数/件数)	他機関 紹介状 発行	料金決済 方法			
		国公	私	国会	学協会	委託	計	返付	委託	計	返付						
慶応医学 情報中心 (547)	55						10374	2660		37	58						
	56						9396	2539		51	67						
	57						9735	2868		105	36						50
東洋大 (白山) (14060)	55	107	60	174	174	0	17	18		1	6			87	80	322	
	56	114	71	214	485	0	26	27		3	4	8		90	81	267	
東洋大 工学部 (3893)	57	195	73	517	152	0	144	14		4	13	14		84	105	274	
	58	158	252	872	240	1	63	20		0	1	13		44	109	257	
青山学院大 (17229)	55																
	56	6		122			13			1	0	1	0		30	13	
	57	3		107			23			1	1	1	0		62	15	
	58						22			0	1	3	0		47	24	
国士館大 (13747)	55	49	16	130	44	0	18	0		4	6	2	0		89	223	
	56	55	16	189	62	0	16	1		1	0	2	0		107	392	
	57	73	29	188	61	0	10	0		0	3	0	0		131	303	
	58	127	14	252	47	0	61	3		0	0	1	0		128	269	
明治学院大 (10022)	55																
	56	5	8	6	32					0					18	23	
	57	12	13	9	28					0					10	30	
	58	2	13	12	19					0					20	22	
明大知庫分館 (7500)	55																
	56																
	57																
	58																
東京電機大 (8931)	55	14															
	56	3	5	71	47	0	43	4		0		0	0				
	57	1	13	94	154	0	30	12		0		0	0		15	24	
	58	8	14	75	126	0	25	13		0		0	0		38	22	

大学名	年度	文部省				複写件数(国内)				其他				現物算借		他機関		料金決済					
		国公立	私立	国会	その他	国公立	私立	国会	その他	委託	代理	委託	代理	委託	代理	交付	計	紹介状	発行	期	支払	引金	
独協大 (8646)	55					32	31			1					0	0							
	56					147	127			4					0	0							
	57					193	263			37					11	3							
	58					183	185			5					1	1							
大東文化大 (8463)	55					0	12								0	0							
	56					15	9			2					0	1							
	57					12	5			1					0	2							
	58					21	5			0					0	0							
東京農大 (8187)	55					305	738								60	4							
	56					379	1323								39	8							
	57					383	1400								4								
	58						1323								70	7							
明星大 (6625)	55					24																	
	56					39																	
	57					54																	
	58					118																	
学習院大 (6622)	55					4																	
	56					31																	
	57					56																	
	58					65																	
成蹊大 (6103)	55					115																	
	56					156																	
	57					146																	
	58					161																	
千葉工大 (5428)	55					15																	
	56					17																	
	57					12																	
	58					15																	
東京理科大 (5343)	55					303																	
	56					472																	
	57					602																	
	58					1105																	

大学名	年度	文献				複写件数(国内)				期数 回数	理由	交付	(国外)		現物貸借 (冊数/件数)	他機関 紹介状 受入 発行	料金決済		
		国公	私	国会	民間	交付	依頼	依頼	委託				時間	料金					
共立女子大 (52.59)	55	7	9	22	27	6	3	35	41	1				8	32	28	1		
	56	14	14	37	22	4	4	55	40	2				7	35	30			
	57	5		40		12		57	46					5	44	30	2		
	58	9		37		12		58	31	5				7	48	37		30	
立正大 (大崎) (51.41)	55							124	129			0	0	0	296				
	56							175	309			0	0	0	0				
	57							161	212			0	3	0	0				
倉田大 (51.00)	58	37	57	169	139	0	82	288	209	14	1	57	0	0	0				30
	55	6	4	18	10	0	3	27	14	1		0	0	0	1	36			43
	56	11	12	23	15	0	0	34	30	0	1	0	1	0	3	54			50
	57	10	4	31	7	0	2	43	11	3	4	0	0	0	3	23			84
日本女子大 (49.15)	58	10	9	27	15	0	0	37	24	1		1	0	0	4	27			40
	55	68	17	183	51	46	0	297	68	40	1	0	3	0	63	221			
	56	37	21	229	52	40	0	306	73	29	2	0	0	11	64	234			
	57	56	31	278	108	38	0	392	139	44	4	0	0	5	65	225			
成城大 (4.511)	58	99		356		27		482		1		0	0	0					
	55							260	45						46	89			
	56							119	55						41	128			
	58							123	74						33	168			30
国産商科大 (4.308)	55													9	33				
	56													4					
	57			2				2		1				12					
	58		1	3	3			3	4					20					
鶴見大 (3.999)	55							1609	916					7	45	7			
	56							2599	933					0	0	49			
	57							3122	764					0	0	36			
	58							3278	481	203	1	11	2	17	53	37			40
国立音楽大 (3.939)	55																		
	56		8		17	2		520	76	31	31			5	8				5
	57					4		520	76	89	89			2	2				5
	58					19		260		19	19			2	2				40

大学名	年度	文献・複写件数(国内)										其他(特別)	(国外)			現物貸借 (冊数/件数)	他機関紹介状 発行/実行	料金請求						
		国公		私		学会		複製		総計			貸付	BLD	送達				別記	貸付	種類	時期	方法	料金
		貸付	総計	貸付	総計	貸付	総計	貸付	総計	貸付	総計													
知光大 (3859)	55	2	8	1	2	3	10	3	10	1	3	1												
	56	3	5	18	44	25	49	4	49	3	49													
	57	2	12	21	28	24	40	1	40	4	44													
	58	2	16	45	15	50	34	34	3	50	1	34										20		
文教大 (3644)	55	5	24	14	9	5	38	1	38	3	41	1												
	56	11	17	15	20	26	42	0	42	5	47													
	57	11	25	10	50	22	72	1	73	5	78													
	58	11	30	25	111	41	147	5	152	1	147											20		
日本工業大 (3411)	55																							
	56																							
	57																							
	58		41	3	5	5	56	2	58	10	63											30		
相模女子大 (3200)	55																							
	56																							
	57																							
	58																							
芝浦工大 (大宮) (2965)	55		1																					
	56		2																					
	57			3																				
	58		2	2	3	22	7	5	22	7	29											30		
女子美大 (2862)	55																							
	56																							
	57																							
	58	56	0	43	21	0	23	7	101	2	103	13										40		
東京女子大 (2562)	55																							
	56																							
	57																							
	58																							
柳野女子大 (1757)	55																							
	56																							
	57																							
	58	1	0	1	0	1	0	2	1	0	0	0										20		

大学名	年度	文献						複写件数 (国内)						(国外)						現物貸借 (冊数/件数)	他機関 紹介状 発行	料金決済		
		国公		私		その他		計		国内		国外		計		BLD	直接	物肥	計			時期	方法	料金
		返付	総冊	返付	総冊	返付	総冊	返付	総冊	返付	総冊	返付	総冊	返付	総冊									
城西齒科大 (1039)	55						1193	1020	69	2	10	10	0	20	4	24	0	109	0				43	
	56						1344	1124	60	10	10	0	15	3	18	55	15					(60)		
	57						1302	1493	73	4	10	15	1	18	5	23	83	28						
	58						1293	1691	77		10	15	2	23	10	33	57	12			2	3	40	
女子栄養大 (860)	55	4	20	18	0	16	38	303	5	8	2	0	1	0	0	1	6	10						
	56	6	21	22	1	16	44	314	1	3	2	0	5	0	5	32	6							
	57	2	25	14	0	23	39	353	0	1	1	0	5	0	5	8	8							
	58	5	37	13	1	17	35	452	2	4	0	0	7	0	7	23	17			2		50		

大学名	学部・学科数			奉仕対象人数			資料					備考			
	人文系	理工系	美・音楽部・部・部	学生	院生	教員数 (兼任)	和	洋	和	洋	継続見入別札数 和		中央 集館	分館 分館名	分散(教) 分館名
日大・総合	6.36	6.25	短期大学 部・部	71,621	2,999	3,036	112,600	35,000	2,262	461					相互利用システム(7/10) 別(相互借入・返却)
日大・商学部	1.3			5,385	30	270	125,295	56,488	706	286					1
早稲田大	6.11	1.13		40,535	2,391	1,992	1,645,000	574,000	97,400	4,700	1		2.1	10	複写機種の所蔵確認後 返却・転送元の別冊別
中央大	4.8	1.7		31,447	464	1,124	603,519	422,595	3,897	1,666			2	3	7
東海大 (柳井校)	2.9	2.20	2.6	24,771	301	1,060	347,000	194,000	3,726	1,688			3		7
慶応・甲	5/	2.		10,628		406	155,982	92,590	650	532					
慶応・三田	4.9			9,908	598	738	527,904	491,056	4,768	2,993					2.5
慶応・理工	1	1.8		2,080	623	364	30,153	19,647	1,006	1,177					
慶応・医学	1	1.1		547	43	2,775	22,584	24,881	1,173	1,432	0				
東洋・白山	5.13			14,060	147	733	293,175	131,375	2,148	619					2
東洋・瑞部	1	1.6		3,893	39	209	56,259	39,637	654	420	0				1
青山学院大	5.11	1.5		17,229	200	417	324,242	284,309	1,549	1,123	0		2		学生に3食費共通入部 4-1
国士館大	4.8	1.4	1.1	13	747	731	261,840	90,346	2,400	550			1	8	4
明治学院大	4.7			10,022	48	740	198,058	124,322	794	710				8	7
明大・和泉校	5.9			9,500		542	129,000	22,000	249	108					1
東京電機大	1	2.11		8,931	82	426	160,085	48,033	778	942	0				本館・分館間で7/7 3:1に返却される別冊
獨協大	3.6			8,646	14	363	186,351	120,664	2,827	659	0				
大東文化大	4.9			8,463	81	571	235,290	88,784	2,104	552			1		10
東京農大	1	1.10		8,187	81	302	231,308	65,317	1,394	2,056					2
明星大	1.4	1.5		6,625	57	268	197,144	196,539	1,478	761			1		13
学習院大	3.11	1.3		6,622	333	743	413,359	245,717	3,534	1,203			10	3	3

大学名	学部・学科数			兼任科数人数			資料						備考				
	人文系	理工系	美音家	学生	院生	教職員 (兼任)	図書		経費投入件数		中央 集計	分散(数)					
							和	洋	和	洋		分館		寄附館 圖書	研究出 産	別荘 の 数	
成蹊大	3.7	1.4		6,103	82	827	241,715	144,885	2,131	915		1			1	分館は工学部関係 雑誌の外	
千葉工大		1.9		5,428	12	321	72,870	26,769	774	745							
東京理科大		1.10		5,343	263	362	107,077	67,654	446	785			1	11	3		
共立女子大	1.6		1.3	5,259	35	583	221,838	79,076	1,542	244	0	2	3		1		
正正大崎	4.10			5,141	140	323	248,659	74,708	1,560	28	0					5	別館と本館の間に 資料室は無料で
創価大	5.7			5,100	100	360	208,538	118,418	848	739	0					3	
日本女子大	1.5		1.7	4,915	118	560	230,471	92,528	3,083	630	0				1		
成城大	3.9			4,511	115	248	216,445	131,719	2,483	660					1	5	
国際高科大	2.3			4,308		200	85,000	45,000	660	420			3			4	
鶴見大	2.5	1.1		3,999	36	654	180,000	85,000	2,909	1,247		1				5	
国立音大			1.5	3,939	57	556	43,371	39,847	384	310	0						1982年度分
和光大	2.4			3,859		175	74,767	21,087	986	245						3	
文教大	3.5			3,644		246	108,569	19,715	447	239							
日本工業大		1.5		3,411	31	131	1,43,185 2,31,229	1,14,196 2,87,233	607	341							和洋図書は中央館分 ②個人研究室分散分
相模女子大			1.3	3,200		191	99,059	24,203	1,134	143			3				
芝工大		1.11		2,965		123	56,727	60,15	225	232							
女子美大			1.3	2,862		271	90,163	23,615	512	685	0						短大併設
東京女子大	1.7			2,562	29	206	179,736	85,568	392	309	0					19	短大図書館は中央館 に併設して、現在整理中
桐野女子大			1.1	1,757		202	41,770	58,35	820	63							
城山歯科大		1.1		1,039	31	480	29,256	16,074	344	484	0					1	短大図書館は中央館 に併設して、現在整理中
女子学院大		1.1		860		223	27,309	47,82	103	43							短大図書館は中央館 に併設して、現在整理中

分科会報告書作成のためのアンケートに御協力下さい

A. 一般項目

大学名 _____

学部・科数			本任対象人数			資 料										
人文学系	理工系	他(美術音楽)	学 生	院 生	教 職 員 (専任)	図 書		継続貸入 タイトル数		中央館集中	分散(数)			別置の別整理の文庫・コレクション		
						和	洋	和	洋		分館	学部図書室	研究所	無	有(数)	

- 注 1. 昭和58年度末時点を記入
 2. 学部・科欄は、例、1学部3学科の場合 1・3のように書く
 3. 分散(数)は、例、3学部それぞれに独自の図書室がある場合 3

B. 相互協力関係

年度	文献複写(件数)													現物借 (冊数/件数)	他機関 紹介(冊)	専任担 当者数		
	外部からの交付					謝絶 件数	料金決済 時期	外部への依頼										
	国内				国 外(計)			方 法	国内				国外					
	国 公	私	その他	計		所 属 機関	香 港 香港		国 公	私	国 会	その他	計	B L I D	直 接	その他	計	
55						1.	1.	1.										
56						2.	2.											
57						3.	3.											
58						4.	4.											

- 注 1. 昭和55-58年度のデータ記入 昭和58年度のデータが出ないところは空欄でよい
 2. 謝絶理由 1. 所蔵なし 2. 密本中 3. 貸出中 4. 言語事項不備 5. その他
 3. 料金決済方法 1. 切手 2. 現金 3. 郵便振替 4. 銀行振込 5. その他
 4. 専任担当者は、独立担当制以外の場合は、下記の通り該当人数を割り出して記入
 例、6人、1週間、毎日1人、ローテーション → 1人
 5. 文献複写の交付・依頼に関して、内訳を作っていない場合は計の数にだけ記入して下さい
 6. 文献複写に関して、依頼先から謝絶されたものも、依頼の数に含めて下さい
 7. 国外にある資料と、国内の機関、業者等を通じて取り寄せる場合は、国外の数に入して下さい
 8. 一件の交付のもの、三件に依頼した場合は、依頼は三件として数えて下さい
 9. 依頼先の国外・その他については、できれば、個々の機関名と裏面に記入して下さい
 10. 判及と1はあっても、件数がない場合は、0と記入し、判及そのものは、空欄のままにして下さい

C. 分科会参加者より 相互協力の現状、異感に関して一言(意見・提言・苦言・本音・感想...)

アンケート (別紙)

大学名 _____

D. 文献複写業務に関して、計数面については、把のぬい実態と、少しでも浮かび上からせてほしいとの声とむとに、アンケート(別紙)と考えましたので、御協力下さい。

I. あなたの館で、複写業務を依頼する時に、依頼先が比較的集中していると思われる館がある場合、依頼先別に、その決定のポイントになり、下記の項目と次の中から選んで、優先順位を考えて書き入れて下さい。

1. 距離的近さ ロ. 手続きの簡便さ ハ. 料金の安さ
 ニ. その館にだけユニ-7資料にから ホ. 何らかの協力制度の下の館同士にから
 ヘ. 館員同士個人のコネクション ト. 事務処理の信頼性 チ. その他

種別 優先順位 1-8番程度	1	2	3	4	5	6	7	8
A 館								
B 館								
C 館								
D 館								
E 館								

* 依頼先、優先順位欄又は、10位数にだけ記入して下さい。

II. 1. 文献複写に関して、あなたの館が依頼を受けることになり、理由として考えられる項目を上記 1.~4.の中から該当するだけ選んで、順位を考慮して記入して下さい。
 (個々には、依頼元により、順位は異なると思いますが、館の全体的状況と判断して、記入して下さい)

1. () 2. () 3. () 4. ()
 5. () 6. () 7. () 8. ()

2. 複写の受付に関して、特定の館からの集中と見て取ることもできず、そう思われる館の数だけ下の数字に○をつけ、できれば、その館からの受付件数と、その順位に () に記入して下さい。(例、3館ある場合は、① (件) ② (件) ③ (件))

1. (件) 2. (件) 3. (件)
 4. (件) 5. (件) 6. (件)

* 貴館の年間受付件数 [件]

㊦ アンケート B 項目の追加不可、お答え下さい。

1. 外部からの複写受付の料金はいくらですか (円)
 2. 複写依頼に際して、特定の用紙、様式がありますか。 1. ある 2. ない
 1. の場合、簡単に説明してください。

3. 学内の別館、学部図書室、研究所等間で、何らかの相互協力が行なわれ、そのための制度もあるところは、簡単に概容をお書き下さい。

ドイツ語2000年のすべてを凝縮した

マイヤー大百科事典/第9版 本文全25巻完結!! Meyers Enzyklopädisches Lexikon

〈9., völlig neu bearbeitete Auflage〉
in 25 Bänden, 1 Atlasband, 6 Ergänzungsbände

Band 1—25

セット定価 414,000円
(各巻単価 16,500円)

サイズ 157×247 mm 背革表紙・本クロスの豪華装丁
収録見出し 25万項目 図版2万6千図 各巻約900頁

Band 27 : Atlasband 〈既刊〉 定価 22,680円

サイズ 255×375 mm 見出し約12万 626頁

『マイヤー大百科事典』は、「マイヤー」や「ドゥーデン」の版元である Bibliographisches Institut AG, Mannheim がその伝統を踏まえ、総力を挙げて刊行したドイツ語で書かれた今世紀最大の規模と最高の内容を誇る権威ある大百科事典です。

本文全25巻は1979年秋完結いたしました。すべての分野のドイツ研究者、研究室、資料室、図書館に必備の図書として、おすすめいたします。

☆ ————— ☆ ————— ☆

補巻(Die Ergänzungsbände) 刊行のお知らせ

本文全25巻およびアトラス(第27巻)に引続き、6冊の補巻が刊行されております。
内容は次の通りで分売もいたしますが、ぜひ全巻6冊セットでお揃えいただくようおすすめいたします。

Band 26 : Nachträge 「補遺」

Band 28 : Personenregister 「人名索引」

Band 29 : Bildwörterbuch Deutsches-Englisch-Französisch
「独・英・仏図解辞典」

Band 30 : Deutsches Wörterbuch(A-F) 「ドイツ語大辞典」

Band 31 : Deutsches Wörterbuch(G-N) 「ドイツ語大辞典」

Band 32 : Deutsches Wörterbuch(O-Z) 「ドイツ語大辞典」

○分売価格は各巻16,560円です。

(Bibliographisches Institut / Mannheim)

日本総代理店 日本出版貿易株式会社

本社 〒101 東京都千代田区猿樂町1-2-1 ☎(03)292-3751

九州営業所 〒812 福岡市東区箱崎1-30-12(中島ビル) ☎(092)651-3785

筑波営業所 〒300 土浦市城北町16-18(北辰ビル) ☎(0298)21-9138

各種雑誌合本
図書修理
和本修理・裏打ち
帙・新聞製本
書類・業績集等の整理製本
印刷・コピー文献複写等



諸製本



(とじ) オーバーソーイング ミシン
クリートソーイング

手綴等 すべてOK!

創業30年

最高の技術者をそろえて今年も飛躍します

日本図書製本株式会社

本社 東京都江戸川区東小岩1-30-4

工場 東京都江戸川区北篠崎町2-248

Te l : (03)670-8631(代)

編集後記

報告書作成を決定したのが昭和58年10月、「夏休み前までには」が、「12月までには」になり、結局発行は昭和60年3月になってしまいました。内容がいささか古めかしい部分もありますが、とにもかくにも創刊号を出せたことでほっとしています。編集なかばで入院された山口氏にも喜んでもらえることでしょうか。分科会に参加したこと、又編集に携わったこと自体が、大きな相互協力だったかと、改めて思われる昨今です。

相互協力研究分科会報告 創刊号 (昭和55年～昭和58年度)

発行日	昭和60年3月10日
発行	私立大学図書館協会 東地区研究部会 相互協力研究分科会
制作代表	栗屋皓子
編集委員	安蒜 英雄 出村 豊 市村 吉克 小山 洋子 久保田安子 宮崎日出子 村田 基宏 小川 圭子 鈴木 誠 山口 武義
印刷	菅原印刷株式会社 東京都千代田区内神田 2-10-11 ☎ 03-252-3845

※本誌に対するお問い合わせは

〒230 神奈川県横浜市鶴見区鶴見 2-1-3

鶴見大学図書館： 鈴木 誠

(鶴見大学 ☎ 045-581-1001) まで

スエッツは外国雑誌、シリーズものの スペシャリストです。

80年の歴史をもつオランダのスエッツ・アンド・ザ・インテグレーション社の伝統ある
サービスが日本でもご利用いただけます。



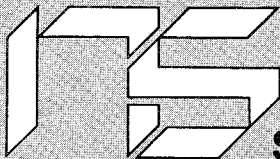
全ての外国雑誌が発行後、2週間で日本の図書館に入っているという程には
参りませんが、少くとも2-3週間で大部分が入っているお客様もあります。

外国雑誌は、より速く、まとめて
欠号がなく、図書館に到着するべき
だと、スエッツは考えます。

スエッツ社の“ファースト”集中管理システム6大特徴

- 1 “ファースト”方式では雑誌の各号はアメリカ、オランダのスエッツ社に集められ、オンラインで集中管理された後、日本の図書館へ航空便で送られます。
- 2 欠号、延着はスエッツが監視、発見し少くとも発行後2週間以内には版元へクレームいたします。
- 3 オランダよりは毎週一回、郵便局のSAL便で貴館へ直送いたします。現在では約一週間で到着しております。
- 4 各誌の包装はオランダで開包され強化包装のカートンにつめかえられます。また同時に住所の表示も英文と日本語の2ヶ国語の判りやすいものに代われます。
- 5 各便にはタイトル、巻号数、冊数を明記したパッキングリストが入っています。
- 6 2ヶ月に一度すべてのタイトルの入荷状況、クレーム状況を累計した一覧表、“ファースト”累計報告書が送られます。

世界の専門誌と図書館をむすぶ



**NIHON
SWETS INC.**

日本スエッツ株式会社

東京都渋谷区神宮前6丁目19-16 Koshi-Ichi Bldg. 406
越一ビル 406号 〒150 6-19-16 Jingumae, Shibuya-ku
電話 東京(03)486-0701 Tokyo 150 Japan
Telex: J27328 Phone: (03) 486-0701
Telex: J27328 SKKTOK Telex: J 27328 SKKTOK

本社：オランダ・リッセ市
支社並びに事業所：英国(オックスフォード)、フランス(パリ)
北米(フィラデルフィア近郊、バーウイン)、南米(ブラジル、リオ
デジャネイロ)、極東(東京)

資料請求書

当社の事業案内、各種サービスの内容案内等資料をお送りします。(無料) 該当すべきか所に○印をつけて下記へお送り下さい。

- 日本スエッツ株式会社誌 スエッツ“ファースト”システムサービス案内
 スエッツ情報資料見本

東京都渋谷区神宮前6丁目19-16 越一ビル 406号 ☎150
日本スエッツ株式会社 TEL. 486-0701